大黒市黒客クラブ戦記

川島奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大黒市黒客クラブ戦記

【Ｎコード】
Ｎ３７６７Ｍ

【作者名】
川島奏

【あらすじ】
大黒市に小此木優子と天沢勇子が引っ越して来る１年前。大黒市第三小学校においてある１つの電脳クラブが結成された。名は『大黒市黒客クラブ』。わずか１年足らずで大黒市のトップクラブにのぼりつめた『黒客』だが、その歴史は他校のクラブとの激しい電脳戦争の繰り返しだった。その戦いの記憶が今、紐解かれる．．．．．．

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　命名権は誰の手に？（前書き）

この物語は、此花耀文先生の『電脳コイル　プロローグ』に続いて始まるという設定です。未読の方は是非１度、『プロローグ』の方もお読みになってください。此花先生からも、この作品を仕上げるにあたって少なからぬ協力をいただきました。改めてここでお礼を申し上げたいと思います。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　命名権は誰の手に？

２０２５年　９月

夏休みはあっという間に終わり、沢口ダイチの通う大黒市立第三小学校ではこの日から新学期が始まる。この夏は色々なことが起こったが、中でも衝撃的だったのはダイチ達の同級生、葦原カンナの事故死だった。それはダイチの心にも傷跡を残していた。始業式で先生がその事故の概要を話していて、ダイチはそれをまた噛み締めた。カンナの死は自分にも責任があったんじゃないかと。

普段はプラス思考で過去を引きずらないダイチだが、同時に責任感も人一倍強い。今回の事は長い間胸につかえ続けていた。実は夏休みの後半も、ダイチは家にこもりがちだった。メタバグ狩りなど、することはあるのだがどうもテンションが上がらない。その原因の１つはフミエだった。フミエもカンナの事故死のショックを受け、その責任を背負っていた。ダイチが外を出歩けば、いつもフミエと出会い張り合うこともできる。しかしフミエもダイチと同じように気が塞いでおり、外に出る回数も減った。外を歩いてもフミエをぎゃふんと言わせることができない。自然にダイチのモチベーションも下がり、２人してうつろな夏を過ごしたのだ。

しかし新学期が始まれば話は別だ。フミエと同じクラスのダイチは否が応でも毎日顔を合わせる。そして、お互いがこの腑抜けた自分を相手に見せることができないと思っていた。ダイチは気分を切り替えて、またいつも通りの生活に戻ろうと決意する。もちろんカンナのことも忘れない。いずれどこかでその罪滅ぼしができればいいとダイチは思った。

そしてダイチは夏休み中に考えていた計画を実行しようとしていた。それは電脳クラブを結成すること。今までメタバグ集めはせいぜいデンパを伴って行くぐらいだったし、どうもそれでは効率が悪

い。さらにフミエの妨害のおかげでなかなか思うようにメタバグが集められなかったのが、これまでのダイチだった。そこでダイチは思いついた。電脳技を共有し、一緒にメタバグを集められる仲間がいれば良いんじゃないかと。さらにそのメンバーで互いに電脳技を鍛え上げれば、目下の敵であるフミエなど脅威ではなくなる。実はそのことはガチャギリとナメッチにメールし、デンパにも直接話していたが、前述したようにダイチ自身のテンションの問題から頓挫していた。

始業式の日は午前中で学校は終わりである。ダイチはその話をするためにガチャギリ、ナメッチ、デンパを放課後の教室に呼び出した。

「用件は前にメールで伝えた通りだ。オレはこのメンバーで電脳クラブを結成したい」

ダイチは自分のイスに座りながら、3人を見回しながら宣言した。

「随分遅かったな。それ聞いたの夏休みの中盤だぞ。オレはてっきりそのまま放置するのかと思ってたが」

「ああ。ちょっと色々あってな。始動が遅くなったのは悪いと思ってる。すまなかった」

ガチャギリの言葉にダイチは少し動揺し、そして申し訳なさそうな顔で謝った。

「そんな謝らなくてもいいけど。まあ、オレもお前のメールを見て悪くないなとは思っていた。電脳クラブを結成した方がこれも貯まりそうだからな」

ガチャギリは笑みながら親指と人差し指で輪っかを作る。おそらくメンバーが多い方が儲かるということだろう。

「オレッチも異存はないッス。たまに校区外に出かける時なんかさ、他の学校のメガネ使いが怖いッスからね～。それならこうやってみんなでメガネのスキルを上げるっていうのは良いことだと思うッス」

「僕も賛成だよ。みんなでメタバグを探すのって楽しそうだからね。でも、あんまり危ないことはしたくはないけど」

ナメッチもデンパも一応ダイチに賛同する。全員が同じ生物部に所属ということもあってか、あっさりとクラブ結成の話がついた。
「このメンバーだけでいいんスか？オレッちはハラケン辺りも良いと思うんスけど」
「ああ、それはオレも思う。目立たないキャラだが良いもの持っていると思うぜ、アイツは」
ナメッチとガチャギリはハラケンをメンバーに入れたいらしかった。しかしダイチの方はそれを聞いて難しい顔になった。
「ん～。ハラケンなあ。お前らも知っているだろ？アイツ、カンナが亡くなって相当なショックを受けてることを」
「そうだね。葦原さんとはいつも一緒だったからね。今日も心ここにあらずって言うか、ずっとうつむいているままだったし。あれから2週間以上経つのに」
ダイチの言葉にデンパが反応した。そのデンパだってカンナの死にはかなりのショックを受けたし、ハラケンのショックの大きさを思うだけで涙が出てきそうだった。デンパは人の感情に敏感だ。
「まあな。今はそんな気分じゃねえか。惜しい人材だけどな」
「ハラケンはもう少し時間が必要だろう。折りを見て誘うことにするわ」
ガチャギリが惜しむように言ったが、ダイチはまだハラケンを誘うのは無理だろうと判断した。
「そうか。じゃあそれはそれとして、クラブ名を決めないといけないな」
「クラブ名？」
ガチャギリの言葉に3人が聞き返した。
「ああ。どこの電脳クラブもクールな名前をつけてるだろ？オレたちもなんかクールな名前を考えようぜ。まずは創始者のダイチからなんかアイデア出してくれよ」
「オレから？」
ダイチはいきなり話を振られて、その場で1分近く考え込んだ。考

え込んだ末にぽろっとつぶやくように言った。
「う～ん。『水田二期作』」
「みずたにきさく？」
ブっと吹き出しながらナメッチが聞き返した。
「お前もっとまじめに考えろよ。クールな名前って言ったろ。なんでそんな百姓みたいな名前なんだよ」
「頭に降りて来たんだから仕方ねえだろ。そう言うお前は何て名前にするつもりだ？」
ダイチは次はガチャギリの意見を聞く事にした。
「そうだな。『円元ウォンダラーズ』ってのはどうだ？」
「エン？ゲン？ウォン？ダラーズ？」
ナメッチが確かめるように繰り返す。しかしガチャギリ以外のメンバーは意味がわからなかった。３０秒ほど考えてダイチがようやく気付く。
「お前、それ各国の通貨単位並べただけだろうが！」
「あ、気付いた？スゲー金が集まりそうな良い名前だろ？」
「バカ言えよ。却下だ。オレたち『円元ウォンダラーズ』なんて名乗った時の、今のオレたちと同じようなきょとんとした相手のリアクションが目に浮かぶわ！もっとキャッチーな名前じゃないとダメだろ」
「『水田二期作』のどこがキャッチーなんだ？」
そんなダイチとガチャギリの言い争いはこの後５分ほど続いた。そうしてわかったのは両方譲らないということだった。
「まあいい。じゃあデンパは何て名前がいいんだ？」
次にダイチはデンパの方を見て訊ねる。
「僕？そうだね。う～ん。エレキトリックウェーブっていうのはどう？」
「エレキトリックウェーブ・・・・・・・つまり日本語で電波だな。」
ガチャギリが翻訳した。
「お前、自分のアダ名をクラブ名にするなんて、意外と野心家だな」

少し驚いたようにダイチはデンパを見る。
「でも、『水田二期作』よりはよっぽど良いな」
「んだと～！『水田二期作』は譲らんからな！」
また言い争いになりそうだったので、ガチャギリはそこでダイチを制止した。
「待て待て、まだナメッチ大先生の意見を聞いてない。とりあえず全員のアイデアを聞いたところで、そこから議論に入ろうじゃないか」
「お、おうそうだな。オレたちにはまだナメッチ大先生がいたんだもんな。大先生ならオレたち全員が納得する名前を考えてくださるだろう」
そうしてナメッチの3人の視線が集まった。なんでそんなプレッシャーをかけられないといけないんだとナメッチは思ったが、実はこれまで温めていた自信のある名前を用意していた。
「そうッスね・・・・・『デビルハッカーズ』」
少し抑えめの声でナメッチは発表する。しかしナメッチには自信があったので言ってから半笑いになった。
「デビルハッカーズ？」
「デビルハッカーズ？」
「デビルハッカーズ？」
3人はナメッチの方を見て固まった。一瞬その場の空気が凍り付き、ナメッチがしてやったりと思ったその時だった。
「なんかなあ。とりあえずらしい名前をつけてみました感が見え見えで、寒い名前だぜ」
「ほんと、まさかこの期に及んでデビルなんて使い古されたナンセンスな言葉選ぶなんて。ダメなヤツは何をしてもダメなことがよくわかったな」
「ごめん。ナメッチ。僕もデビルなんて名乗るのはイヤだよ」
「えええええっ！？」
次から次へとナメッチ案への苦情が飛び出し、ナメッチはしゅんと

なった。ナメッチもまさかデンパにまでけなされるとは思っていなかった。
「まあ、これで一応出そろったな。メモっとくか。この『デビルハッカーズ』っていうのはどうする？候補に入れるのもためらわれる名前だと思うんだが。すげーな。まだ『水田二期作』の方が良いと思える」
ガチャギリがウインドウを開いて先ほどのアイデアを打ち込みながら言う。
「入れといてやろう。ダメなヤツの思考の悪い見本として、明日これプリントアウトしてみんなに配ろうぜ。明日からこいつはデビルナメカワだ」
「おお！いいなそれ。よし、早速これ刷って明日教卓の上に置いておくか」
ダイチとガチャギリの悪ノリがついに始まった。ナメッチはこの2人を止めることはできず、「ああ」と顔を蒼くしている。
「でも、結局クラブ名は何にするの？」
デンパがダイチに訊ねた。
「そうだったな。でも結局オレたち自分の意見を譲らないだろうからな。ここはくじ引きか、第三者の意見を聞こう」
ダイチがそう言った時、教室にウチクネ先生が入って来た。
「おい、何してるんだ？今日はクラブ活動もないだろう？さっさと帰りなさい。」
ウチクネがダイチ達に向かって言う。ダイチはそれに「ういーす」と軽い返事をして思いついた。
「なあ。もうこの際アイツに決めてもらわね？そろそろ腹も減って来たしよ。早く家に帰るためにも、ここはこの候補の中からアイツに選んでもらって、それで決定する。後で文句を言わない」
「まあ、いいぜ。アイツに決めてもらうっていうのはシャクだが。それでもくじ引きとなんら変わらねえしな」
ガチャギリもウチクネという人選はどうかと思ったが、とりあえず

同意した。
「僕もいいよ」
「・・・・・・オレッチも」
デンパと意気消沈のナメッチが同意する。ダイチもうなずいてウチクネを席まで呼ぶ。
「先生ちょっと来てください。実はオレたち電脳クラブを結成しようと思うんスけど、なかなかその名前が決まらなくて。先生この中から1つ選んでもらえますか？」
そう言うとダイチはウインドウをウチクネに渡した。
「僕が選んでいいの？ほう、なかなかユニークな名前ばかりだね。ブッ、水田二期作？これも捨てがたいな。あ～、でも僕が一番好きなのはこの『デビルハッカーズ』かな」
ウチクネの言葉にダイチとガチャギリは「うえっ！？」と信じられないような目を向けた。対照的に目を輝かし出したのはナメッチだ。
「先生、それ本気で言ってますか？」
「うん。これが普通に1番カッコ良くない？」
ダイチ達の動揺をよそに、ウチクネは平然と言い放つ。
「・・・・・・こいつマジあり得ん。前から感じていたがこいつからはダメのオーラがびんびんと出てる。何でこいつに決めさせたんだ？」
ガチャギリは頭を抱えながら、小声でダイチに向かって訊ねた。
「お前も同意しただろ！しかしこいつはナメッチと波長がおんなじだ。こいつも明日からデビルウチクネだ。」
ダイチとガチャギリがひそひそとウチクネをけなす。その間ナメッチはウチクネの手を取って、「一生ついて行きます」と誓っていた。
「よし、これでクラブ名が決まって良かったじゃないか。ならさっさと帰るんだぞ。それから『デビルハッカーズ』なんて名前でも、実際のハッキングには手を出すなよ」
ウチクネはそう言い残して教室を出て行った。
「というわけで、今日からオレッチ達のクラブは『大黒デビルハッ

カーズ』で決定っスね」
歌うようにナメッチが言った。先ほどまでとテンションが１８０度変わった。
「アホか！そんな名前にするならこの場で解散した方がマシだ」
「でもさっき先生の決定に文句をつけるなって言ってたじゃないッスか！」
ガチャギリの言葉にナメッチが言い返す。今なら街頭でアンケートをとっても、自分の案が勝つ自信があるので強気になっている。
「勘違いするなよ。多分あのウチクネはお前のドッペルゲンガーだ。お前と同じ思考のヤツがここにいるだけでも奇跡と思え。しかし、その奇跡に免じてせめてデビルは取って『ハッカーズ』にするなら我慢してやるけどな」
あまり言うとナメッチがかわいそうなので、ダイチは妥協することにした。それでもナメッチは「あのデビルがカッコいいのに」とぼやいている。
「しかしそうなると『大黒ハッカーズ』だろ？なんかダイレクト過ぎて安直って言うか、それはそれでイタイ名前じゃねえか？」
ガチャギリがダイチに言った。
「それもそうだな。う～ん。そうだ！ここでお前のアイデアを使おうぜ！」
「円元ウォンダラーズ？」
「じゃなくて、『ハッカー』を他の国の言葉に訳すんだよ。」
円は日本、元は中国、ウォンは韓国、ダラー（ドル）はアメリカの通貨単位である。このインターナショナルな発想をダイチは使おうと思った。
「調べてみるか。しかしな、『ハッカー』ってどこの国でも『ｈａｃｋｅｒ』じゃねえのか？『ハッカー』の日本語なんて存在しないだろ」
「やってみねえとわからねえじゃねえか」
ダイチの言葉に、ガチャギリはネットで検索をかけてみる。数分後

その結果が出た。
「ああ。韓国語で『？？』。読み方わからねー。お？これ使えんじゃないか？」
「どれだ？」
「中国語だ。漢字で黒い客と書いて『ヘイクー』」
ガチャギリはダイチにウインドウを示した。
「黒客（ヘイクー）。おお！大黒市黒客クラブか。なんか梁山泊みたいでいいな！」
「そうか？でもこれまでで1番しっくり来てるな」
ガチャギリがナメッチとデンパの方を向いた。
「僕もそれでいいよ。字もいいしね。」
「いいんじゃないっスか？でもしいて言うならデビル黒客の方がカッコいいと思うけど・・・・・・」
デンパとまだ『デビル』に未練を残しているナメッチも賛同した。
「よし、オレたちは今日から大黒市黒客クラブ、通称黒客だ！」
「おお！」

かくして『大黒市黒客クラブ』は誕生した。後に大黒市電脳史上トップクラスの実力を持つとささやかれるクラブの伝説はここから始まったのである。

翌日。
「お！来たわね。悪魔の化身、デビルナメカワ！」
ナメッチは学校に着いて朝一番にフミエに声をかけられ、クラスのみんなからはどん引きされた。ナメッチはあだ名とダイチ達の恐ろしさを思い知ったのであった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２　夢は大きく

クラブ名が『黒客』と決まり、いよいよ本格的活動に入ろうと意気込むダイチ。しかし具体的にどのような活動をして行くかはまだ決まっていなかった。そこでダイチは生物部のクラブ活動の時間にメンバーを集め、そのことを話し合うことにした。場所は第２理科準備室だ。

「というわけで、『黒客』のこれからの活動方針を決めたいと思う。基本的にメタバグを集め、それを金にしてツールを揃えて電脳技を磨くということを中心にしたいと思うが、どうだ？」

「異論はない。ただ、どうやってそのメタバグを集めて行くかが問題だ。４人で探すということは、必然的に分け前も４等分だからな。つまり、個人でバラバラに探していた時の４倍は探さないといけないわけだ。だからと言って４人がバラバラになって探したところで、それは今までと同じでクラブを組んだ意味がない」

ガチャギリはダイチの掲げた基本方針に概ね賛同しながら、クラブで活動する時の問題点もあげた。ナメッチとデンパもうなずきながら２人の会話を聞いている。

「だな。つまり鉱脈レベルの数のメタバグを探さないと、クラブの活動費も捻出できないということになるな。しかし最近はメタバグの数も減って来ているように思えるが、果たしてそれが可能なのか。他の電脳クラブはどうしてるんだろうな？」

「一番ポピュラーな方法は戦争だ。他のクラブのテリトリーに侵攻して、そこにあるメタバグをがっぽり奪い取る」

ダイチの疑問にガチャギリが答える。

「それスッゴク過激っスね。」

ナメッチが腰を引かせながら言った。

「まあな。それからこの学校の生徒から巻き上げるって方法もある」

「何？第三小の生徒からメタバグをカツアゲするってことか？」

ダイチが訝しみながら訊ねる。それはさすがに卑怯だと思った。
「カツアゲとは違う。言ってみればショバ代だ。うちの学校の生徒にはオレたちにメタバグを定期的に上納させる。その見返りとしてうちの生徒が他校のクラブからカツアゲされるようなことがあれば、オレたちがそいつらに殴り込みに行ってぶちのめす」
「まるでヤクザだね。」
ガチャギリの言葉にデンパが感想を言った。
「ああ。電脳クラブっていうのは大体そういう性質を帯びている。やっていることはヤクザの延長線上にある」
「なるほど。どちらをするにしても、ある程度の電脳力を持ち合わせていないとダメだということだな。やっぱ競争率は激しいんだろ？」
ダイチが話を聞いて思ったのは、そう甘い世界じゃないだろうなということだった。大黒市は全国でもトップレベルのメガネユーザーがひしめいている。
「もちろん。力のないクラブはどんどん淘汰されていく。メガネが壊れるのも覚悟しないといけない。ある程度の損傷なら、お年玉2年分でカタはつくがな」
「つまり、やるなら勝ち続けるしかないと。中途半端な気持ちで戦争をしようものなら、儲けるどころか赤字を出すだけだってことだな？」
「そういうこと」
ダイチは話を聞いて考え込んだ。道は思った以上に険しそうだ。しかしウラを返せば、この街でトップにのぼり詰めるということは、全国でもトップクラブになれるということでもある。それはダイチにとってこの上もなく魅力的だった。そのくらい大きな夢を見てもいいんじゃかいかと思った。
「ちょっといい？」
沈黙を破るようにデンパが訊ねた。ダイチは「なんだ？」とデンパを見る。

「僕はあんまり戦争とかやりたくないな。人を傷つけるってことでしょ？それに自分たちもメガネを壊されるかもしれないなんて」
「確かに、お前は危ないことはしたくないって言ってたな」
ダイチはそう言ってまた考えこんだ。デンパはメタバグの音を聞き分けてその場所を見つけるのが得意だが、電脳力という意味ではあまり長けていない。下手に戦争に駆り出しても、すぐにやられてしまうのではないかと思った。
「なあ。それならデンパは戦争には基本的に参加しない控え要員ってことにするのはどうだ？どのみちこいつのメタバグの音を聞き分ける能力もほしいだろ？コイツのメガネが壊されるのは一番手痛いと思うんだが」
ダイチはデンパにはクラブを抜けてほしくはないと思っていた。もちろんそれは音を聞き分ける能力云々を別にして、かけがえのない友達だからだ。
「まあ、仕方ないな。それで行くか。となると戦闘要員は３人か」
「少ないか？」
「いや、３~４人が相場だから大丈夫だろ」
ダイチとガチャギリは残るナメッチを加えたメンバーで戦闘に出ること決めた。しかしそこにまた空気の読めないナメッチが頭をもたげる。
「あのう」
「なんだ？デビルナメカワ」
「オレッチも戦闘に参加したくないっス」
おそるおそるという風にナメッチが言う。
「ああっ？今この３人で戦闘に出るって決めたところだろうが。人がやるぞって意気込んでいる時に水差すようなこと言うんじゃねえよ！」
ダイチがナメッチに怒鳴った。
「なんでデンパとオレッチでそんな扱いが違うんスか！オレッチだって怖いもんは怖いんスよ！」

「お前とデンパは同じじゃねえよ。お前にメタバグを見つけるような能力があるのか？正直お前のメガネが壊れたって、オレたちは痛くもかゆくもねえんだ」
「ひでえ！」
ガチャギリの言葉に、ナメッチはもう泣きそうだった。
「お前な。ここで立ち上がらなかったら一生ヘタレのままだぞ。いいのかそれで？オレたちはお前の将来を悲観して言ってるんだぞ」
「大きなお世話っスよ。ヘタレで何が悪いんスか。ヘタレ万歳」
ナメッチはこの期に及んで開き直った。
「そうか。しゃーねえ。じゃあお前がアイコのこと好きだってこと、みんなにバラすか」
「は？ちょ、ちょ、ちょ、なんでそのこと知ってんスか！？」
ダイチの言葉にナメッチは思いっきり動揺を見せた。
「オレ様をなめんじゃねえよ。お前を手なずけるために、何か弱みを握っておいた方がいいと思って、この前ちょっとハッキングでメガネの中のデータ見させてもらったんだよ。そしたら出るわ出るわ。書きかけのラブレター。数にして２３通」
「えええええっ！？」
ナメッチはそれを聞いて絶叫した。
「お、おい。それマジかよ。お前その写しとか持ってねえのかよ！？」
ガチャギリが議論そっちのけでナメッチのラブレターに食いついて来た。
「あるぜ。うーんと。ほら、これとか傑作だと思わんか？」
ダイチもにーひっひっひと笑いながら、ガチャギリにウインドウを出してその内容を見せた。
「どれどれ？……ギャハッハッハ！マジ受けるコイツ。イタすぎ。たとえ明日地球が滅びるってことになっても、こんなにイタいラブレターオレには書けねえ」
ガチャギリは笑いすぎて涙が出て来ていた。逆に顔を真っ赤にして

うつむいているナメッチがいた。
「ちょっと2人とも。ナメッチがかわいそうだよ。2人だって一生懸命書いたラブレター見られて笑われたらイヤでしょ！」
デンパが2人をたしなめる。デンパは人をバカにするような笑いは嫌いだ。
「ああ、悪い悪い。つい悪ノリしちまった。でもな、こんな大事なラブレターをハッキングされるなんて、ナメッチ君も脇が甘いと思うよ。黒客でビシビシと電脳力を鍛えれば、こんな恥ずかしい思いをしなくて済むようになるんだ。だから一緒に戦争に行こうぜ」
ほとんど反省していないダイチが、改めてナメッチを戦争に参加するように促した。
「どうせ、ここで断ったら前みたくこのラブレターを印刷して教卓の上に置いておくんでしょ。そんなの、断れるわけないじゃないッスか」
ナメッチはぶつぶつとつぶやくように言う。もはやこのダイチの魔の手から逃げられるとは思わなかった。
「おお！喜べ諸君。この生ける伝説として名高いメガネユーザーのナメッチ大先生が、我々の不仕付けな申し出を快諾してくださったぞ」
「おお。なんとありがたいことか。大先生がいればこの黒客が戦争で負けるなどあり得んことだ。心から感謝していますぞ」
今度はナメッチを持ち上げ始めたダイチとガチャギリを見て、なんて調子のいい人達なんだとデンパは呆れた。
「さてと、話に戻るか。さっきは言い忘れたが、他校のテリトリーを侵攻するにしても、この学校の生徒からショバ代を巻き上げるにしても、今はまだやめといた方がいいぞ」
「どういうことだ？」
切り替えてガチャギリとダイチがまじめな話をし始めた。
「オレたちはまだこの学校の中でも頂点を極めていない。そういう活動が許されているのはその学校を代表する存在になってからなん

だ。これは電脳クラブ界の暗黙の了解になっている」
「ふーん。暗黙の了解ね。確かにまだ6年の先輩のクラブもあるわけだし、勝手にそんなことを始めてもイテコまされるだけだろうな」
ダイチ達は5年だが、今の6年の中でもいくつか電脳クラブがあると聞いていた。まずはそのクラブに実力で上回ることが目標となる。
「ああ。だからオレたちが次代の第三小を代表するクラブとして6年のクラブに公認される必要がある。今この学校の代表格は、生物部の先輩で構成される『大黒トライフォース』だ。まずはこのクラブに挑戦しよう。そこで先輩を倒すことができれば、今度から対外試合に出ることができるようになる。」
「なるほど。で、いつ挑戦する？」
「11月の文化祭で、生物部の研究発表があるよな。それが終われば先輩は生物部から晴れて引退することになる。その記念に一戦交えるっていうのはどうだ？どのみち今すぐじゃ実力が違いすぎて相手にならないだろうからな」
今は新学期が始まったばかりの9月で、それまでには十分時間はある。その間に黒客は自分たちで技を磨いて、満を持して先輩に挑戦するということだ。
「わかった。それで行こう。じゃあまずこの2ヶ月はひたすら技を磨くってことで。そして最終的な目標は、大黒市で頂点を極めることだ！」
「おう！」

こうして黒客の最初の目標が決まった。2ヶ月後に控えた先輩のクラブへの挑戦。そのためにダイチ、ガチャギリ、ナメッチの戦闘員3人は、来る日も来る日も厳しい特訓に明け暮れた。雑誌やネット上に載っているメガネの裏技を研究し、それを自分たちのものにしていく。元々才能に溢れていた3人はその情熱を持ってして、みるみるうちに力をつけていった。

「ねえ、デンパ。文化祭の研究発表が近いこの忙しい時期に、なんであのズッコケ3人組はクラブに出て来ないの？」
その間ほとんどクラブに顔をだしていなかった3人を、フミエは訝しんでいた。
「夢を追いかけているんだよ。途方もない大きな夢をね」
「はあ？」
この時のフミエには、ダイチ達が大黒市のトップクラブを目指していることなど知る由もなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３　下克上！第三小の頂点へ！！

２０２５年　１１月

あっという間に月日は流れ、文化祭での生物部の研究発表も終わり、いよいよ６年生は引退というはこびとなった。この日は放課後にその送別会が行われていた。

「先輩。お疲れさまでした。そして今までご指導いただきありがとうございました」

ダイチはそう言いながら顧問のマイコ先生が用意した花束を先輩達に渡す。この日集まっているのは引退する６年生が３人と、黒客メンバー、そしてフミエとハラケンである。先生と５年生は拍手を先輩に贈った。

「おう。ありがとな。新部長ダイチ。これからはお前が生物部を盛り立ててくれよな」

現部長がダイチの肩をしっかりと掴んで思い託す。新部長は６年生とマイコ先生が相談して決めた。ダイチは統率力もあるし、人を見る目がある。何より部長に収まってもう少し素行が良くなることをマイコ先生は期待していたのだ。

「わっけわかんない。なんでアイツが新部長なのよ」

「まあまあ。フミエもダイチの監視役に副部長に収まったんだし、いいじゃない」

この人事を快く思っていなかったフミエが不満をもらす。それをハラケンがたしなめた。

「さあ、記念写真を撮りましょうか。あら、いっけない。カメラ職員室に忘れちゃった。取ってくるからちょっと待っててね」

「先生頼みますよ。」

呆れたようにフミエに言われながら、マイコ先生は理科室を出て職員室に向かった。子どもだけになったいいタイミングで、ダイチは

先輩に話を切り出す。
「先輩。ちょっといいですか。僕は先輩達を生物部の先輩としても憧れていましたが、同時に電脳クラブ『大黒トライフォース』にも憧れていました。僕たちが前に新しいクラブを結成したのは御存知ですよね？そこで、この引退記念に僕たちと勝負をしませんか？この第三小のトップクラブの座をかけて」
ダイチの話を先輩達はきょとんとして聞いていた。それはフミエとハラケンにしても同じだった。
「何言ってるの？アンタ達が『黒客』なんてダサくてしょぼいクラブを始めたのはほんの2ヶ月前じゃない。先輩達はこの大黒で1年以上スキルを磨いているのよ。勝負してかなうわけないじゃない」
「うっせーな。オレたちも自信がなかったら、こんな失礼なこと言わねえよ。しかし生物部においては年功序列だが、こと電脳クラブの世界は実力主義だ」
「ほう。お前らはオレたちに勝つ自信があると。なかなか面白いことを言うな」
部長がダイチを見据えながら笑った。他の6年生も「マジかよ」と半分冗談のように受け止めている。
「別にかまわねえよ。どうせオレたちがこの学校の頂点にいられる時間は残り3ヶ月ちょっとだ。そんな時間は惜しくもない。それより、後輩にケンカを売られて逃げるのは負けるよりも恥だ。そうだろ？」
「ああ。全力で相手してやるよ」
先輩達もやる気まんまんだった。ダイチ達もついに特訓の成果を発揮できると武者震いをした。
「ありがとうございます。日時と場所とルールはどうしますか？」
「日時は明日の放課後。場所は学校だ。ルールは、そうだな。シンプルにサバイバル方式でどうだ？」
「サバイバル方式？」
「ああ。先に相手を全員戦闘不能にしたチームの勝ちだ。簡単だろ

？それ以外は一般的な電脳戦とルールは同じ。まあ詳しいルールは後でメールするが、とにかく相手のメガネを攻撃して壊すのもアリだ。自動修復のためのお年玉がっぽり用意しておけよ」
先輩達が勝負のルールを決める。ダイチ達もうなずいてそれを了解した。
「あと、ジャッジがいるな。誰かやってくれるヤツはいるかな？」
先輩達が相談を始める。
「じゃあそれ、私がやります」
踏み出して手をあげたのはフミエだった。
「お前が？何かたくらんでいるんじゃなかろうな？」
ダイチがいぶかしげにフミエを見る。
「別に。なんか面白そうだから見物しようと思っただけよ。いいですよね？先輩」
「ああ。やってくれるっていうのなら頼む」
先輩達もフミエはジャッジを務めることに異論はなかった。
「お前、先輩の肩持つんじゃねえぞ。あくまでジャッジなんだからな」
「見損なわないで。それくらい承知してるっての。まあ、せいぜいメガネ壊されないように頑張るのね」
フミエがダイチに返す。その時マイコ先生がカメラを持って戻って来た。
「おまたせ～。あれ？気のせいかしら？この部屋の空気が殺伐としているんだけど」

翌日の放課後。先輩達との勝負を控えたダイチ達は作戦会議を開くために、新校舎の第２理科室に集まっていた。
「ルールは３対３。先に相手を全滅させた方の勝ち。スタート地点はオレたちがここ、新校舎３階の第２理科室。先輩達が旧校舎１階の第１理科室。レーダーの使用は禁止。同じ場所にずっととどまっているのも禁止。それはジャッジのフミエがレーダーで監視してい

る。動き回る時は3人固まって行動しても、1人ずつ動き回ってもかまわない。そこはそれぞれの作戦次第だ」
ダイチが学校の見取り図をウインドウに出しながら言った。学校は新校舎と旧校舎に分かれており、それをつないでいるのは校舎北端にある連絡通路のみだ。
「それなら3人固まって行動した方が良くないッスか？人数が多かったら、襲われても対処できると思うんスけど。」
ナメッチがダイチに訊ねる。
「でもその状態で挟み撃ちにされたら、そこで詰んでしまう。それなら1人ずつ動き回った方が、たとえ1人がやられてしまっても挽回できる」
「そうだな。じゃあ1人ずつ動き回ることにしよう。シンプルに、オレが1階、ガチャが2階、ナメッチが3階をまわるってことで。もちろん、敵に出会ったときは連絡を取り合う。その時は流動的に動こう」
ガチャギリとダイチが話し合って作戦を決めていく。しかしナメッチとしては1人でまわらなければいけないのは少し怖かった。
「もし遠巻きで敵を見つけたときは、仲間に連絡を入れつつ、できればこの電脳レーザーライフルで攻撃してもいい。レーザーだから銃声で自分の位置がバレる心配はない」
「おお、さすが買い物上手。良い武器を仕入れたな」
ダイチがガチャギリを褒めた。武器の仕入れの担当者はガチャギリだ。
「高くついたけどな。だから他は大した武器は用意できていない。あとはハンドガンタイプの電脳銃が人数分と、鉄壁が3枚。それと地雷が3つだな。この地雷はステルス装備だが、オレらのメガネには認識できるよう改造しておいた。くれぐれも味方の地雷を踏むようなマヌケな真似はするなよ。ナメッチ」
ガチャギリが武器を渡しながらナメッチによく言い含めた。
「なんでオレだけに言うんスか。大丈夫っスよ」

ナメッチが自信ありげに返す。この2ヶ月の特訓で鍛え上げただけあって、ナメッチにも戦闘要員としての自覚が芽生えていた。
「ところで、この先輩チームは大黒市の中ではどのくらいの位置づけなんだ？」
「そうだな。あんまり強いって話は聞かないが、中堅クラスなんじゃないか？」
ダイチの質問にガチャギリが返す。つまりこのチームに勝てばとりあえず大黒市でそこそこやっていけるだけの力があるということになる。
「そろそろ準備はできた？」
その時ダイチの目の前にフミエが映っているモニターが現れた。フミエは戦闘には参加しないデンパと一緒に、5年の教室の中から戦いをモニターしている。
「おう。準備はいいぞ」
ダイチが威勢良くフミエに返した。いよいよ始まるなと、メンバーはここで屈伸や伸びをして体をほぐす。
「じゃあ行くわよ。用意、スタート！！」
フミエのかけ声とともに、メンバー達は第2理科室を飛び出しそれぞれの持ち場に向かった。

開始から5分経過し、メンバーはとりあえず自分の持ち場に到着する。3階新校舎のナメッチは窓から旧校舎の様子をずっとうかがっていた。新校舎と旧校舎をつなぐのは校舎北端にある連絡通路のみで、攻撃を仕掛けるためにはお互いこの連絡通路を通らなければならない。なので自然とそこばかりに目がいく。ダイチは連絡通路が警戒され始めては後々やりにくいと、スタート開始直後にダッシュで連絡通路を渡りきってしまっていた。つまりダイチは旧校舎1階、大胆にも敵のスタート地点付近に潜り込んだ格好となっていた。
「うわ、来た」
ナメッチは3階連絡通路を歩いてくる茶髪の先輩を発見した。その

先輩は電脳銃を構えながら慎重にこちらに歩いてくる。それを見て狙撃は無理だと思ったナメッチは、南端の階段を目指した。階段は北端と南端の2カ所にある。ちなみに新校舎は4階建て、旧校舎は3階建てだ。考えたナメッチは南階段から新校舎4階を目指した。

「新校舎3階、連絡通路付近に敵発見。オレッチは今から4階を駆け抜けてその先輩の背後をとるッス。ガチャは南階段から3階にのぼって、その先輩の気を引いてほしいッス」

「了解」

ナメッチがガチャギリと指電話で連絡を取り合った。その先輩を新校舎3階廊下で挟み撃ちにする作戦だ。ナメッチは4階廊下を駆け抜けて北階段に着いた。そこから下の階の様子を確認しながらゆっくり1段ずつ階段を降り、3階北階段、連絡通路前に出た。しかしそこから3階新校舎の廊下を見ても、先ほどの茶髪の姿は見えなかった。焦ったナメッチは廊下の真ん中に立って周囲を見回す。その時だった。

「はい、それまで。残念だったなナメカワ君。君はここで終了だ」

「うえっ！？」

背後から聞こえて来たのは副部長の声だった。電脳銃をナメッチ向けていてる副部長は北階段2階からやって来たのだ。

「甘い甘い。お前の考えていることなんてお見通しだ」

今度は3階廊下に面する教室から先ほど連絡通路を渡って来た茶髪が同じく電脳銃を構えながら現れた。ナメッチの行動は簡単に見破られ、挟み撃ちにされてしまったのだ。

「ほら、降参するならメガネをはずせよ。戦いが終わるまでこれは没シュートだからな。それとも下手に抵抗してメガネのデータを壊される方を望むのか？」

副部長がナメッチに訊ねる。ナメッチは迷った。降参するならメガネは無傷で済む。しかしそれでは自分は何の役にも立たずに終わってしまう。

この戦いに向けた特訓の中で、ナメッチはダイチとガチャギリにこう言い聞かされていた。
「おいナメッチ。電脳戦というのは基本的にチーム戦だ。チーム戦における鉄則は、絶対に諦めないことだ。たとえ自分のメガネが危険に晒されようとな」
「でもメガネ壊されるなんて、そんなの犬死にじゃないッスか。3人しかいないんだから、そのうち1人がやられてしまったら、その時点でチームとして勝ち目がないッスよ」
「バカ言うな。1人がやられてしまったら、その仇をとってやるのが仲間だ。そして絶対の窮地でも、どんなささいな抵抗でもいいからアクションを見せろ。それが後につながるんだ。大事なのは、仲間を信じる事だぞ」

ナメッチはその言葉を思い出し、自然と体が動いていた。
「くっそお！」
ナメッチはまず背後にいる茶髪の目の前に鉄壁をだして攻撃をブロックした。そして副部長に向かってハンドガンとレーザー銃を同時に撃ち込んだ。
「何っ！？コイツ、なめたマネを！」
いきなりの攻撃に副部長は一瞬ひるんだ。ナメッチの攻撃は正確に副部長を捉えていたのだ。頭に来た副部長はショットガンタイプの電脳銃を取り出した。
「消えろ！！」
副部長の叫びと共に、ショットガンの銃声が鳴り響く。
「ぐはっ！！」
ナメッチは後方に倒れ込んだ。至近距離からショットガンを食らったナメッチのメガネは1発で壊れてしまった。
「おい、大丈夫か！？」
ナメッチの背後にいた茶髪が副部長の元に駆け寄る。
「いや、正直大丈夫じゃない。コイツ、あの一瞬でオレのメガネに

正確に何発も銃弾を撃ち込んできやがった。人数では有利になったが、これは侮ってると痛い目を見るぞ」
副部長がそう言った瞬間、廊下の向こう側、南階段で何やら動いているのが見えた。

「ナメッチ、良くやった。お前の死は無駄にしねえ。」
ガチャギリは新校舎3階南階段から、校舎の端にある北階段にいる茶髪を電脳レーザー銃で狙っていた。壁に隠れながら照準をのぞき込み、副部長の隣にいる茶髪のメガネに照準を合わせて引き金を引く。

「伏せろ！」
副部長が茶髪に向かって叫んだ。しかし茶髪がその声に反応して振り向いた瞬間、ガチャギリの放ったレーザーは茶髪のメガネに直撃した。
「うわあ！くそっ、深川か！ただじゃ済まさねえ！」
その攻撃に腹を立てた茶髪は、南階段に向かって駆け出した。ガチャギリはそれを確認して南階段から素早く撤退する。
「おい待て！止まれ！」
副部長は何となくイヤな予感がして茶髪を呼び止めた。しかし茶髪はその声を無視して南階段に突っ込む。その瞬間廊下中に爆発音が轟いた。
「ぐわあ！」
副部長が茶髪の元に駆け寄った時、茶髪のメガネは白い煙を上げながらクラッシュしていた。ガチャギリが去り際に仕掛けたステルス装備の地雷をまんまと踏んでしまったのだ。
「言っただろ。ヤツらを侮ってると痛い目を見るって。」
「……すまん。オレが踏んだのはステルス装備の地雷だった。お前らも気をつけてくれ」
うなだれながら茶髪が副部長に言った。

「ああ。お前の仇はちゃんととってやるよ。それより深川が上か下かどちらに行ったかわかるか？」
「かすかに下の階を駆け抜けて行く足音がした。おそらくアイツは2階だろう。」
茶髪が副部長に返す。
「わかった。おい、聞こえるか？深川は2階に行ったらしい。こっちは1人倒して1人やられた。これからオレもそっちに向かって深川を挟み撃ちにする。」
「了解。」
副部長は指電話で2階を巡回していた部長に連絡をとった。そしてそのまま階段を降りて2階を探す事にした。

ナメッチが撃破されてから5分ほどが経過した。移動したガチャギリは旧校舎2階の連絡通路の影に身を潜めて、先輩達が通路を通りがかるのを虎視眈々と狙っていた。時折階段方向や旧校舎の廊下にも気を配っていたが、誰も通る気配がしない。不気味に思いつつもガチャギリはレーザーライフルを構えて狙撃の準備をしていた。
その時、2階新校舎の方で銃声のような鋭い音が鳴り響いた。ガチャギリは驚いて立ち上がる。もしかするとダイチが戦闘に巻き込まれているのかもしれない。そう思ったガチャギリは加勢するために自分も移動しようと武器を持った。その時だった。
「動くな」
ガチャギリの背後で声がした。いつの間に、と思った瞬間それが罠だったことにガチャギリは気付く。振り返ったガチャギリに銃を向けていたのは副部長だった。
「マジかよ。今の銃声はフェイクだったんスね」
ガチャギリはライフルを持ちながらその両手をゆっくりと上げる。
「ああ。お前は全方向に注意を向けていたからな。そのまま背後から近づくのは難しかった。そこで部長にかんしゃく玉を投げてもらって、お前の注意をそらしたのさ」

「へっ。やっぱ戦い慣れしてら。戦術じゃさすがにかなわないっスね」
ガチャギリが笑みながら言う。思いっきり経験の差が出てしまったなと思った。
「さあ、その武器も床に置け。かわいそうだがお前のメガネは壊させてもらう」
「オレに降参の選択肢はないんスか？」
「ない。ナメカワは2対1の状況にも関わらず、抵抗してきやがったからな。そのおかげでオレのメガネは手痛いダメージを負った。同じ失敗は繰り返さねえってことだ」
用心深い副部長の言葉に、ガチャギリは1つ大きくため息をついた。
「はあ。仕方ないっスね。知ってますか？このレーザーライフル。ここのレバーを引くと何が起こるのかを。」
持っていたレーザーライフルを見せながらガチャギリが訊ねた。
「知らねえよ。何が起こるんだ？」
そんなことどうでもいいという口調で副部長が返す。
「爆発するんスよ。」
「は？」
副部長が驚いて聞き返すのと同時に、ガチャギリはそのレバーを引いた。副部長は必死に逃げようと身を翻したが、逃げ遅れ轟音とともに爆風に包まれた。副部長のメガネはナメッチから受けたダメージも重なってクラッシュする。ガチャギリはこの時のために爆発に対する耐性を高めていたので、メガネはなんとか持ちこたえた。
「くそっ！お前自爆テロかよ！」
「すみませんね。これで人数はこっちが有利になりましたし、このまま部長も倒しますよ」
ガチャギリが副部長に返した瞬間、少し遠くの方でパアンという乾いた音が鳴った。ガチャギリがその方を見ようとした刹那、視界はいきなり白く煙った。
「なっ！？」

ガチャギリの頭部を正確に捉えた弾丸は、見事にそのメガネに命中した。少なからず爆発のダメージを負っていたガチャギリのメガネはその1発で沈んだのだ。
「部長？あんなところから？」
ガチャギリを狙撃した部長は連絡通路の新校舎側にいた。ガチャギリの立つ旧校舎とはゆうに30メートルほどの距離があるが、それをハンドガンでいともたやすくガチャギリの頭部を射抜いてみせたのだ。その射撃能力にガチャギリは息をのんだ。
「このままオレも倒す？笑わせるなよ。戦術も何も理解していないお前らに負けるはずがないだろうが」
ガチャギリの元に歩み寄った部長が吐き捨てる。
「でも、これまでは互角の戦いをしてきたじゃないッスか。もう後は部長とダイチの一騎打ちですよ」
ガチャギリが反論した。げんにこの戦い方で、経験では差がある先輩チームを追い込んでいる。自分たちの戦術は通用しているじゃないかと。
「バカ言うな。自分たちのメガネをも犠牲にするようなそんな戦い方で、この大黒市がどうにかなるとでも思ってるのか。神風精神は古いんだよ。これまでこっちの2人がやられたのは、そういう非常識の戦術に油断していただけだ。だから1つ忠告しておく。その戦い方じゃたとえ目の前の1戦をものにできたとしても、長い目で考えると必ず破綻する」
「へっ、そうですか。目の前の1戦を大切にできない人たちが上にいけるとも思えないんスけどね。だから先輩は大黒でも中堅止まりだったんじゃないッスか？」
部長の言葉にガチャギリは挑発的な言葉で返す。
「なんだと！」
その言葉に腹を立てた副部長がガチャギリの肩につかみかかる。しかしその時部長はふいに連絡通路の新校舎側を振り返り、おもむろに姿勢を低くした。その次の瞬間、部長のわずか頭上を赤いレーザ

ーが通過していくのをガチャギリは見た。
「ダイチか！？」
ガチャギリも新校舎側を見る。部長の正面に対峙したダイチはさらに部長を狙ってレーザを放つ。
「くそっ。じゃあな。さっさとアイツと決着をつけて戻ってくるわ。」
部長はガチャギリと副部長に言い残すと、旧校舎の階段へ身を翻して3階を目指してのぼっていった。

「もう、先輩達は何をしてるのよ。ダイチ達なんて完封できたじゃない。それが部長とダイチの一騎打ちになるなんて」
ジャッジのフミエはその頃戦いをモニタリングしながら、もどかしそうにつぶやいた。ダイチ達にとってのこの初戦、万が一『黒客』が勝利しようものならダイチがつけあがるのは目に見えている。そうならないためにも、是が非でも先輩達にはダイチを叩きのめしてほしいと思っていた。
「負けないよ、ダイチ達は。だって夢の大きさでは誰にも負けてないもの」
一緒にいたデンパがのんびりとした口調で言った。デンパはダイチ達の勝利を確信しているようだった。

戦場は3階連絡通路へと移る。部長が旧校舎の階段をのぼって行くのを確認したダイチは、そのまま自分も新校舎側の階段をのぼって後を追った。ダイチは連絡通路を渡って来ようとする部長を近づけさせないようにレーザーをとにかく連射する。部長も先に進むのはかなわないと見て、旧校舎の廊下、ダイチからは死角となっているポジションに身を滑り込ませた。
「やるなあ。まさか1対1にまでもつれ込ませるなんてよ。自分が犠牲になってでも相手を倒すっていうムチャクチャな戦術だが、ここまで来たのはお世辞抜きに褒めてやるよ」

連絡通路を挟んで新旧の校舎で相手の出方をうかがう部長とダイチ。30メートルの距離を置きながら、部長が少しボリュームを上げた声でダイチに言った。
「褒めてもらえたのはうれしいですけど、そんなムチャクチャな戦術じゃないですよ。オレたちの1番の武器は絆、チームメイトを信じる心っスからね」
「だから自分が犠牲になってもチームの勝利に貢献するってか。お前お年玉2年分甘く見てんのか？こんな戦いを続ければ必ず破産するぞ。お前らも金が目的で電脳クラブ結成したんじゃないのか？」
「もちろん、金は必要ですよ。でもそれは戦争に勝てばいいだけの話じゃないですか。勝ち続ければ金の心配なんていらない」
「お前この世界なめてんだろ？時には退くことも必要なんだ。チームを維持するにはな。そんなリスクの高い戦い方でいつまでもうまくいくと思うなよ」
「リスクを冒した者が勝利する。そんな言葉を聞いた事がありますけど。じゃあ先輩達は今までリスクを冒したことがあるんですか？」
ガチャギリと同じく、ダイチは挑発的に部長に言った。この戦いで先輩達がなぜ中位に甘んじて来たのかが、ダイチ達には何となくわかってきた。今まで先輩達は危険な戦いに出向いていかなかったのだろうと、そう思った。
「ああ、そうだ。オレたちは今までリスクの高い勝負は避けてきた。より安全に確実に勝利できる戦法をとってきた。こんな風にな」
部長は開き直ってそう吐き捨てると、ダイチの隠れる新校舎側の廊下に向けて発砲した。
「そんなところから発砲して当たるわけ…なぬ！？」
部長は何をしているんだと笑おうとしたダイチだが、部長の発砲した弾丸は壁を跳弾しながら部長からは死角に隠れていたダイチに見事に直撃した。
「ふん。どうだ跳弾の味は？隠れているだけなら、オレの弾丸を浴びるだけだぞ？お前の言うリスクは冒さないのか？」

今度は部長があざけるようにダイチに言った。窮したダイチはその言葉に頭に来て連絡通路に飛び出す。
「うおおおー！！やれるもんならやってみろ！！」
「バカめ。オレの挑発にまんまと乗りやがって」
部長は壁に張り付きながら銃と頭だけを連絡通路に出し、突っ込んでくるダイチに向かって発砲する。ダイチは部長からの弾丸を避けるように廊下を右へ左へ移動しながら突っ込む。しかし部長もさすがの射撃術でダイチに確実にダメージを与えていった。
「これでもくらえ！」
早くもメガネの耐久度が危うくなってきた。しかし部長との距離が１０メートルに縮まったところでダイチは賭けにでる。ガチャギリがやったようにレーザーライフルの自爆レバーを引いて、最後は自らも銃弾を避けるためヘッドスライディングのように頭から突っ込みながらそのライフル部長の足元に滑り込ませたのだ。
「な、なに！？」
その意外な攻撃に部長は一瞬ひるんだ。その次の瞬間、旧校舎階段前の廊下は爆風に包まれる。ヘッドスライディングをかましたダイチは壁に手を当てながら急ブレーキをかけて連絡通路で持ちこたえ、なんとかその爆発に巻き込まれずに済んだ。
「やったか！？」
ダイチは勝利を確信しながら爆発で巻き起こった黒い煙が晴れるのを待つ。ところが、ダイチの目の前にはまさかの光景が広がっていた。
「てっ、鉄壁！？いつのまにあんなものを！？」
ダイチがライフルの自爆装置を起動して爆発までその間２秒。その間に鉄壁を出して防御したというならとんでもない反射神経だ。
「残念だったな。せっかくリスクを冒したのによ」
鉄壁の影から現れた部長の最後の捨て台詞と直後にダイチの夢を打ち砕いた銃声は、この後ずっとダイチの脳裏に焼き付くほどの強烈な悔しさとして残った。

戦いを終えて、生物部部室である旧校舎第1理科室にメンバーは集まっていた。
「はい、結果発表。最後まで生き残ったのは部長ということで、今回の勝負は『大黒トライフォース』の勝利」
ジャッジのフミエが宣言する。有償自動修復が必要なほどデータが壊れたのが6人中5人という死闘だったが、最後は先輩達が意地を見せるという結末だった。
「ありがとうございました。それに戦い中色々と無礼なことを言ってどうもすみませんでした」
ダイチは先輩達に謝った。ガチャギリとナメッチもここは素直に頭を下げる。
「いいってことよ。戦いの最中は誰でも熱くなるもんだ。死闘だったが、なかなか楽しめぜ。そうだ、お前らこの学校のトップになりたいって言ってたな。よし、オレたちがそれを認めてやるよ。今日からお前らがこの第三小のトップクラブだって名乗ってもいい。なあお前ら」
「ああ、いい戦いだった。お前らのメガネに対する情熱はよく伝わった」
部長や副部長が敗れたダイチ達を讃える。そして黒客に第三小のトップの称号を贈ることに決めた。
「でも、オレたち勝負に勝ったわけじゃないし。まだまだ未熟だし」
ダイチも戸惑いながら言う。こんな形でトップクラブになることができても、正直内心は複雑だった。
「そう謙遜するな。オレたちだって初試合でここまで戦えたわけじゃねえ。お前らには才能があるんだ。これから幾多の戦いを乗り越えて強くなってくれ。オレたちも期待している。それから、このメタバグを持って行けよ。データ直すのに金要んだろ？これはデンパに渡しておくからな」
部長はそう言うと大量のメタバグが入ったケースを取り出して、そ

れをデンパに渡した。今ダイチ達のメガネはクラッシュして使えない状態になっている。
「いいんですか？それは先輩方の活動資金じゃ？」
「いいんだよ。オレたちもこれで心残りはねえ。トップの座を譲ったところでこのまま現役引退だ。今まで溜めたメタバグは、若いお前らを育てるのに使った方がいいだろ」
「そうですか。ありがとうございます。今後ともよろしくお願いします……行くか」
「へーい」
ダイチはもう1度お礼を言って頭を下げた。しかし敗戦のショックを引きずったままではこのままここにいても恥ずかしいだけだと思い、今日のところは引き揚げることにした。
「ダイチ。元気出しなよ」
デンパに励まされながらダイチ達は第1理科室を後にする。

部屋の中には先輩達3人とフミエだけが残っていた。
「助かったよ橋本。お前があの場面で鉄壁を出してくれなかったら、この戦いオレたちの負けだった。さすがに先輩として負けてしまうと、恥ずかしくて明日から学校に来れなくなるところだったからな。万が一の時を想定してお前に頼んでおいて正解だったぜ」
ダイチが帰って行ったのを確認して部長がフミエに礼を言った。
「別にそのことはいいんですけど。でもどうしたんですか先輩？先輩達ならダイチ達なんて目をつむっていても勝てるくらい実力差はあったんでしょう？今日は全員食中毒か何かだったんですか？」
フミエが少し不満そうに先輩に訊ねる。そう、最後はジャッジのフミエが遠隔操作で部長に助太刀をして、先輩チームはかろうじて勝利を収めたのだ。もちろんダイチ達はそのことを知らない。
「いや。恥ずかしい話だがオレたちはガチでアイツらと戦った。その結果がこの有様だ。正直オレたちは上から目線でアイツらにアドバイスをする資格もない。ほんと、さっきは自分でも穴があったら

入りたい気分だったよ」
部長はこの戦いは実質負けだと思っていた。潔く引退を決意し、ダイチ達に後を任せたのもそのためだ。
「そんな・・・・・アイツらの何がすごかったっていうんです？」
ダイチ達への嫉妬心を抱きながらフミエが訊ねる。
「アイツら個々の戦闘能力は高い。ナメカワは窮地でも正確に相手を射抜く射撃能力。深川はステルス地雷や自爆装置付きレーザーライフルでわかるように、武器の改造に長けている。あんな武器は市販されていない。そしてダイチはその2人の絶対的な信頼を得ている。言ってみればキャプテンシーがあるってことだ。もちろん基本的なな運動能力もズバ抜けているし、相手の意表をつくアイデアもある。ヤツら、戦術とかはまだ全然理解してないが、これから場数を踏むうちにそれらも理解してみるみる力をつけるだろう。今日アイツらが負けたことになったのもいいクスリになるかもしれん。正直末恐ろしいチームだぜ。大黒市の頂点も、アイツらならあるいは」
「そんなに、ですか？」
フミエが信じられないという風に部長に返す。ほんの少し前まではダイチなんかは自分のカモだった。それがほんの2ヶ月の特訓でそこまで認められる存在になったというのか。
「お前も、アイツらと張り合いたいっていうのならウカウカしてられねえぞ。もしアイツらが誰にも手を付けられねえ存在になったとしたら、生物部だってアイツらの意のままにされるかもわからん。お前にもその素質は十分あると思う。だから、万が一の時はお前がダイチを止めてくれよ。」
そう言い残すと先輩達も理科室を後にしていった。先輩達の話がもし本当なら、と不安になったフミエは、この時いてもたってもいられなくなっていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４　炸裂！電脳剣術秘伝小此木流！！

２０２６年　１月

先輩達との戦いで形の上では負けを喫した黒客は、まだまだこのままじゃ大黒では通用しないことを痛感し、黒客はさらなる特訓を重ねてスキルを磨き始めた。そうして２ヶ月ほどが経過して年が明けた頃、黒客にとっての最初の事件が起こる。この日ダイチ達はあるクラスメートに相談を持ちかけられ、詳しい話を放課後に聞くことになっていた。

「で、話ってなんだよ大河内？」

放課後の教室でダイチがその依頼者に訊ねた。

「うん。最近な、第三小の北側のテリトリーがよく荒らされてるんだ」

「北側っていうのは、中津交差点より北、旧街道の辺りのことか？」

「そう」

ダイチが確認して依頼人がうなずく。中津交差点を北に行くと、東西にのびる旧街道に出る。第三小のテリトリーは基本的にそれより南側ということになる。

「二小の連中か？最近色々と噂を聞くが、ついにこっちのテリトリーまで手をのばしてきたか」

ガチャギリは色々と情報を集めて大黒の情勢を把握している。旧街道の北にあるのは大黒第二小なので、その学校のクラブの仕業とみて間違いなさそうだった。

「ああ。それでこの前友達とそれを確認しに行ったんだ。まだあそこの辺りにはよくメタバグが落ちているし、連中に奪われるのは惜しいからな。そしたら案の定そいつらが現れて、オレと友達の持っていたメタバグを根こそぎ奪っていきやがったのさ」

「カツアゲに遭ったってことか。お前、その連中の名前とか覚えて

ねえのか？」
聞き捨てならない話に、ダイチは身を乗り出した。
「連中の名前はチーム『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』。電脳刀の使い手集団だ」
「つじぎり？」
ダイチが訊ね返す。ダイチにはその意味がよく分からなかった。
「辻斬りっていのはあれだ。江戸時代に横行した、武士が自分の刀の切れ味を試すために無差別に通行人を斬る行為のことだ。今で言う通り魔だな」
「なんてえげつない連中なんスか？大河内達もそれで斬られたの？」
ガチャギリの話にビビったナメッチが依頼人に訊ねる。
「友達が斬られた。連中の刀の切れ味はハンパじゃない。たった一太刀でメガネクラッシュしたからな」
「マジっすか？」
ナメッチだけじゃなくその場の全員が驚いた。電脳刀というのは確かに電脳通販駄菓子屋にも売っている武器の１つだが、それほど使い勝手の良いものではない。それを使いこなす人間はそういないのだ。
「確かに聞いたことがある。チーム『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』。飛び道具全盛のこの時代に、ひたすら剣術のみを鍛え上げている集団。連中は通販駄菓子屋でも売っているような電脳刀を組み合わせて、オリジナル合金で作り上げた刀を愛用している。言ってみれば電脳錬金術師でもある」
「なんかすげえな。」
話で聞く限りではそのチームが異能集団のようにダイチは思えてきた。
「でもそいつら、話す時には語尾に『～ぜよ』とかつける、ある意味イタイ集団だった」
被害者の大河内が証言する。「何それダサっ」とダイチは言葉がこぼれた。

「そうそう。そいつら実力はあるんだが、ちょっと頭のイカレた連中で他のクラブにはあんまり相手にされてないらしい。それをいいことに自分たちが最強のクラブだと勘違いして傍若無人に振る舞っているらしいぜ」
笑いながらガチャギリが言った。誰にも相手にされないそのために電脳剣術をひたすら鍛え上げてこられたとも言える。
「でもこのままのさばらせておくのは良くないぜ。三小テリトリーの治安はオレたちが守らんとな。良い機会だ。そいつらを倒したあかつきに、この学校の生徒からショバ代もいただくことにしようぜ」
「それはいいが、勝てるかわからんぞ。」
ダイチが意気込んだが、ガチャギリはなんとなく不安だった。
「大丈夫だろ。相手は剣術しかできねえんだ。こっちはなりふりかまわず飛び道具でかましてやればいいだけだ。ガチャギリ、また武器の仕入れよろしく頼むぜ」
「じゃあその場所までオレが案内するよ」
大河内が案内役を買って出る。こうして後日そのチーム『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』と勝負するという方向でこの日の打ち合わせはお開きとなった。

数日後の放課後、武器を揃えた黒客メンバーは大河内の案内で旧街道の辺りに来ていた。周辺の空き地を見回り、ついでにメタバグも拾うことにした。
「この辺まだ結構落ちてんじゃねえか。見落としてたな。連中が狙うのもわかるわ」
「ああ。今日はデンパを連れて来てないが、それでも十分に当面の活動資金を拾って帰れそうだ」
夕陽に包まれる工場裏の空き地で、ダイチ達は水を得たような魚のようにどんどんメタバグを拾い集めていった。すると空き地の入り口に3人ほど見知らぬ子どもが立っているのにダイチは気付く。
「誰だ？」

薄い電脳霧に包まれてシルエットしか見えなかったが、案内役の大河内はそれが誰だかすぐにわかった。
「ダイチ！ヤツらだよ！」
「そうか。やっぱり現れたか」
ダイチ達黒客メンバーも集まってその相手と真っ正面で対峙する。敵も敷地内に足を踏み入れ、その顔を見ることができた。相手も3人組だ。真ん中に立つリーダーらしいの少年はちじれた長い髪で、鋭い眼光を向けながら腕を組んで仁王立ちしている。そして3人全員が腰に電脳刀を帯びていた。
「誰ぜよ？ワシらのシマ勝手に荒らしちゅうおまんらは？」
まずはリーダーの脇に控える少年がダイチ達に訊ねた。
「何がワシらの土地だよ。ここは三小のテリトリーだ。勝手に荒らしてるのはお前らの方だろ。つうか、そのしゃべり方どうにかならんのか？今は２０２６年、ここは大黒だぞ」
ダイチも相手の目をにらみつけて返す。
「ちびのくせにいっちょまえの口をきくんじゃのう。ワシらのこと知らんがか？」
ダイチはちびと言われて少々プチっときた。
「知ってることは知ってる。チーム『辻ちゃん』だろ」
「ちがーう！そんな２０年前のアイドルの追っかけ集団みたいな名前じゃないがぜよ！ワシらのことナメちゅうな？ワシらはチーム『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』。泣く子も黙る幕末志士のクラブぜよ」
リーダーの少年が誇らしげに宣言した。
「なんで幕末志士のクラブなのに名前が『辻斬り』なんだよ。おかしいだろ」
ガチャギリが小声でぶつぶつとツッコミを入れた。
「うるさい。細かいことは気にするんじゃないがぜよ。それより人に名乗らせといておまんらは名乗らんがか？」
「ああ。申し遅れたな。オレたちは三小の『大黒市黒客クラブ』だ」
ダイチもここは胸を張って宣言する。これが他校のクラブに『黒客』

のことが知られた初めての瞬間だった。
「へいくう？ほう。ちゅうことはおまんらは清国の人間かえ？」
「しんこく？」
意味がわからんという表情でダイチが相手のリーダーに返した。
「ダイチ。いちいちコイツらのトークに付き合うな。疲れる」
めんどくせえ連中だなと思いながら、ガチャギリがダイチに言い聞かせる。
「そうだな。それよりお前ら、この前コイツからメタバグをカツアゲしたんだってな！オレらのテリトリーを荒らしていることもあわせて、今日はお前らを成敗しにきたんだ！」
ダイチが大河内の方を指差しながら威勢良く言った。
「ああ。そこにいるのはこの前の。そうじゃ。ワシらがカツアゲしたがぜよ。でもそれは自分たちのシマをろくに警備していないおまんらの責任だからの。このご時世、勝手にシマを荒らされたとしても文句は言えんきに」
「だから今日はそのお前らをたたき出しにきたんだ。覚悟しろよ」
「威勢だけはいいんじゃの。じゃが、おまんらみたいなぽっと出の無名のクラブが、ワシらにかなうとでも思うたか。痛い目を見る前に、とっとと逃げた方がいいぞ」
そういうと『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』のメンバーは威嚇をするように腰に帯びていた刀を鞘から抜き出した。
「所詮剣術だけだろお前らは。悪いがこっちは飛び道具を使わせてもらう」
そう言ってダイチ達もガチャギリから受け取った電脳マシンガンやミサイルランチャーを装備した。
「何もわかってないの、おまんらは。そんな西洋かぶれの武器なぞ、わしらには通用せん！」
「何を！うりゃあ！」
ダイチはリーダーに向かってマシンガンを乱射し始めた。
「かーっ！！」

するとリーダーは雄叫びをあげながら、持っていた刀でことごとくダイチの放つ弾丸を薙ぎ払っていった。とても人間技とは思えない手の動きで。
「いーっ！アイツは石川五右衛門ッスか！？」
ナメッチが驚きの声を上げる。
「くそっ！こうなりゃコイツはどうだ！」
ダイチはマシンガンを諦めると、ミサイルランチャーを構えて放とうとした。
「させん！燃えよ、斬鉄剣！」
ダイチがミサイルランチャーを構えたとみるや、リーダーは一気にダイチとの距離を詰めていった。その瞬発力は恐ろしいもので、ダイチが気付いた時には懐に入られていた。そうして次の瞬間に振り下ろされた刀で、ダイチの構えていたミサイルランチャーは真っ二つにされていた。
「な、なにっ！？」
ダイチが驚き茫然と立ちすくむ間に、リーダーは刃をダイチに向ける。一瞬にして勝負はついた。
「ダイチ！」
「動くんじゃないぜよ。お前らも武器を捨てるがぜよ」
今の刹那の攻防に気をとられるうち、ガチャギリとナメッチも後の2人に側面に入られ刀を向けられていた。
「ちっくしょう。今回は財政難で、武器に自爆装置もつけてねえからな」
ガチャギリも今回はおとなしく降参する。今回は本当に何もさせてもらえなかった。
「だから言ったぜよ。お前らみたいなぽっと出じゃワシらに通用せんと」
「く、くそう！！」
ダイチは唇を噛んだ。クラブを結成して4ヶ月。来る日も来る日も特訓に明け暮れたと言うのに全く通用しなかった。剣術使いを想定

していなかったとはいえ、屈辱的な敗戦だった。
「ここでおまんらのメガネを壊してもいいんじゃが、ちとお前らにやってほしいことがあるんでな。ここではまだ壊さん」
「やってほしいこと？」
刃を向けられたままのダイチが、いぶかしげにリーダーを見る。
「ワシらがこの地区に目を付けたのは理由がある。実はこの地区のどこかに、伝説の宝刀が眠っているという話を聞いてな」
「伝説の宝刀？なんだそれ？そんな話聞いたことがないぞ」
「いや、間違いなくある。昔三小には、伝説の剣豪と呼ばれた電脳刀使いがいたらしいがじゃ。その剣豪が持っていたのがその宝刀なんじゃ」
「はあ？聞いたことあるか？そんな話？」
ダイチがガチャギリの方を見て訊ねる。
「知らね」
ガチャギリも「さあ？」というように手を広げて返した。
「あるんだよ。とにかくこの地区にその伝説の宝刀が。それをお前らに見つけてほしいんだよ。それを見つけてくれれば、今後お前らのシマには手出ししねえ。ただし1週間以内にそれを持って来なければ、今度こそお前らを叩き斬る。わかったな？」
「言葉遣い戻ってんじゃねえか！」
早口でまくしたてたリーダーにダイチがツッコミを入れる。
「うっさいぜよ！とにかく1週間後にまた来るゆえ、ちゃんと探し出しておけ。それから今日お前らが持っている分だけのメタバグはこっちによこせ」
そう言って『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』のメンバーはダイチ達からメタバグをカツアゲしてその場から去って行った。
「あーあ。今日は大赤字だ」
失意の夕陽に包まれ、ガチャギリがため息をつくようにつぶやいた。

翌日、黒客メンバーで今後について話し合うために放課後また集

まった。
「あーっ！腹の虫がおさまらねえ！あんな変人集団に太刀打ちできなかったなんて、『黒客』一生の恥だ！」
「そんなにその人達強かったの？」
怒るダイチに、昨日は運良くその場にいなかったデンパが訊ねた。
「強いなんてもんじゃねえ。おそらく個々の戦闘能力で言えば、大黒でもトップクラスだ。そもそもあいつらに同数で勝負を挑むのが間違ってる。ここはおとなしく、オレ達と同じくアイツらに迷惑を被っているクラブと同盟を組んで勝負するのが上策だぞ。アイツらには同盟を組んでくれる相手なんていないだろうからな」
「バカ言うな。数で勝負するなんて、そんな卑怯で姑息な手を使って勝っても嬉しくねえ！」
現実路線をとろうとしたガチャギリだったが、ダイチはそれを断固として拒否する。
「まあ、そう言うと思って昨日あれから連中の話していた宝刀について調べてみた。その宝刀があればなんとか連中にも勝てるかもしれんからな」
「おお！さすがガチャギリ君。気が利くねえ！で、どうだった？」
ダイチはすぐに食いつく。ダイチもその話がずっと気にかかっていたのだ。
「ある情報屋から仕入れた情報だ。連中の言っていた伝説の剣豪について。1年半ほど前この第三小に剣道、実物のな、の天才と呼ばれたヤツがいたらしい。そいつはなんとたった1人で、たった1本の刀を携えて電脳戦争界に殴り込んでいったらしい」
「そんなヤツがいたのか……で、どうなったんだ？」
「伝説と呼ばれているように、そいつはたった1人で大黒市電脳界の頂点を極めてしまったという。当時の電脳戦争界は空前の電脳刀ブームだったらしい。というのも、その時は爆発性のメタバグが不足していてな。飛び道具の値段が上がったからそうなったらしい。それから新たな鉱脈が発見されて爆発性のメタバグも手に入るよう

になったから、今みたいに飛び道具中心の戦術が浸透していったそうだ。まあそんな背景もあるわけだが、それでも1人で大黒市の覇権を取るなんて並大抵のことじゃない。それにはそいつの剣術の腕に加えて、その刀にも恐ろしい力が込められていたからだと言われている。それが今は伝説の宝刀の噂として残ってるんだそうだ」
「なるほどな。で、その先は？その宝刀は結局今どこにあるんだ？」
ダイチが身を乗り出して訊ねる。聞きたいのはそこからだった。
「それが、この次はシークレットレベル3の情報だから、１０００メタよこせってその情報屋が言ってきてな。オレたち昨日カツアゲされただろ。だから払えなかったんだよ。今の情報はちなみに５００メタ。それは家にあったメタバグでなんとか払えたが」
困ったようにガチャギリが言った。
「はあ？そんなに取るのかよ。情報屋っていうのはいい商売だな。しゃーねえ。デンパ。今１０００メタ持ってるか？こういうことだから、ちょっと貸してくれねえか？必ず返すからよ」
「うん。いいけど」
こうしてダイチは昨日カツアゲの現場にいなかったデンパからメタバグを借りて、次の情報を買うことにした。ガチャギリがその情報屋とコンタクトをとって、そのメタバグを払い込む。その後次の情報がメールで送られてきた。
「お、来た来た。一躍時の人となったその伝説の剣豪について、当時まことしやかにささやかれた噂があった。それは、その剣豪は第三小校区内にある駄菓子屋に足しげく通っているらしいというものだった。しかしその剣豪がそこで何をしていたのかは不明である。一説では、その宝刀を研ぎすましていたという話もあるが、真実かどうかは定かではない」
ガチャギリがそのメールを読んでダイチは考え込んだ。
「駄菓子屋……となると、この校区では思いつくのはあそこしかねえな。」
「メガシ屋だね」

ダイチの言葉に、デンパが答えを言った。当時は小此木駄菓子店、そして今はメガシ屋と名前が変わっている。と言っても当時から電脳グッズを販売していた。
「メガばあに詳しい話を聞きに行くか？なんか雰囲気、あそこにあるような気もするが。」
ガチャギリがダイチに訊ねる。
「でもな～。メガばあはフミエ一派の総帥だからな。こっちも行きにくいし、あっちも話をしてくれるかどうか」
「背に腹はかえられんぞ。あっちだって三小のテリトリーが狭まって困るのは同じだからな。それを交渉材料になんとか話を聞き出してみようぜ」
「そうだな。じゃあ今から行くぞ」
こうしてダイチ達は宝刀の噂の真意を確かめるために、メガシ屋に乗り込むことになった。

「おお。メガシ屋の横の家。ほとんど完成したんじゃねえか」
「ああ。確か、ここにメガばあの孫が越してくるんだろ？」
『黒客』メンバーは全員久しぶりにメガシ屋を訪れた。メガシ屋の古い建物の横に建てられた新築の家が、見事な違和感を生んでいるなとダイチは思った。
「おんや？どういう風の吹き回しかの？お主らが揃ってこの店に現れるとは？」
ダイチ達が店に入ると、もの珍しそうにメガばあが言った。『黒客』メンバーがメガシ屋に来ることはほとんどない。ましてやメンバー揃って現れるなど、メガばあは何か事情があるに違いないと察した。
「単刀直入に聞く。伝説の宝刀っていうのは、この店にあるのか？」
ダイチがカウンターに座るメガばあを見据えて訊ねる。
「伝説の宝刀？ひょっとしてあれのことかの」
メガばあが考え込みながらぶつぶつとつぶやく。そのリアクションを見て、ダイチ達はヒットしたと思った。

「あるのか？」
「ああ。心当たりはある。お主ら、さては1年半前の噂話を聞きつけてここにやって来たな？」
メガばあはダイチ達の心中を見通していた。
「ああ、そうだ。それが今オレたちには必要なんだ。頼むメガばあ。その宝刀があるんならオレたちに譲ってくれ」
「イヤじゃ。お主らこの店にほとんど来んくせに。たまにやって来てかと思えば、その刀を譲ってほしいじゃと？都合が良すぎるわ。大体ものを頼む言い方もそうじゃが、お主ら頭が高い」
メガばあはダイチ達に厳しく言い放った。メガばあの態度は、この店でどれだけお金を落としているかによって変化する。
「わかった。その刀を僕たちに譲ってください。お願いします」
「お願いしまーす」
ダイチは今度は深く頭を下げて頼みなおした。その後ガチャギリもほとんど棒読みで頭を下げる。デンパとナメッチも続いた。
「そう頭を下げられても、譲れんもんは譲れん」
「じゃあ、いくらでなら売ってくれるんだよ？」
ダイチがすがるように訊ねる。今は金欠なので、そもそも値段をつけられると詰んでしまうのだが。
「いくら積まれてもあれは売れん。あの刀は封印したんじゃからな」
「封印ってどういうことだよ？」
「まあ、話せば長くなる。ここじゃなんじゃから、奥でゆっくり話でもしようかいの。お主らがあの刀を必要とする理由も聞かねばならん。ホレ、遠慮なく上がれ」
そうしてメガばあは4人を店の奥の電脳工房に招き入れた。ダイチ達は初めて奥に通され、そのインテリアに気味の悪い部屋だなと思った。
「して、お主らがあの刀を求める理由とはなんじゃ？」
まずはダイチ達が、昨日チーム『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』と戦い、全く太刀打ちできなかったことを説明した。

「このままじゃ、三小のテリトリーはアイツらに蹂躙されちまう。そうなるとここに流れてくるメタバグの量も減るんだ。そうして困るのはメガばあも同じだろ？」
「ムムム。そうか、今はお主らがこの地区の警備をしておるのか。何とも頼りないのう。お主らみたいに、通販電脳駄菓子屋の見た目だけは派手じゃが質の低い武器を使っとる輩に、果たしてこの先この地区が守れるのかのう。今回はフミちゃんに、その連中の退治をお願いしようかのう」
「わ、悪かった。今度からは。ちゃんとこの店で武器を仕入れる。だから、フミエにその刀を持たせるのは勘弁してくれ！」
メガばあの言葉に、ダイチは本気で焦った。フミエに手柄を横取りされるのがじゃない。フミエがその伝説の刀を握ることにだ。
「しかしのう、フミちゃんも多分同じことを言うじゃろうな。ワシとしてはお得意のフミちゃんに黙って、お主らにその刀を渡すことはできんぞ」
「いや、どのみちフミエじゃアイツらに勝つのはムリだ。」
今度はガチャギリが低いトーンでメガばあに言った。
「どうしてじゃ？」
「連中の運動能力は3人とも小学生場離れしている。仮にフミエにその刀を持たせてアイツらと戦わせるというのなら、オレたちは協力しないし、アイツもそれを望まない。フミエとオレたちは敵同士だからな。その刀は1本しかないんだろう？なら、フミエは必然的に1人でアイツら3人を相手することになる。いくらその刀が強力でも、その状況では勝ち目がない」
「う～ん。お主なかなか痛いところを突いてくるの」
メガばあの心も、ガチャギリの言葉に揺れ動いていた。フミエの最大の弱点は、頼れる仲間がいないということだということもメガばあは十分わかっていた。
「なら、条件付きじゃ。刀はその勝負にのみ使う。終わればワシにちゃんと返す。そして協力の見返りに、今度からはワシの店で武器

を仕入れる。それを守れるなら、その刀をお主に持たせよう」
「……わかった。約束はちゃんと守る」
ダイチも仕方なくメガばあの出した条件をのむことにした。とにかく宝刀さえ手に入れば、後はどうにでもなるとダイチは考えた。
「でも、ずっと封印されていたって、それどんな刀だったんスか？」
話がまとまったところでナメッチが訊ねた。
「あの刀はのう、１年半ほど前に１人大黒電脳界を極めてしまったヤマトと言う少年とワシが苦心して作り上げたものじゃ。ヤマトは剣術の才能に溢れておった。そして、その実力に見合う最強の刀を探しておったのじゃ。それでワシのところに通い、あらゆる電脳刀を組み合わせながら錬金し、試行錯誤を繰り返しながらその刀を作り上げていった。電脳刀の錬金は、メタバグを組み合わせてメタタグを作る技術に通じるところがある。じゃから、それができるのは当時はワシだけじゃった」
「なるほど。噂ではそのヤマトっていうヤツは、毎日のようにここに通って刀を研いでいたという話だった。ずっとその刀の強化にいそしんでいたというわけだな」
「そうじゃ。そしてついに完成したその刀を携え、ヤマトは凄まじい勢いで敵を斬り倒していった。そうして気がつくと大黒の頂点に立っていたのじゃ。しかし、その道を極めてしまったヤマトは、その後ワシのところへやって来てその刀をワシに渡した。自分が頂点を極められたのは、その刀のおかげ。自分の腕によるものじゃない。電脳戦争界のパワーバランスを崩壊させるほどの力を宿したその刀は、もう封印してほしいとな。そう言い残してヤマトはこの世界から身を退き、剣道の道を精進するようになったのじゃ。ヤマトはその刀が誰かの手に渡るのを恐れたのじゃ。支配欲にくれた者がそれを手にした時、大黒電脳戦争界は終焉すると」
「そんなにすげえ刀だったのか。見せてくれよ、そいつを」
正座しなおしてダイチが頼む。それさえあれば、『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』など敵ではないと思えた。

「ほら、これじゃ」
メガばあは押し入れを空けてその刀を取り出し、ダイチに手渡した。ダイチは受け取ったその刀をしげしげと眺めながら、ゆっくりと鞘から抜き出す。すると照明の暗い部屋では眩しいくらいの白銀の輝きを放ちながら、その剣は姿を現した。
「おおおっ！なんだ！？この輝きは？」
抜き取った刀を掲げながら、ダイチは茫然として言った。見るからに普通の刀ではない。ここにそのヤマトの魂が込められているように思えた。
「名は天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）。天下無双の切れ味に、これを持てば妖術までも使いこなせる。柄のところに赤いスイッチがあるじゃろ？」
「赤いスイッチ？これのことか？うわっ！」
ダイチがメガばあに言われてそのスイッチを入れると、刀に紅い火の玉が宿った。
「この火の玉を相手に放つこともできる。スイッチを入れてもっと時間を置けば、日輪衝撃波という大技も繰り出せる」
「すごすぎるじゃねえか。ちょっと何か試し斬りさせてくれないか？」
「それなら、ここに電脳のベニヤ板がある。斬ってみい」
そういうとメガばあはその板を両手で掴んでダイチの前に掲げた。ダイチは立ち上がって刀を構え、板のど真ん中に狙いをつける。
「ようし。どりゃあああ！」
ダイチはまっすぐにその刀を振り下ろす。ところが刀は板に食い止められ、1ミリの切れ込みを入れることもできなかった。
「あり？おいメガばあ！何が天下無双の切れ味だよ。こんなベニヤ板、市販の電脳刀でも軽く斬れるぞ」
「それはお主に剣の腕がないからじゃ。この刀は人を選ぶでな。ヤマトの手にある時しか効果を発揮せんような仕様になっておるんじゃ」
ダイチはあざ笑うようにメガばあが言う。それはヤマトが刀狩りに

あった時のセキュリティとしてつけたオプションだった。
「はあ？じゃあどのみち使えねえじゃねえか。その仕様を取り消すことはできねえのか？」
「できんな。じゃが、１つだけお主がこの刀を使うようになれる方法がある。それは、お主がヤマトと同等の剣豪になることじゃ」
メガばあの言葉に場は静まり返った。次に『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』がこの地区にやって来るのは１週間後だ。
「無茶言うなよ。オレは剣道なんてかじったこともねえぞ。それを１週間で伝説の剣豪と呼ばれたそいつのレベルに持って行くなんてできねえだろ」
「いんや、できる見込みはある。基礎運動能力の高いお主ならな。確かにヤマトは剣道の腕でも天才と呼ばれておったが、しかし電脳刀と竹刀では扱いはまるで違う。そこで電脳刀の剣術はワシとヤマトの２人で考案して発展させたのじゃ。それが、電脳剣術秘伝小此木流じゃ！」
「電脳剣術秘伝小此木流！？」
黒客メンバーの声がきれいにそろった。
「そうじゃ。電脳刀の道を極めるための剣術。それだけなら１週間あればヤマトのレベルにまで持っていくことも不可能ではなかろう。もちろん、これから毎日お主がワシの指導のもと、死ぬ気で鍛錬すればの話じゃがな。」
「死ぬ気で、やらないといけないのか？」
ここに来てダイチは怖くなって来た。メガばあの横にはいつの間にか本物の竹刀まで置いてある。
「当たり前じゃ！お主ら！大黒市での頂点を目指しておるんじゃろう？その道を極めたヤマトにしても、そのくらい鍛錬したわ」
なよなよしかけたダイチをメガばあは一喝する。もう後には引けないなとダイチは思った。
「よし。じゃあダイチ。ここで１週間頑張れ。オレたちはその間にメタバグを集めてなんとか援護のための武器を揃える」

ガチャギリが笑いながらダイチに言う。逃げられたとダイチは思った。
「相手は斬鉄剣を使うという話だったな？ならお主らにも渡すものがある。これを受け取るんじゃ」
そういうとメガばあはガチャギリとナメッチにまた別の刀を渡した。
「へえ。どんな刀なんスか？何これ？めっちゃふにゃふにゃじゃないッスか。メガばあ！これは何の冗談っスか！？」
ナメッチが早速鞘から刀を抜いてみると、なにやら柔らかそうなゼリー状の素材でできた刀がでてきた。当然何も斬れそうにない。
「それは電脳こんにゃくで作った、こんにゃく刀じゃ」
「こんなの何に使えるっていうんスか！？」
ナメてるのかとナメッチはメガばあに吠える。しかしそこでその刀を注意深く見ていたガチャギリが何か思い出すように言った。
「いや、聞いたことがある。斬鉄剣はこんにゃくだけが斬れないと。まさか、これでアイツらの斬鉄剣に対抗しろと」
「そうじゃ。お主らがまずダイチの盾となり、相手の攻撃を耐える。そして機を見計らって天叢雲剣で攻撃するんじゃ。もっとも、ヤマトは二刀流でその両方をやってのけたが、お主らにはそれが精一杯じゃろうて。」
「つまり、オレッチとガチャもその剣術修行に参加しろと」
「チームとして当然じゃ。」
メガばあの言葉にナメッチが「はああ」とうなだれる。その翌日から、師範代メガばあによる鬼の剣術修行が幕を開けることとなった。

「えい！えい！えい！」
「もっと腰を入れんか！」
メガシ屋の庭で竹刀を持ったメガばあに指導されながら、ダイチ、ガチャギリ、ナメッチはひたすら電脳刀の素振りを行っていた。最初は思う以上にキツくて音を上げることも多かった黒客メンバーも、段々とこの修行にも慣れ始めていた。もとより運動能力は高い３人

であるし、刀を振らせればメガばあの思う以上に上達は早かった。
「やっぱり納得できない。メガばあ！なんでダイチなんかにアメノムラクモを渡したの？あの刀は私にも触らしてくれなかったじゃない。しかもダイチ達への指導があるから店番しといてくれって、これじゃ私がダイチ達のパシリみたいじゃない！」
修行中のダイチ達とメガばあのところまでやって来て、かなり不満げにフミエが言った。
「しかし、ちゃんと店番のバイト代は払っておるじゃないか。」
「そういう問題じゃないの。メガばあがこの地区を荒らす『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』を倒す役目に私じゃなくコイツらを選んだのが気にくわないの」
「まあ、これは仕方ないんじゃ。相手も相当な手練のようじゃし、何よりフミちゃんには背中を預けられる仲間がおらんじゃろう。それじゃちとキツいと思うてな。フミちゃんとて、このダイチ達に背中を預けるのは本意ではなかろう？」
「そりゃそうなんだけどさ。」
フミエも返す言葉がなかった。いくら自分が電脳力を磨こうと電脳戦争界に殴り込めないのはそのためだ。
「今回はあきらめてくれよフミエ。だいたい最近会員番号５番のハラケンはどうなってんだ？ずっとここで修行しているが、その間１回もここに来るのを見た事がないぞ」
ダイチがフミエに訊ねる。『黒客』結成時にハラケンは仲間に誘おうと思っていたが、彼は既にコイル探偵局の会員であり、フミエの仲間だと知ったダイチはそれを断念していた。
「アイツは全然期待してない。メガばあの招集にも来ないしさ。あの交通事故で心を痛めているのは仕方ないんだけど、もともと無口なキャラがもっと閉口しちゃってるしさ。最近はなんか１人で調べものをしてるみたい。とにかく、探偵局の活動は当面私１人でやるわ。まあ、シャクだけどその『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』には次は負けないでよね。仮にも第三小を代表して戦うんだから。ここでまた叩

きのめされると、ここぞとばかりに他のクラブもこの地区に目をつけて押し寄せるかもしれないんだからね」
「わかってるって。負けはしねえよ」
フミエの言葉にダイチは力強く返した。
「よし、休憩は終わりじゃ。これからかかり稽古に入るぞ」
「へ～い」
束の間の休憩をとっていたダイチがやれやれというように立ち上がって、また自分たちの刀を手にした。
「ねえメガばあ。ダイチにはアメノムラクモを戦いが終わったら返すって約束させているらしいけど、それ本当にアイツが守るとでも思ってるの？」
その時フミエがメガばあの耳元でささやくように訊ねた。
「まあ、それでコヤツらの器の大きさをはかれるというもんじゃ。万が一の時の対策もしておる。フミちゃんにもそれは協力してもらうぞ」
「対策？」
メガばあが不敵に笑い、フミエも何か手があるのだと安心する。
　こうしてダイチ達は1週間の剣術修行を終えて、満を持して『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』との決闘日を迎えることになった。

『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』に完膚なきまでに叩きのめされた悲劇から1週間。あの時とは比べ物にならないほどの成長を遂げたダイチ達黒客メンバーは、夕暮れの同じ空き地で『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』のメンバーと対峙していた。
「で、例のブツは用意できているんじゃろうな？」
リーダーがダイチに向かって訊ねる。
「ああ。これだろ、お前らの探していた宝刀って。天叢雲剣。三小の伝説の剣豪と呼ばれたヤマトの魂が宿った天下無双の電脳刀だ」
ダイチは天叢雲剣を鞘から抜き出し、白く発光するその刀を掲げる。
その瞬間、『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』メンバーの目の色が変わるのが

わかった。
「おお！それじゃそれじゃ！よくやったのう。なら、約束通りこの地区にはもう手出しはせんから、さっさとそれをワシらに渡すんじゃ」
「誰がお前らに渡すって言ったよ。お前らは、お前ら自身が探し求めたこの刀で成敗されるんだよ。人様のテリトリーでの数々の狼藉。その罪は重いぞ」
ダイチの言葉に、『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』のメンバーは嘲笑した。
「何を言っちょる。先週はワシらの攻撃に手も足も出ずに完敗したくせに。確かにその刀は天下無双じゃが、じゃからと言ってものの１週間で使いこなせるようになるほど、剣の道は甘くはないぞ。また痛い目を見る前に、おとなしくワシらにそれを渡すんじゃ」
「わかってないな。先週は確かにオレたちの完敗だった。でもな、それは本来の実力を発揮する前に勝負がついただけのこと。つまり、お前らはオレたちの真の力を知らない」
「はっ。口だけは相変わらず達者なようじゃの。ならば、こたびもおまんらが実力を発揮する前に勝負をつけりゃいいだけのことぜよ。おい！軽くひねったり！」
「おう！」
リーダーはまず脇に控えていた２人にダイチへの攻撃を指示した。２人は腰に帯びていた斬鉄剣を抜きながらダイチに斬りかかる。
「させるか！」
次に動いたのはガチャギリとナメッチだった。２人はダイチをかばうように前に出ると、メガばあから授かった刀で『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』の２人の斬鉄剣を食い止めた。
「なんぞこれは！？こんにゃく刀か？」
「ああ。悪かったな。お前らの刀はもうオレたちには通用しねえ」
ガチャギリがしてやったりという風に言った。それならばと『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』の２人はなんとかガチャギリとナメッチの壁をかいくぐって、ダイチに斬りかかろうと動きなおす。しかし黒客の２

人はこの動きをメガばあからしっかりと訓練されていた。その特訓の成果が出て、ガチャギリとナメッチは相手の動きが手に取るように予測でき、ダイチにまったく近づけさせなかった。
「何やっとるんじゃおまんらは！たかだかこんにゃく刀なんぞに翻弄されおって」
「申し訳なかです坂本さん！こうなれば、坂本さんが直々にソイツを叩き斬ってください！」
『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』の２人は、ダイチをリーダーに任せた。リーダーは仕方がないという感じで指をぽきぽきとならしている。
「お前、坂本っていうのか。随分素行の悪い坂本さんだな。そんな名前を名乗ってると、歴史マニアが大挙して怒るぞ」
「ほざくな青二才。ほんならワシらで決着つけよか。ただし、ワシが使うのは斬鉄剣のような甘っちょろいもんじゃないがぜよ。ワシの真の刀を見せてやるきに」
「真の刀？」
そういうと坂本は２本帯びていた刀のうち、大きい方を抜いてみせた。その刀は稲妻のような紫電を宿しており、バチバチと電流がほとばしる音を鳴らしている。
「ワシの錬金術でたどり着いた至高の妖刀。名は“オニキリ”」
坂本はその刀をダイチに向けながら静かに言い放った。
「おにぎりがなんぼのもんだ！所詮この天叢雲剣よか弱いんだろ！」
「おにぎりじゃない、“オニキリ”じゃ！そうやってなめていられるのも今のうちじゃ！それい！」
坂本はいきなりダイチに向けたオニキリの刃先から稲妻のような電撃を撃ってきた。
「ぐはう！」
急な攻撃にダイチは思いっきりダメージを負った。そうじゃなくても稲妻の速さで飛んで来る電撃をよけるのは並大抵のことではなかった。
「ほれ！どんどん行くぞ！」

坂本がそう言ってまたオニキリの刃先をダイチに向け電撃を放つ。
その瞬間ダイチもとっさに体が動いていた。
「2度同じ攻撃にやられてたまるか！」
「なんじゃと！」
ダイチはメガビーを撃って坂本からの電撃を相殺した。そのメガビーは戦い前に半ば強引にメガばあに買わされた武器だった。かならずどこかで役に立つはずだろうと。
「剣術を磨いているとかほざいているわりに、飛び道具に頼るのかよ。情けないな、坂本さんよ」
「むむっ！ならば、本当の剣術で勝負じゃ！お主にワシは止めれんだろうがの！」
挑発的なダイチの言葉に乗って、坂本はダイチに向かって刀を振りかざしながら突っ込んできた。
「オレのこの1週間の特訓の成果を見ろ！」
ダイチも天叢雲剣で坂本の攻撃をなんとか食い止めた。
「少しはやるようになったの！じゃが、その程度じゃワシには勝てぬぞ！」
坂本も負けじとどんどんダイチに斬りかかる。ダイチはその目にも止まらぬその攻撃をなんとかはじき返していった。1つでも相手の動きを見誤れば確実に斬られてしまう、ギリギリの防御だった。
「くそっ！これで決めちゃる！必殺、雷神双破斬！」
「負けるか！最終奥義、真空裂斬！」
ダイチと坂本の刀はそれぞれ火炎と紫電のエネルギーを極限まで宿しながら、そしてお互いの最後の力を振り絞りながらぶつかり合った。その瞬間戦場の空き地全体にこだまするような爆発音が轟く。いつしかガチャギリとナメッチ、そして『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』の他の2人のメンバーも、ダイチと坂本の激しいつばぜり合いに見入っていた。ぶつかり合う刀からは火花が散り、そこから発生する突風のような衝撃波に空き地の草木も煽られている。
「なんでじゃ！なんでワシの必殺技さえも食い止められてしまうん

じゃ！おまんがその刀を手にしてものの1週間だというのに」
「教えてやろうか！夢の大きさが違うんだよ！お前らみたいなならず者と違ってな！」
坂本にダイチは誇らしげに返した。この1週間の地獄の特訓を耐えられてきたのは、ひとえにその途方もない夢を思い浮かべていたからだった。
「この世界にゃ叶わん夢もあるんじゃ！ワシらとて1度はこの大黒の頂点を目指したこともあった。そして剣術という己が道を極めたが、この世界はワシらに冷酷じゃった。こちらの倍以上の人数でワシらを囲み、最新鋭のミサイルがあらゆる方向から飛んで来る。この前お主らに見せた、相手の武器ごと叩き斬るという戦法もその状況では通用しなかった。ワシは、こういう1対1での男と男の真剣勝負を望んでおったのに」
「それが、人のテリトリーを蹂躙して弱いものからカツアゲをするようになった理由か？」
「そうじゃ。ワシらはその時気付いた。この世界は卑怯極まりないことをしないと生き残れん。ワシらの望む真剣勝負などありはしない。この世界の頂点を極めるなど、卑怯、姑息の称号を得るに等しいとな」
「ざけんな！それは自分の力のなさを、周りのせいだとなすりつけてるだけじゃないか！お前らの夢は所詮その程度だったのか！？ええ！？坂本さんよ！」
「やかましい！ポッと出の挫折を知らんおまんらに説教される筋合いはねえ！ワシらはその天叢雲剣を手に入れる！どんなにその刀の威力が卑怯だと言われるようなものでも、それを携え再び電脳世界に殴り込みをかける！大黒の頂点などいらん！ただ、ワシらから夢を奪っていった連中に復讐を果たすのじゃ！」
2人は互いの言い分をぶつけ合いながらも、互角のつばぜり合いを続けていた。しかし坂本は、ダイチの天叢雲剣に宿る火炎の数が増えてきているのに気付いていなかった。

「そんな歪んだ思いに、オレたちの夢が負けるはずない！知ってるか？この天叢雲剣は相手の刀とぶつかり合うことで、相手の刀の持つエネルギーを食うことができるんだ。」
「なんじゃと！ワシのオニキリの紫電が弱まっている！？おまんの天叢雲剣の火炎は……」
「ああそうだ！お前らのその負の感情は、この天叢雲剣が食ってやったのさ！さあ！勝負をつけるぞ！」
そう言うとダイチは最後の力を振り絞り、坂本のオニキリをはじき飛ばした。
「オレたちの夢への快進撃は、誰にも止められないんだよ！」
「ぐはっ！」
ダイチは坂本を天叢雲剣で斬り倒した。坂本のメガネは白く煙り、膝を折りながらその場に崩れ落ちていった。
「坂本さん！」
『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』のメンバーが坂本の元に駆け寄る。坂本はその悔しさからかしばらく立ち上げることができなかった。
「勝負あったな。お前ら、このダイチに斬られたくなけりゃ武器を捨てろ」
ガチャギリが２人に向かって言った。２人ももう抵抗はできないと観念し、持っていた斬鉄剣をその場に置いた。
「・・・・・・くそう。もうワシらには存在する価値もないのか。あれだけ打ち込んだ剣術でも負けた。これからも卑怯なマネをしてでもクラブを存続させるのは、ただ恥をさらすだけじゃ。おまんら、すまなかったな。こんなふがいないリーダーでよ。チーム『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』は、今日を持って解散する」
「坂本さん……」
坂本は立ち上がって２人に解散を命じた。２人はそれでも寂しげな眼差しをしている。
「ありがとよ。最後におまんみたいな男と差しで差しの勝負ができて、楽しかったぞ」

坂本はダイチにそれだけ言い残して背を向けた。そしてすごすごとその場から立ち去ろうとした。
「……待てよ。これでいいのかよ。お前らこのままやめたら、お前らの夢を奪っていったヤツらに笑い者にされるだけだぞ」
その時ダイチが坂本を呼び止めて言った。
「言ったじゃろう。このまま卑怯なマネを繰り返しても恥をさらすだけじゃと。その方がヤツらに笑われてしまう」
「やっぱりお前の夢ってそんなもんだったのかよ。確かに弱いものからカツアゲをするなんていうのは卑怯者のやることだ。でも、戦いにおいてはお前らは呆れるほどフェアだった。これが武士道ってヤツなのかと思ったぐらいだ」
ダイチは彼らの戦いぶりに感心していた。むしろ勝利を収めたとはいえ、強力すぎる刀で勝負を挑んだ自分の方が卑怯だと思った。
「やり直せよ。電脳戦争界にお前らの言う真剣勝負の風を巻き起こしてやれ。今日お前らと戦ってオレは気付いた。フェアな真剣勝負がメチャムチャ面白いことにな。たとえオレが負けていたとしても、悔いは残らないだろうなと思ったくらいだ。勝負の世界は勝つことがすべてじゃない。それを他のクラブにも気付かせてやれば、この世界は変わるだろうよ」
ダイチの言葉に、坂本の心は温かいもので満たされた。
「・・・・・・ふん。粋なこと言ってくれるじゃねえか。そうだな。お前らがそう言うのなら、まだ少しだけこのクラブも続けてやっていいか。今日みたいな勝負を、またやりたいしな」
坂本は笑顔でダイチに返す。ダイチも笑みで返した。
「ほらその刀、まだ要るんだろ。ちゃんと持って帰れよ。また、いつか勝負しようぜ」
「ああ。またいつかな。そうだ。この前おまんらからカツアゲしたメタバグ、返しておく」
「いらねえよ。それはお前らの活動資金にしろ。こっちは今日ここに落ちているメタバグで十分だからな」

「そうか。じゃあ、達者でな」
『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』のメンバーは刀を再び腰にさして、晴れやかな気持ちで空き地を後にしていった。

「いや～やったぜ！これが『大黒市黒客クラブ』の初勝利だ！」
「おお！そういやそうだな！めでたいなこりゃ！」
ガチャギリがうれしそうにガッツポーズを見せながら言い、ダイチとハイタッチをかわす。ナメッチと３人でしばらくその勝利の余韻に浸っていた。
「それにこれ。天叢雲剣はどうすんだ？これだけ強力な力を秘めているんだ。メガばあに返さずにずっと持ってりゃ心強いぞ」
ガチャギリはダイチに訊ねた。約束ではメガばあに返すことになっているが。
「……いや。こいつにはもう頼らねえ。今日勝てたのはこいつのおかげだが、何よりオレたちの夢を思う気持ちの勝利だったような気がする。それを忘れなければこの先なんとかなるって。これを使って頂点を極めたヤマトのように、夢を叶えたところで後悔はしたくないからな」
ダイチは天叢剣を大事に鞘におさめながら言う。この刀のおかげで、ダイチは自信という武器を手に入れたような気がした。何より自分の夢を信じる心は、誰にも負けてはいないという自信が。
「そうか。まあ、お前らしいな。じゃあここでメタバグを拾って赤字を補填して、帰りにメガばあのところに返しに行くか」
「そうしよう」
「オヤビンかっこ良かったッスよ！」
そうして『黒客』はこの勝利で大黒電脳戦争界の歴史にまた新たな１ページを刻みつけた。

「ああ、メガばあ？私。ダイチ達、なんとか勝ったわ」
そのダイチ達の勝負を影からひっそりと見守っていたフミエは、メ

ガばあに報告のため電話をかけていた。
「そうか。ワシの指導の成果が出たのじゃな。して、ヤツら天叢雲剣をどうするって言っておる？」
「……返すって言ってるわ。意外だったけどね。」
「そうか。あの刀の力に魅せられてそのまま自分たちのモノにするかもしれんと思っておったが、それも杞憂じゃったな。これで天叢雲剣の自壊装置も作動させんで済む」
メガばあはそれを聞いてダイチ達に感心する。
「ええ。今日は、私もダイチを見直したかも。アイツらの夢への情熱は本物。ま、同時にそのダイチ達を倒したいっていう思いも増したんだけどね」
まさに好敵手を見据える目で、フミエはメタバグを漁るダイチを見ていた。
「焦るでない。今はメガシ屋の顧客の情報から、お主の力を必要としている電脳クラブを探しておるところじゃ。」
「できるだけ早くお願いね。アイツらの夢を阻むのは、この私なんだから」

Ｅｐｉｓｏｄｅ　５　勃発！大黒市南北戦争！！

２０２６年　３月

ならず者集団『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』を倒してからというもの、ダイチ達『黒客』の活動はようやく軌道に乗り始めた。まず第三小内では外敵を打ち払った英雄として讃えられ、ダイチ達に活動資金を上納する生徒が現れ始めた。その生徒にとってはいわば保険代である。今後他校の生徒からカツアゲに遭うようなことがあれば、ダイチ達に頼んでそのクラブを追い払い、奪われたメタバグを取り返してもらうのである。ダイチ達も積極的にはたらきかけたこともあり、この『黒客』のいわば顧客はどんどん増えていった。その分顧客１人１人の負担も減り、『黒客』も十分な活動資金を得る。こうして黒客は第三小では一大勢力を築くことに成功した。

そしてもう１つの変化は、他校の電脳クラブからも注目されることになったことだ。『黒客』が倒した『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』は他校のクラブにとっても目障りな存在だったらしく、その上実力も抜きん出ていたのでなかなかどこのクラブも手出しができない状況だった。それを相手と同数で戦いを挑んで勝利した『黒客』は、大黒電脳戦争界に彗星のごとく現れた新勢力として認知されるようになったのだ。

そんな『黒客』にとっての次なる大きな戦いは、春休みも目前に迫った５年最後の時期に迎えた。話は『黒客』の公式ホームページを作ろうというところから始まった。

「オレたちはこの第三小を代表する存在として十分な力を蓄えた。ネットでもオレたちの存在は色々と噂されているらしい。そこでもっと多くの人にオレたちのことを知ってもらうために、公式ホームページを作ろうと思うんだがどうだ？」

いつものように、ろくに活動もしていない生物部の部活の最中に『

黒客』メンバーは集まって会議をしていた。そこでダイチがメンバーにそのような提案をした。
「いいんじゃね？他のクラブとのコミュニティを作っておきたいところだからな。ホームページを作っておくと、オレたちに接触してくる人間も増えるだろう」
ガチャギリもいい案だとうなずく。ナメッチもデンパもそれで異存はなかった。
「よし、決まりだ。すでにレイアウトなんかも考えているんだ。これを見てくれよ。」
この日はホームページのレイアウトをメンバーで一緒に考えて会議は終わった。

『黒客』ホームページをオープンしてから3日ほどが過ぎると、その注目度の高さを示すようにアクセス数はダイチ達の予想を上回るほど伸びていた。そしてＣＯＮＴＡＣＴと銘打ったコーナーには、他校のクラブから黒客へのオファーが何通か届いていた。内容は『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』を倒した武勇伝が聞きたいとか練習試合の申し込み、面白いものではメガネについて指導してほしいなど多種多様だった。
「いや～、結構来るもんだな。これで儲け話には事欠かないな」
ダイチが満足そうに眺めながら言う。それらの依頼にはそれなりの報酬も記載されていた。
「１番儲かりそうなのは……これか。ほら、第一小のクラブから届いた申し込みだ」
それらの内容と報酬をよく吟味していたガチャギリがメンバーに示して見せた。
「どれどれ？こんにちは、第一小の電脳クラブ『焔』です。実は最近、僕たち一小校区の南端のテリトリーを巡って、大黒市の南の電脳クラブとの緊張状態が続いています。すぐにでも戦争に発展しそ

うな状態です。しかしこちら大黒北側の勢力は現在人数が不足していてこのままだと勝ち目がありません。そこで先日の活躍を耳にし、『黒客』さんに是非僕たちに協力してもらいたく連絡させていただきました。現在争奪戦となっているそのテリトリーには、大きなメタバグの鉱脈がありますので、成功報酬は十分にお支払いするつもりです。もしよろしければ直接お会いし、詳しい状況を説明させていただきます。それでは」
ダイチがその申し込みを読んで考え込んだ。悪くない話ではあるが、劣勢な側につくのはリスクも伴う。もちろんその分見返りも大きいのだが。
「この大黒の南北の境っていうのは今まで曖昧に設定されてきた。実際は駅向こうの第一小の校区の南端にあたるんだが、これにもある通りそこはメタバグが多く発掘されるポイントだから、しょっちゅう北と南のクラブで取り合いをしている」
「大黒市の中でも一番電脳的な意味で治安の悪い場所なんスよね？」
ガチャギリやナメッチでも知っているくらい、その地区の争いの激しさは有名だった。
「ガチャギリ。ここで一小の側について採算はとれそうか？」
「直接会って詳しく話を聞かないとわからんが、この報酬は魅力だ。それに第一小に恩を売っておけば、後々オレたちも動きやすくはなる。賭けてみる価値はありそうだぜ」
ダイチの質問に参謀のガチャギリが答える。そうしてダイチの腹は決まった。
「よし、とりあえず会うだけ会ってみよう。それから参戦するかは考える」
ダイチはその電脳クラブ『焔』にそのような返事を出し、後日直接会うことになった。

大黒駅向こうの日渡公園でダイチ達黒客、一小の『焔』、そしてもう１つ観音小の電脳クラブ『Ｋ３』の３クラブが一同に会した。

すでに『焔』と『Ｋ３』は同盟関係にあり、そこに『黒客』が加わるかどうかが議題となった。
「敵は大黒市南にある小学校の電脳クラブ。蔵地の『プログレス』、不動の『ＧＴＣクラブ』、宝生の『ウイングス』だ。すでにこの３クラブは同盟を組んで『サウスユナイテッド』と名乗っている。手強いクラブばかりだ」
『焔』のリーダーが状況をまずダイチ達に説明する。
「ああ、確かに名の通ったクラブが集まってるな。じゃあ質問するが、仮にオレたちがこちらの同盟に加わったとして、そいつらに勝てる見込みはあるのか？」
そこでガチャギリが質問した。『サウスユナイテッド』はそれなりに有名なクラブが集まっていたのでその実力も見当はついたが、一方のこの『焔』と『Ｋ３』の実力は未知数だった。
「難しい質問だ。正直かなり厳しいと言わざるを得ないが、『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』に勝利した君たちが実力を発揮してくれれば勝つことは不可能じゃない」
「おいおい。他力本願はやめてくれよ。『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』の時は普通の電脳戦じゃなかったからな。オレたちだって実戦経験は浅いんだ。本当に勝ちたいのなら報酬の予算を気にしないで、もっと実力のあるクラブに頼むんだな」
ダイチは話を聞いてだんだんと乗りたくはないなと思い始めていた。おそらく『焔』が自分たちに声をかけてきたのは、傭兵としての価値がまだ跳ね上がっていないからだ。実力のあるクラブを助っ人に呼ぼうとすると、やはりそれなりの報酬を用意しなければならない。安くていい素材を、ということで考えると、今の『黒客』は助っ人に呼ぶのにうってつけだった。
「じゃあ、君たちは断ると？」
「待ってくれ。ダイチ。ここは考えようだぞ」
「何がだよ？」
断るつもりでいたダイチをガチャギリが制した。何か考えがあるら

しい。
「お前、この大黒市でのトップを狙うんだろ。だったら報酬を気にしないで受けてやったらどうなんだ？もしここで勝利すれば、今後のオレたちの価値はぐっと跳ね上がるんだぞ。それに今オレたちは経済的に余裕がある。負けてもそれはそれで勉強じゃねえか」
「珍しいこと言うな。お前がこんな不利な戦いに乗ろうなんて」
「勝てる戦いにだけ参戦するなんて、それはオレたちの先輩と同じことだろ。劣勢の側について見えてくるものもある」
ガチャギリはあくまでこの戦いを将来を見据えた勉強の１つとして捉えているようだ。確かにそう考えると、今回の負けたら自分たちのテリトリーが削られるというわけではないので、損失はそこまで甚大なものでもなくなる。逆に勝利した時の報酬は莫大だ。この戦いはよく考えるとローリスクハイリターンだった。ガチャギリはダイチにそのことをこんこんと説いた。
「なるほど。一理あるな」
「だろ？それに電脳戦争は実力のあるクラブがより固まったところで、絶対に勝てるというものでもない。問題はお前の好きなチームワークだ」
「確かにその通りだよ。過去にも色々な電脳クラブが同盟を組んで戦争を行ったことがあったけど、必ずしも強いクラブ同士の同盟が勝っているというわけでもない。やっぱり電脳クラブにはそれぞれの戦い方があるし、いきなり実戦でうまく連携がとれるかどうかは実力とはまた別問題だ」
ガチャギリの言葉に『焔』のリーダーも乗っかってダイチを説得した。
「でも、それはこっちも条件が同じだろ。それならその戦争が始まるまでに、ちゃんとチーム内で連携が取り合えるように特訓するか？それをやるっていうのならこっちもこの同盟受けてやってもいいが」
ダイチもやるからには勝ちたいので、そのための準備を万端にした

かった。この即席チームの連携を高めることが勝利への鍵である。
「本当に？助かる。おそらくアイツらが攻撃を仕掛けてくるのは３日後ぐらいだ。まだ十分時間はある」
「おいおい。あと３日しかねえのかよ。こりゃ急ピッチで仕上げるしかねえな。言っておくがオレたちの特訓は厳しいぞ。途中で音を上げるなよ」
ダイチ達は『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』戦の時にメガばあから並外れた特訓を受けさせられたので、普段の練習もかなり厳しいものになっていた。
「構わない。こっちもあのテリトリーを押さえられると本当に苦しくなるんだ。今回は死ぬ気で戦うつもりだよ」
『焔』のリーダーもかなり切実な表情で返した。こうして『黒客』と『焔』、『Ｋ３』の３クラブは『北部同盟』と名乗り、来る黒客にとっての初めての大規模な電脳戦争に向けて特訓を重ねていった。

決戦日の前日、特訓を終えた黒客はダイチ達だけで三小校区内にあるガラクタ屋で一息ついていた。ここで明日の作戦を話し合うつもりだった。
「まあまあ、そこそこのレベルには持って行けたんでね？『焔』も『Ｋ３』も、思ったほど悪くなかったしな。オレたちの活躍次第じゃ、十分勝つこともできると思うんだが」
「油断はできねえよ。相手もオレたちが参戦すると聞いて、気を引き締めているはずだ。それに蔵地には、大黒の諸葛亮孔明と呼ばれる天才軍略家がいるらしいからな」
「諸葛亮孔明？」
ナメッチがガチャギリに聞き返した。
「知らんのか？中国の三国志に登場する天才軍師だ」
「おい、蔵地にそんなヤツがいるなんて聞いたことねえぞ」
今度はダイチがガチャギリに言う。この情報もガチャギリが情報屋から仕入れたものだとはダイチにもわかった。

「ああ。こいつは渡り軍師と呼ばれていて、一応蔵地小の生徒なんだが電脳クラブには所属していない。今回のオレたちみたいに、助っ人として雇われて報酬を得るという活動をしている」
「なるほど。天才と呼ばれているからには、やっぱ行く先々で勝利をもたらしてるんだろ？」
「そうだ。もはや孔明はコードネームとして大黒中に名を馳せている。その分報酬も高いわけだが、それでも『サウスユナイテッド』が雇ったってことは、連中もこの戦いに賭けているってことだろう。厳しい戦いになると思うぜ」
もともと実力ではダイチ達『北部同盟』の方が劣っていたところに、敵方はさらに勝率を高めるために天才軍師を味方に引き入れた。ウラを返せば敵も『黒客』の力を警戒しているということでもあり、孔明と呼ばれる少年にとっても『黒客』は１度その目で見てみたかった存在だったのだろう。
「敵はむしろその軍略家の孔明か。それならオレたちも『北部同盟』で作戦を立てるべきだったんじゃないか？一応の連携はとれるようになったが、敵の術中にはまってしまうと元も子もねえからな」
「それは考えるだけ無駄だろう。相手は百戦錬磨の天才軍師だぞ。言ってもこれほどの大規模戦争に参加するのは初めてのオレたちが頭こねくりまわしたところでどうにかなる相手じゃねえ」
「じゃあ、無策で行くんスか？」
それはそれでいかがなものなのかと思ったナメッチがガチャギリに訊ねる。
「いや、手は打つだけ打つさ。うまく行くかどうかわからんがな」
「おお。『黒客』の名参謀ガチャギリの本領発揮か？どんな作戦だ？」
この後ダイチとナメッチはガチャギリの作戦を聞いた。はじめそれを聞いたときは驚くとともにそんなことが可能なのかと疑ったが、ガチャギリには絶対の自信があるという。ダイチ達はそれに賭けることに腹を決めて、決戦日を迎えることになった。

ダイチ達の勢力である『北部同盟』は、『サウスユナイテッド』を迎え撃つ砦を第一小校区内、駅向こうにある廃工場に設定した。ここは内部が複雑に入り組んでいる一方で、この3クラブともたまにメタバグを拾いに来ることもあり土地勘があった。実力で劣る『北部同盟』は地の利を存分に生かして戦うつもりだった。

「持ち場をしっかり確認しろよ。それから味方のトラップに引っかかるようなバカなマネはするな。囲まれた時は無理しないで助けを呼べ。後はこれまで特訓してきたことを出し切ればいい」

「よし」

ダイチがその場にいた全員に言い聞かしたところで『焔』のメンバーの1人から連絡が入った。『焔』のうちの何人かは、敵をこの廃工場にまで引きつけるおとり役となっている。後はトラップを大量に仕掛けた工場内部まで誘い込み、迎え撃つだけとなった。

「どうする孔明？ヤツらこの廃工場に籠城する気みたいだが」

『サウスユナイテッド』の総大将が隣にいたコードネーム孔明に確認する。すでに戦況は、『北部同盟』の3クラブすべてが廃工場の中で待機しているという状況で、『サウスユナイテッド』は廃工場の入り口に集まってどう攻めたものか考えていた。

「計算通りだ。こちらより力の劣る連中がまともにぶつかってくることはないと思っていた。となると自分たちの間合いにこちらをおびき寄せることが必要になる。それをこの廃工場に設定したというのも、こちらの読み通りだった。すでに何日か前から蔵地の『プログレス』のメンバーを使って、ここにトラップを仕掛けておいた」

細い目つきをさらに細めるように笑いながら、その孔明はメンバーに言い聞かせた。すでに『北部同盟』の作戦はお見通しだったというわけだ。

「さすが孔明、心強いな。とはいえヤツらもここに多くのトラップを仕掛けているはずだ。どう戦えばいい？」

「まずは様子見だ。連中の仕掛けたトラップの位置を把握しておく必要がある。おそらく連中もそのトラップに誘い込むように動いてくるだろう。だからここは慎重に連中との間合いを取りながら工場の中に入るんだ。その連中の動きを見て、オレが連中の仕掛けたトラップの位置を大体予測する。それに気をつけながら、今度はこちらが仕掛けたトラップの位置まで連中を誘い出すんだ。連中はこの工場にこちらがトラップを仕掛けていることを知らないだろうからな」

そう言うと孔明は工場の詳細な見取り図を出した。この時のために用意していたものだ。『北部同盟』は『サウスユナイテッド』にはこの工場の土地勘はないと踏んでいたのだが、それも見込みはずれのものとなった。

「工場全体の西側エリアを『ＧＴＣクラブ』、中央エリアを『ウイングス』、そして東側エリアを『プログレス』が攻めてくれ。第一の撃破目標は『大黒黒客』。ヤツらを見つけたクラブは真っ先にオレに連絡してくれ。オレが指示を出して最優先でヤツらを駆逐する」

「ああ、この前『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』に勝利して颯爽とこの電脳戦争界にデビューしたクラブか。買いかぶり過ぎじゃねえのか？まだヤツらは１度しか実戦を経験してないんだぞ。」

黒客を警戒する孔明に『ウイングス』のリーダーが訊ねた。

「いや、『北部同盟』の柱は間違いなく『黒客』だ。連中を先に撃破することによって、他のクラブも浮き足立つ。買いかぶり過ぎも何も、相手の柱を叩いておくことが大規模戦争でのセオリーだ。」

孔明の言葉に、その場にいた全員が納得する。そうして『サウスユナイテッド』は孔明に割り当てられたエリアに向かって進撃を始めた。

「来たぜ。相手は蔵地小の『プログレス』だ。メンバー全員が『Ｐ』とプリントされたリストバンドをつけているのが特徴だ。」

『サウスユナイテッド』が進撃を始めた時、『黒客』メンバーは工

場東側の屋外、貯水タンクのある一棟の屋上で待ち構えていた。ガチャギリが工場の中に仕掛けていたカメラからの映像を見て、こちらに来ているのが『プログレス』であることを知る。
「よしナメッチ、狙撃準備だ。タンク裏側の通路から敵が出て来たら容赦なく撃てよ」
「了解ッス」
ダイチ達がいる場所は高さでいうと2階にあたる。工場屋外の1階の通路は迷路のように入り組んでおり、ダイチ達はまずその見晴らしのいい場所から敵を見つけ次第狙撃するという作戦を立てていた。
「オヤびん。来ました」
ナメッチが静かに報告する。ナメッチは伏せて屋上を巡っているパイプに身を隠して、その隙間からレーザーライフルで敵を狙っていた。
「いいぞ。よく引きつけてな。よし、撃て！」
ダイチが観測手となり、ナメッチに攻撃の指示を出す。意外にもナメッチは『黒客』随一の射撃の腕前を誇っており、ダイチとガチャギリは安心してナメッチに狙撃を任せられた。

「うわっ！レーザーライフルか！一旦退くぞ！」
『プログレス』のリーダーは仲間が狙撃されたのを見て、1度工場屋内に引き返した。
「まずいな。ヤツらはタンクの上から狙って来ている。このまま飛び出すのは自殺行為だ」
「だな。ヤツらがもしかして噂の『黒客』なのか」
「そうかもしれない。あの射撃の腕前はなかなかのものだ。ここは孔明に連絡をとろう」
『プログレス』メンバーは相談し、ここは孔明に作戦を聞くことにした」
「どうした？」
「孔明、『黒客』が現れた。連中は工場東側にある貯水タンクの建

物の上から下側の通路を狙っている。近づくことは難しそうだ。」
『プログレス』リーダーが報告を入れると、孔明は少し笑ったように息を吐き出した。
「やっぱりか。そのポイントは狙撃するには絶好の場所。さすがに噂に聞く『大黒黒客』。戦いのツボをしっかりと押さえてるな」
「感心してないで、何かいい方法はないのかよ？」
「オレを誰だと思ってるんだ？諸葛亮孔明だぞ。こうなることはすでに予想の範囲内だ。見てろよ。今からどでかい花火を打ち上げてやるぜ」

「連中出て来なくなったな」
ダイチが『プログレス』が引っ込んでいった場所を眺めながら言った。
「ああ。おそらく他の場所からこちらを狙うつもりだろう。でもトラップだらけの工場内を無事で抜けられるはずがない。唯一トラップを仕掛けていないのがこの下の通路だが、そこはオレたちがスナイプしているからな。この布陣はそうそう簡単に破られることはないと思うぜ」
ガチャギリが自信ありげに言って、ダイチも安心する。その時だった。突然、それもかなり近くでけたたましい爆発音が轟いた。そのショックでナメッチはその場で気を失ってしまった。
「お、おい！見ろよ、タンクが！」
ダイチがすぐ目の前にそびえているタンクを見上げる。なんとあろうことか貯水タンクは爆発炎上しており、大量の黒い煙が立ち上っている。爆発の影響でタンクにはひびが入っており、そこに貯められていた水が噴水のようにところどころ吹き出している。
「どうなってんだ！？」
ガチャギリは慌ててメガネを押し上げる。しかし現実世界のタンクは先ほどまでと同じように静かにそびえている。つまりこの爆発は電脳上でのみ起こったということだ。

「爆弾でも仕掛けられてたんじゃねえか？」
「バカ言うな！いつ連中に爆弾を仕掛ける時間があったって言うんだよ！」
ダイチとガチャギリが茫然と立ちすくむ中、２度目の爆発が起こった。今度はその瞬間をダイチ達もはっきりと見た。タンクはついに崩壊し、中に貯められていた水が一気に大波のように降り掛かって来た。
「ブファ！やべえ！この騒ぎに乗じて『プログレス』のヤツらが押し寄せてきやがった！」
１階通路にも水が流れ落ち、工場の東エリアは水浸しとなっていた。その水を跳ね上げながら、機敏な動きで『プログレス』のメンバーがこちらに向かってくるのが見えた。
「くそっ！おいナメッチ！起きろ！敵が来たぞ！」
「へあああ！？」
爆発のショックでのびていたナメッチは、ダイチに蹴りつけられて飛び起きる。
「とにかくここは逃げ場がない。降りてオレたちも１階通路を逃げるぞ！急げ！」
ガチャギリが先頭をきってタンクの建物の屋上から階段を下りてゆく。ダイチとナメッチも後に続いた。そこに『プログレス』のメンバーが駆けつける。逃げるダイチ達は背中からマシンガンの嵐を受けることになった。
「逃すな！撃て、撃て！！」
「ちっくしょう！これでどうだ！」
ダイチは逃げながら背後に鉄壁同時３枚投げという離れ業をやってのけた。鉄壁は投げられた時にお互いが重なり合ってしまうと効果を発揮せず消えてしまう。重なり合わないように、それも３枚を同時に投げるのは相当な訓練が必要だった。
「なんてヤツだ！撃ち方やめい！」
『プログレス』のリーダーがメンバーに指示を出してマシンガン攻

撃をやめさせる。その隙にダイチ達は工場の建物の間の細い通路に入って行った。
「すまん孔明。逃がしてしまった」
「ふん。こうなることもお見通しだっての！」
ガチャギリを先頭に薄暗い通路を行く『黒客』メンバー。その時目の前に火柱がのぼった。
「ええええっ！？」
ナメッチが絶望したような声を上げる。ガチャギリは舌打ちしながら狭い通路を見回した。
「そっち行けるか？」
最後尾のダイチの横に狭い通路があった。ダイチはそこを覗き込んで確かめる。
「人が1人通り抜けられるのがやっとかもしれん。それにこの先がどこにつながってるのかわからん」
「構わん！この状況だ。後ろから追っ手は来てるし、前方は火の海だ。その通路に入るしか逃げ道はない！」
ガチャギリが言うので、ダイチは先にその通路に身を滑り込ませていった。その後にナメッチも続き、最後に通路に入ったガチャギリが入り口に鉄壁を投げる。ようやく『黒客』は一息つくことができた。
「おい、どうなってんだよこれは」
3人とも肩で息をしており、1つ咳払いをしてからダイチがガチャギリに訊ねた。まるで自分たちのすべての行動が見通されているような不気味さをダイチは感じていた。
「わからん。もしかすると、向こうの孔明はオレたちがここに籠城するのを見通していたのかもしれん。オレたちより先にこの場所にトラップを仕掛けていたとしか考えられん」
「ええっ？どうするんスか？このままだとオレたち袋のネズミってことでしょ？ただアイツらにやられるのを待つだけっスか？」
ガチャギリの言葉に、ナメッチが情けない声を上げた。自分たちが

この戦いで勝ち目を見いだせたのは、自分たちが場慣れしていて、なおかつトラップも仕掛けていたこの工場に敵をうまく誘い込めたからだ。実力では相手より劣るところに、戦術でも上手をとられると、さすがにこちらには勝ち目はないだろうとナメッチは思った。
「諦めるなよ。まだ体勢を立て直すチャンスはある。とりあえず『焔』と『Ｋ３』とも連絡をとって、それぞれの戦況を確かめる」
ガチャギリが落ち着き払って言った。この戦いのために、ガチャギリは色々と準備をしてきた。孔明にも負けないという自信もあった。
「連絡をとってどうするんだ？とりあえず合流か？」
「そうだな。オレとしては作戦Ｅをとりたいところだ。おそらくそれで孔明のウラをかける」
ダイチ達はガチャギリの作戦を信じて、他の２クラブと連絡を取り合った。

一方『サウスユナイテッド』の孔明は、工場敷地の入り口でそれぞれのクラブの戦況をモニターしていた。ダイチ達『黒客』はうまく蔵地小の『プログレス』の追撃から逃れたほか、『北部同盟』の２クラブもなんとか逃げ延びている状況だった。『サウスユナイテッド』の各クラブは工場内を歩き回り、どこかに潜んでいるであろう『北部同盟』のクラブを探し続けていた。
「おい孔明。さっきから連中の気配がないようなんだが」
ダイチ達を探していた『プログレス』からの連絡が入った。ダイチ達を見失ってから、１０分ほどが経過している。
「どこかにいるはずだろう。トラップに気をつけて引き続き慎重に探してくれよ」
「そうするが、連中がもうこの工場から逃げ出したっていう可能性はないか？」
『プログレス』のリーダーが訊ねる。広い工場内、うまく通路を辿っていけば見つからずに敷地の外に出ることも可能だが。
「ああ、確かにその可能性もあるな。よし、ここは一旦引き揚げて

きてくれ。もう1度作戦を練り直そう」
「了解」
孔明はそう言って『プログレス』との連絡を切ろうとした。その時だった。
「ぐあああ！」
工場東エリアから響き渡る爆発音と、『プログレス』リーダーの悲鳴が重なった。孔明はそちらの方を向く。するといくつかの建物から黒煙がのぼっているのが確認できた。
「くっ、やられたか」
孔明は下唇を噛んだ。すでに工場の東エリアを逃げまわっていた『黒客』はとっくに脱出していたのだ。そして『黒客』は自分たちのいたエリアにたっぷりと電脳爆弾を仕掛けていたらしい。そこまで用意していたことは、孔明にとっても予想外の出来事だった。
「ったく。今の爆発起こすのにいくらかかったと思ってんだ」
孔明のすぐ後ろから声がした。すると工場入り口にはダイチ達『黒客』、そして『焔』、『K3』と工場の中を逃げ回っていたクラブすべてのメンバーが終結していた。
「お前が孔明だな？」
ダイチが訊ねる。聞かなくてもこの場所でモニタリングしている時点で正体はわかっていたが。
「ああ、そうだ。お前らはとっくにこの工場を抜け出していたのか。どうりで『サウス』の連中が探しまわっても見つかれないわけだぜ」
「なめんじゃねえよ。体勢が悪くなったときは、1度工場の外に出て立て直すということにしていたんだ。そのための抜け道もいくつか用意しておいた。誤算だったな。今度はオレたちがお前らを囲い込む番だ」
ダイチが楽しそうに言う。立場は先ほどと入れ替わった。
「あんたはもう無駄な抵抗をしてもダメっスよ。やられたくないならおとなしく投降するんスね」
続いてナメッチも言ったが、孔明はそこで笑い始めた。

「ははははっ。弱小の寄せ集めのお前らに投降しろって？それ本気で言ってるのか？オレを誰だと思ってるんだ？孔明だぞ」
そういうと孔明は背を向けて走り出した。
「くそっ、逃がすな！」
ダイチが指示を出して『北部同盟』が一斉射撃に出る。ところが孔明は何か空き缶のようなものをこちらに投げ込んできた。それがダイチ達の目の前で炸裂すると、ダイチ達の視界は白く焼き付き、聴覚もしばらく麻痺してしまった。その状態が戻ったのは炸裂から３０秒ほどした時だった。
「くそっ！なんなんだ今のは？」
「おそらく電脳のスタングレネードだ。激しい閃光と爆音で相手の行動を少しの間封じることができる」
ダイチにガチャギリが説明しながら、全員が辺りを見回した。孔明はどこに逃げたのかを確認する。
「オヤビン！あっちっス！」
ナメッチが指差した先、正面の建物の入り口に孔明はいた。ダイチ達はすぐさま後を追う。
「待てこらあ！逃がさねえ！」
ダイチ達は孔明を追い込んだ。ところが孔明の脇から次々と『サウス』のメンバーが姿を現す。孔明の指示によって救援にかけつけたのだ。その中には東側エリアで爆発に巻き込まれた『プログレス』の姿もあった。その内の何人かは既にメガネがクラッシュしていた。
「くそう。もうちょっとで孔明を倒せたのに。これでまた戦いは振り出しか」
ダイチは下唇を噛む。『プログレス』のメンバー数人は既に倒したものの、数ではやっと『サウス』と同数になったというところだ。この先果たして戦っていけるのか不安になる。
「おっと、戦いは振り出しではないな。自分たちの置かれている状況をよく確認しろ」
「なにっ！？」

孔明がそう言ってダイチ達の後方をあごで示す。そのままダイチ達が振り返ると、なんと新手の電脳クラブがダイチ達に銃を向けていた。ダイチ達は完全に挟み撃ちにされるという格好になった。
「これは、伏兵か！？おい！卑怯だぞ孔明！」
ダイチが怒って孔明に叫ぶ。電脳戦争は基本的に相手とほぼ同数で戦うのが暗黙のルールだと思っていたが、それは真剣勝負がしたいというダイチの希望に過ぎなかった。現れた新手はゆうに自分たちと同数。『サウス』のメンバーも合わせれば、敵は自分たちの倍の数がいることになる。
「おいおい。卑怯も何も、これが戦争だろ。こんなことも予期しないで、お前らはオレたちと勝負しようと思っていたのかよ」
孔明が至極当然のように言い放つ。電脳戦争に際してどれだけの味方を引き入れるか、それも勝負の１つに入っているらしい。
「そうだよな。その通りだ。ところでコイツらは何者だ？」
ガチャギリが孔明の言い分を認めながら訊ねた。
「こいつらはオレが蔵地小で組織した精鋭部隊だ。オレに付き従ってオレの覇権をたぐり寄せる駒ということだ」
「……なるほど、わかってきたぜ。孔明がこれまで渡り軍師として高額な報酬を稼いできたのは、こいつらを養うためか。そしてある時はこうして実戦で鍛え上げる。こいつらを使って目指すは大黒市の頂点ってか？」
ガチャギリはすべてを見抜いていた。あらゆる戦争に加担して報酬を稼いできたのは、それが目的じゃなくて手段だった。最後には大黒の頂点へとのぼりつめて大黒の電脳界を支配するつもりだったのだ。
「そうだ。この戦争だって通過点に過ぎない。確かに今争っているテリトリーの境界線は後々重要になってくるポイントだからな。だからこの戦争、本気で勝たせてもらう」
「そうか。同じ蔵地小の『プログレス』に協力しているフリをしているが、そのテリトリーだって後々お前が独占するつもりなんだろ

？おい気をつけろよ『プログレス』。お前らはただ単に利用されて、最後には仲間の孔明によって手を下されるんだからな」
「そんな……」
『プログレス』の面々はガチャギリの言葉に動揺している。孔明は今の時点では仲間だが、そのつながりは希薄であり、後々になって自分たちを滅ぼしにくるかもしれないというのは確かに現実的な筋書きだった。
「おい。アイツの言葉を信じるなよ。オレは『プログレス』を潰すつもりはない。確かにオレはコイツらを使って大黒の頂点に立ちたいと思っているが、だからってお前らとは敵対するつもりはない。むしろ、お互い協力し合っていくべきだ」
孔明が『プログレス』に言い聞かせる。ガチャギリはその言葉を聞いて笑い始めた。
「だとよ。残念だったな、『ウイングス』に『ＧＴＣクラブ』さんよ。連中、例のテリトリーにあるメタバグの鉱脈を蔵地小だけで独占するつもりらしいぜ。もう、あんなヤツらと手を組む必要もないんじゃないか？」
「ああ。そのようだな」
ガチャギリの言葉に、『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』は孔明に向かって銃口を向けた。
「お、おい！バカなマネはやめろ！お前らもアイツらの口車に乗せられるな！報酬はちゃんと払うって約束する！」
孔明がこの２クラブに向かって叫ぶ。この２クラブは多額の報酬目当てにこの戦いに参戦していた。だから報酬さえ払えば、なんの問題もないと孔明は思っていた。
「もはや報酬云々の問題じゃないな。お前ら蔵地にあの鉱脈を独占されるのはまずいんだよ。大体お前の言う大黒の覇権というのも、まずはオレたち南のクラブを一掃することから始めるんじゃないのか？」
『ウイングス』のリーダーが孔明に詰め寄った。こうして北と南で

争っているのはどちらかというと珍しい。いつもは南同士のクラブがぶつかり合っているので、この2クラブは本来蔵地とは敵対関係にある。
「おい、待てよ。まずはあの鉱脈から北の勢力を排除するのが先決じゃないのか？ここでの裏切りは南のクラブすべてへの裏切りになるんだぞ。明日からお前らは南のクラブの目の敵にされるんだぞ！」
孔明が必死に説得を試みる。
「お前は1つ大きな勘違いをしている。『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』は何一つお前らを裏切っていない。」
「なに？どういうことだ？」
孔明がガチャギリをいぶかしげに見た。
「最初からこの2クラブはお前達の仲間じゃなかったってことだ。そう、『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』は最初から『北部同盟』の一員だったんだよ。」
「なんだと！？」
孔明は初めてそこでガチャギリの仕込んでいた作戦を思い知った。ガチャギリの作戦とは『サウス』の『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』を『北部同盟』に引き入れること。ダイチはその作戦を聞いた時は果たしてそんなことが可能なのかと思った。しかしガチャギリには自信があった。普段は反目し合っているクラブ同士の同盟などすぐに崩れ落ちるはず。ガチャギリはそう信じてウラで必死に交渉を進めてきたのだ。もちろんこの作戦が孔明に知られた場合逆手に取られるリスクもあった。しかしリスクを冒さないとこの戦いでの勝利はないと思っていた。
「じゃあ最初からお前らは戦う意志はなかったのか？『北部同盟』のクラブを仕留め損なったのも、作戦のうちだったのか？」
孔明が『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』のリーダーに訊ねた。
「まあ、最初は様子見だった。適当に連中は泳がせておいて、お前が尻尾を出すのを待っていたんだ。この戦いの筋書きは、『北部同盟』を片付けた後、ついでにオレたちもこの工場に仕掛けたトラッ

プで倒そうとしていたんだろ？これであの鉱脈は独り占めできるわけだからな」
「くっ」
孔明の口からは観念したような声が漏れる。それはすべての目論みがバレたということを物語っていた。
「孔明。オレたちはあくまでお前と戦うぜ。こうなりゃ蔵地の意地を見せるしかないだろ」
『プログレス』のリーダーが孔明に言う。孔明はありがたいとうなずいた。
「それなら戦いは『蔵地ユナイテッド』と、『北部同盟』ということになりそうだな。いいのか？人数では圧倒的に蔵地が不利だが」
ガチャギリが気を遣うように言った。もう人数でも実力でも黒客側の有利は一目瞭然だった。
「なめるなよ。オレを誰だと思ってるんだ？孔明だぞ」
孔明はそう言うと、再び黒客側に向かって手榴弾のようなものを投げた。そして『蔵地ユナイテッド』は一斉に動き出した。
「またスタングレネードだ！目を背けろ！」
それを見たダイチが叫ぶ。あの閃光を見てしまえば視界が白く焼き付いてしまう。この一瞬でできることは、ただ目をその光から背けることだった。ところが爆発したのはスタングレネードではなく、メガネにダメージを与える爆発系のグレネードだった。ダイチ達は襲ってくる黒い爆風でそのことに気付いた。
「どわあ！今度は殺傷武器だった！孔明のやつ！こしゃくなマネを！」
こうしている間に孔明達は工場内に逃げ込んでしまった。ダイチ達は必死にその後を追う。
「聞いてないよ。あの2クラブを仲間に引き入れるなんて。そうするつもりなら一言相談してくれよ」
孔明達を追いながら、一小のクラブの『焔』のリーダーが声を細めてガチャギリに抗議した。

「わりいわりい。お前らに言ったら、危険だって止められるかもしれんと思ったんだ。」
ガチャギリが悪びれながら返す。
「うまくいったから良かったものの。でもあの2クラブに払う報酬は用意してないよ。僕らは財政難で、君たちを引き入れるだけでも精一杯だったんだから」
「ああ、金の問題は心配するな。ちゃんと手は考えてある。それより、孔明を倒すのが先決だ。」
すでにその時工場の中からこちらを銃撃する『蔵地ユナイテッド』と、それを外から攻撃しようとするダイチ指揮する『北部同盟』で激しい銃撃戦が展開されていた。孔明は工場に籠城して、徹底抗戦する構えだ。
「ちっ。ヤツはしっかりとオレたちのトラップのない場所に陣取りやがったか」
ガチャギリは見取り図を出しながら舌打ちをする。
「どうにか、この入り口以外からこの建物に入るルートはないのか？」
ダイチが見取り図をのぞきこんで訊ねた。
「隣の建物の2階から伝って来ることはできるが、そこも孔明はしっかり押さえているだろう。どうにかヤツに気付かれずにそこに回り込む方法はないか……いや、1つだけいい方法がある」
「どんな方法だ？」
ガチャギリはそこで『北部同盟』の全員を集めて作戦を説明した。

「戦況はどうだ？」
そこからしばらくして、孔明が最前線で敵の侵入を防いでいる直属部隊に訊ねた。
「見ての通り、入り口はあれだけの敵が固めています。このままじゃ身動きできません」
孔明も覗き込んで確認する。確かに入り口には敵のほぼ全員の数に

匹敵するほどの影が、こちらを狙っているのが見えた。このままだと打つ手がないと孔明は思い始める。
「それでさっきからおかしいんですが、あの敵達、こちらの銃撃をよけようとしないんです。いくらこっちが攻撃してもあの場所をどこうとしない。普通なら僕たちの銃撃で蜂の巣になっているはずなんですけど」
「なに？ためしに撃ってみろ」
孔明に言われるがまま、直属部隊は入り口を塞いでいる敵を銃撃した。ところが敵はよける素振りも見せない。
「どういうことだ？」
孔明がこの敵の奇怪な行動に考え込む。そしてふと警戒を怠っていた中2階の回廊に目をやると、そこで信じられないものが目に飛び込んできた。
「よう、孔明」
声をかけたのはガチャギリだった。そしてその脇には1階に向けて銃を構えている『北部同盟』のメンバーがずらりと並んでいる。
「な、なにっ！？どういうことだ？お前らはつい今まで、あの入り口にいたんじゃ？」
「孔明さん！入り口の敵兵が消えてます！」
今度は入り口を見やった兵士からの報告が入る。さしもの孔明の頭も混乱してきた。
「一体、何が起こったんだ？まさか入り口にいたのは、お前らの伏兵？」
「バッカ、ちげーよ。伏兵を呼ぶ時間なんてなかっただろ。言ってみれば瞬間移動だよ」
「瞬間移動？」
1階の『蔵地ユナイテッド』の面々が動揺している。敵はそんな魔術のような技が使えるのかと。
「なら、マジックのヒント。メガネが見せる映像は、その対象物に一番近いメガネの情報が反映される」

ガチャギリが種明かしをするように言う。
「何のことだ？意味がわからん」
孔明がそう首を傾げた時に、ガチャギリは孔明との戦いの勝利を確信した。
「お前ごときには一生わからんだろうな。さあ、孔明をやっちまえ！」
ガチャギリが手をあげた瞬間、一斉に中2階からの掃射が始まる。
『蔵地ユナイテッド』は反撃のしようがなく、ただ逃げ回るだけだった。
「おい！慌てるな！入り口の敵はもういないんだ！そこから脱出しろ！」
孔明が混乱する一同に指示を出す。その時だった。
「ダメです孔明さん！入り口には火の手があがっていて、とても突破できそうにありません！」
「なんだと！？」
その報告に孔明は絶望するしかなかった。もうここで果てることしかできないようだった。
「ハッハッハ！見たか孔明！オレたちを裏切って始末しようとしたことを後悔するんだな！オレたちはお前なんかにいいように利用されるほど、マヌケじゃねえんだよ！」
そう言って楽しそうに孔明達を銃撃しているのは『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』だった。元々は敵対関係にあった南のクラブ同士、積年のうらみが彼らを狂気に駆り立てる。
「じゃあ、君らはここで楽しんでいってくれよ。オレたちはここら辺で失礼するわ」
そこに中2階の隣の建物との入り口に立っていたガチャギリが、ドアに手をかけながら言った。『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』が気付いてみれば、さっきまで隣ににいたはずの他のクラブの姿が見えない。
「おい、どういうことだ？」

「おっと、忘れてた。お前らへの報酬だ。あばよ」
声をかけた『ＧＴＣクラブ』のリーダーを無視して、ガチャギリはドアを閉めた。そしてガチャギリが立っていた場所に転がっていたのは、３つの電脳手榴弾。その次の瞬間に中２階も炎に包まれる。そしてガチャギリが閉めていったドアは、無情にも鍵がかけられていた。
「くそう！！はかったな『黒客』！！」

「いやいや、ご苦労だったな。みんな、よく指示通り動いてくれたぜ。」
戦いが終わり、元の『北部同盟』、『黒客』、『焔』、『Ｋ３』は日渡公園に集まっていた。そうしてダイチがねぎらいの言葉をかけていた。
「まさか、僕らがあの『サウスユナイテッド』を倒してしまうなんて。もちろん、君たちがいなければそんなことは叶わなかった。本当にありがとう。報酬は弾むよ」
結局は孔明が伏兵として呼んでいた直属部隊も含めて、この戦いで『サウスユナイテッド』として参加したクラブは壊滅的ダメージを負った。ダイチやナメッチも、今回はガチャギリの作戦がすべてだったと思った。
「ああ。どうもな。また困った時は呼んでくれよ」
殊勲のガチャギリがメタバグがたんまり入った袋を『焔』のリーダーから受け取る。当初の成功報酬以上のメタバグがそこには詰められていた。
「『ウイングス』と『ＧＴＣクラブ』を裏切らせて孔明を追いつめ、そしてその２クラブも始末してしまうなんて。僕らには到底思いつかなかった作戦だよ。これで僕たちのテリトリーに干渉してくることもないだろうね」
「まあ、その鉱脈もたまにはオレたちにも使わせてくれよ。また変なのが来たらぶっつぶしてやるから」

ダイチが言って、そのまま『北部同盟』は解散となった。たった3日間だったが、スリルに満ちた有意義なものだったと誰もが思った。

「しかし、あそこであんな作戦を思いつくとはな」
帰り道、ダイチは今日の戦いを思い返すように言った。
「何がだ？」
「ほれ、孔明が工場に立てこもった時。オレたちもどうしようもなく長期戦を覚悟した。そこであの作戦だ。オレたちを工場の入り口に並ばせ、入り口脇に控えていたナメッチのメガネのデータの更新を停止にする。ついで『北部同盟』全員のメガネのデータの更新も停止にし、2階へとのぼる。するとナメッチのメガネはオレたちがあたかも入り口に立っていると誤認して、そしてナメッチのメガネがサーバーに送った情報がヤツらのメガネにも反映され、ヤツらはいつまでもオレたちが入り口でたむろしていると勘違いする。誰がかつてこんな作戦を思いついた？」
ダイチが少し興奮気味に話した。百戦錬磨の孔明でさえ見破れなかったこのトラップは、おそらくガチャギリオリジナルのアイデアだった。
「まあ、やっていることは基礎の応用だ。それをたまたま思いついただけのことだ」
「その発想力がすごいんだよ。今日オレは確信した。このメンバーなら、必ず大黒の覇権も取れるってな」
ダイチの言葉にガチャギリが「へっ」と照れ隠しのように笑う。
夢へとひた走る『黒客』。順調に見えたその道のりの中で、やがて巨大な壁にぶち当たることになろうとはこの時は誰も思っていなかった。大黒は、新参者に甘くはなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　６　四面楚歌！『黒客』包囲網！！（前書き）

今回の話は、『電脳コイル　春』の第９話と第１０話ともリンクしていきます。合わせてご参照ください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　６　四面楚歌！『黒客』包囲網！！

２０２６年　４月

大黒市の電脳戦争界はある勢力によってコントロールされている。戦っている当の本人達は気付いていないが、しかし確実にその勢力は大黒市にある電脳クラブの戦力を均衡させ、永遠の戦争状態を作り出そうとしていた。子ども達の夢を食い、それを利益にかえているその勢力の会合は、人知れず「大黒市賢人会議」と呼ばれるようになっていた。今日もあるサイトの掲示板にスレッドを立てて、今後の活動方針について話合いがもたれている。

「満」今日の議題。大黒市立第三小学校、『大黒市黒客クラブ』について

「メ」１ヶ月前に孔明率いる南部の同盟をフルボッコにしたクラブのこと？

「W」あれ以来飛ぶ鳥を落とす勢いらしいな

「満」彗星のごとく現れたその英雄は、特に大黒市北部のクラブからは絶大な人気を得ている

「メ」まあ、例の南北戦争で北側に勝利をもたらしたのだから仕方ないよね

「W」なるほどな。そろそろ叩いておかないといけない時期か

「満」ああ。今までと同じだ。台頭して来たクラブは我々が潰す。力がまだないうちにな

「W」賛成だ。いつもの手を使うんだろ？

「満」そうだな。とりあえず南のクラブのいくつかにけしかけてみるか

「メ」いやむしろさ、ここで『黒客』をつぶさずに、北と南でもっと大きな戦争に持ち込ませるっていうのはどう？

「W」確かに。ここで北の結束を固めさせて、南との全面衝突を仕

向けるというのか
「満」待て。目先の利益にとらわれるな。そうしてしまうと大黒の電脳クラブは勝利した側しか残らないんだぞ
「メ」わかってるよ。でも状況をよく考えてもみろよ。メタバグは確実に枯渇してきているんだ。我々の支配にも限界が見え始めている
「W」それに知っていると思うが、市の空間管理室が古い空間を削除するためにサーチマトンを導入するみたいだぞ。サーチマトンとは言いながら、そいつにはメタバグなどの違法物質を削除する能力があるらしい
「満」その話は聞いている。はた迷惑な話だ。管理室の無能のしわ寄せが我々に及んでくるとはな
「メ」まあ、管理室の無能のおかげで今まで甘い汁吸ってきたんだからいいんでね？
「W」話を戻そう。こうなった以上、メタバグを使った商売にはそろそろ限界が見え始めている。ここは最後の戦争を起こすことも視野に入れた方がいいんじゃないか？
「満」わかった。とりあえず南の数クラブに黒客を攻めさせてみる。それで一旦様子を見よう。『黒客』の実力も気になる
「メ」「W」了解

大黒市南北戦争から1ヶ月が経ち、ダイチ達は6年に進級した。いよいよ最高学年となり、さらに先の戦争で見事な勝利を収めた『黒客』はとにかく勢いに乗っていた。その後も積極的に市内の戦争に介入してはことごとく味方した勢力を勝利に導き、報酬を稼ぐとともに名声をも手にしていた。ところが『黒客』はその周りの環境の変化に謙虚でいられなかった。『黒客』の学校での態度は傲慢そのもので、気に入らない人間は授業中だろうがなんだろうが攻撃対象にする。放課後には新技の開発と称して学校の空間を破壊してまわり、ついには学校のサーバーをダウンさせ大目玉をくらった。それらの暴走を止めることができなかったフミエは、相当歯がゆい思

いをしていた。今回の事件はフミエがダイチにつっかかってきたところから始まる。
「ダイチ！あんたいい加減にしなさいよ！」
４月のある朝、ダイチが登校してきて教室に入った瞬間にフミエは吠えた。
「何だよ。朝っぱらからうるせえなあ」
ダイチが少しムッとしたように返す。この日は久々に余裕をもって登校できて気分は良かったのだが、いきなり調子を狂わせられた。
「昨日私の友達が駅の近くを歩いていると、いきなりどこかのクラブに襲われたって言うの！その連中は、第三小の生徒は全員敵だと認識しているって言ったそうよ！」
「ああ？知らねえよ。それオレに怒ることか？だったらそいつらをオレたちの前に連れてこい。仇をとってやるから」
ダイチの返した言葉に、フミエの怒りはさらに増幅された。
「あのねえ！アンタ達が好き勝手やってくれてるおかげで、関係のないこっちが迷惑してるの！わかる？アンタ達がよそで恨みを買ったら、私達にその矛先が向けられるのよ！」
「んなこと言われても、オレたちは自分の夢のために戦ってるんだ。それとも夢を追いかけるなとでも言いたいのか？」
「だいたい他人に迷惑をかけてまで追いかけるのを夢なんて言わないわ。みんなの応援を受けて、それに応えるのが夢なんじゃないの？アンタのやっていることはただの自己満足よ。そのしょうもない自己満足に走りたいのなら、せめてウチの生徒に危害が及ばないようにしたら？アンタが夢を語るなんて筋が通ってないから」
フミエの言葉はダイチにとっては痛いところを突いていた。人一倍責任感の強いダイチにしてみたら、自分の自己満足のせいで他人に危害が及ぶのは耐えられないことだった。しかし実際電脳クラブとして頂点を目指すなら、周辺クラブからのこのような仕打ちは避けては通れないのも事実である。しかしフミエの言うように第三小の全生徒を守ることなど、たった４人の『黒客』にしてみたら無理難

題であった。
「ウチの生徒に危害が及ばないようにするなんて、実際問題不可能だろ。だいたいオレたちにしてみたら、学校を背負わないといけないことが足かせなんだよ。第三小の『黒客』じゃなくて、第三小から独立した存在になれたらどんなに楽か」
「バカじゃないの？第三小の生徒である時点で、そこから逃げることはできないわ。それを背負う覚悟がないなら、さっさと『黒客』の看板を下ろして、周りのクラブに謝って来なさいよ」
フミエの言葉にダイチは理不尽だと思った。義務教育である小学校をやめることはできないし、だったら全生徒を守ってみなさいと言われるのはメチャクチャだ。だが、ダイチはそこで１つの案が浮かんだ。
「よし、じゃあこうしよう」
「なに？」
いぶかしげにフミエがダイチを見る。
「オレたちは学校では一切メガネを使わないし、授業以外で電脳に関わらない。オレたちは第三小の『黒客』であることを放棄する」
「ちょっと待って。そんなことをして何の意味があるの？そりゃまあこっちとしては願ったり叶ったりなんだけど。だからってそれで周りのクラブが第三小の生徒への攻撃をやめるとは限らないでしょ」
フミエが鼻で笑って返す。やっぱりバカだと思った。
「それについてはネットか何かで呼びかけてやるよ。第三小と『黒客』は何の関係もない。第三小の生徒を攻撃することで『黒客』を追いつめることはできないってな」
「それもどれほどの効果があるんだか。だいたいアンタ、部活はどうするの？一応電脳生物部なんだから、メガネの使用に関わってくるわ。部活は『黒客』に貴重な時間と場所を提供してきたわけだしね」
フミエの言葉にダイチはしばらく考え込んだ。そして顔を上げるとこともなげにこう言い放った。

「わかった。電脳生物部はやめる。部長の肩書きもくれてやらあ」
「ええっ！？」
その言葉に悲しそうな声で驚いたのは、一連の会話を聞いていたデンパだった。

「それで、生物部をやめるって話になったのか」
放課後、ダイチから今朝のフミエとの会話を聞いたガチャギリが言った。
「ここは妥協案として仕方ねえところだと思うぜ。正直オレたちも学校で好き勝手やってたからな。学校での活動をやめれば、幾分生徒の不平はおさまると思う」
ダイチとて学校の中で白い目で見られていることは感じ始めていた。自分たちに心酔している生徒も一方でいたから、その辺はあまり気にしていなかったが。
「お前がそう言うのなら別にかまわねえぜ。まあ生物部やめたところで何が変わるのかってところだろうがな。学校でメガネを使わないってことにするんなら、オレたちの活動に出資してくれている準会員にも知らせておけよ」
ガチャギリもダイチの意見に特に異論はなかった。生物部の活動も学校のサーバーをダウンさせて以来、顧問であるマイコ先生の監視の目も厳しくなってきており、『黒客』の活動にも支障をきたすようになってきていたのだ。
「ああ、わかってる。それよりも問題はオレたちを敵視しているクラブが最近めっきり増えたってことだな」
「フミエの話にもあったな。とりあえずそういうクラブは見つけ次第排除しよう」
ガチャギリがダイチに返したところで、『黒客』のホームページを確認していたナメッチが何かに気付いた。
「オヤビン！これ見てほしいッス！」
「なんだ？」

ナメッチが見つけた『黒客』へのコンタクトのコーナーにあった書き込みは、かいつまんで言えば南のいくつかのクラブが連合して『黒客』に戦争を仕掛けるという宣戦布告だった。
「南の５クラブの連合か。数は多いが、先月の戦いで『ウイングス』や『ＧＴＣクラブ』は倒したから幾分戦力は落ちるな。孔明も参加していないだろうし」
ガチャギリがその書き込みを見ながら分析する。
「でもかなりの数だぞ。今度は質より量で勝負してくるつもりだ。このままじゃまずい」
ダイチの方は危機感を持っていた。ここは自分たちも連合しないといけないと思った。
「じゃあこの間の第一小の『焔』と、観音小の『Ｋ３』に増援を頼むか。しかしなんでこの数でオレたちを？オレたちのテリトリーには、もうめぼしい鉱脈なんてない。メタバグ狙いではないのは明らかだな」
「確かに。オレたちの台頭を阻もうとする勢力があるってことか？」
今回宣戦布告をしてきたクラブはどれもこれまで『黒客』が相対したことのないクラブで、言ってみればこれが何らかの復讐である可能性もなかった。
「かもな。ははーん。どうやらあの噂は本当だったようだぜ」
ガチャギリが何かを思い出すようにつぶやく。
「あの噂ってなんなんスか？」
「大黒市の電脳戦争界にまつわる噂だ。大黒市で一度でも天下を取ったのは、オレの知る限りでは例の伝説の宝剣を駆使したヤマトぐらいだ。だがその前にも後にも、大黒市のトップに立ったクラブなんてない。なぜだと思う？」
ガチャギリがダイチやナメッチの方を見て訊ねる。
「さあ。実力が抜きん出たクラブがなかったからじゃね？」
「違う。実力のあるクラブはいくつか存在した。前に対戦した『ウイングス』や『プログレス』なんかもその部類に入る。でもな、そ

れらのクラブは力をつけてきたところでいずれも叩かれてるんだ。
今回のオレたちみたく、大人数で攻撃されてな」
大黒電脳界の歴史についてはガチャギリは詳しい。それより過去にもそんなクラブがあったと聞いていた。
「やっぱ、なんかウラに何かありそうなだな。今度はオレたちがその標的となったわけか。『ウイングス』も『プログレス』も、そのおかげで丸くなったってわけか」
「オヤビ～ン。それじゃあ今回オレッチらに勝ち目はないじゃないッスか。ここは降伏した方が身のためッスよ」
痛い目に遭いたくないナメッチがダイチに言った。この中でナメッチだけが、これまで好き勝手やり過ぎたことを後悔していた。
「バカ言うな。なおさら退けなくなったぞ。大黒には覇者が現れることは許されないっていう歴史を塗り替えるのはオレたちだ。そのチャンスが巡って来たんだ。この宣戦布告をしてきた身の程知らずのバカどもを叩いて、ついでにそのバックにある勢力を吐かせる。そしていずれはその勢力も駆逐する」
「威勢がいいなダイチ。確かに大黒での頂点を極めようとするなら、この戦いは登竜門となるな。それならもう勝つしかねえ。でも現実的な話をしよう。オレたち『黒客』の戦闘員は3人しかいない。これから激しい戦闘が予想されるし、もう少し駒が欲しい」
ガチャギリが現実的な問題をあげた。1クラブ3人というのは、誰一人メガネが壊れることが許されない厳しい人数だ。ここで補充要員を育てておけば、後々の戦いも楽になるというところだった。
「確かにそうだな。第三小であと戦力になりそうなのは、天文部の大河内、電脳歴史部の作見、コイル探偵局になるがハラケン、そして、フミエか」
ダイチが考え込んで候補となる人員を思い浮かべた。
「ハラケンとフミエはナシとして、最初の2人は誘うだけ誘うか。いや、もういっそのこと『黒客』直属部隊を組織したらいいんじゃないか？」

「『黒客』直属部隊？」
ダイチがガチャギリの方を見る。
「ああ。孔明が自分の直属部隊を作っていただろ。それと同じものを作るんだ。幸い、オレたちには先の戦争で稼いだメタバグがたんまり残っている。軍資金に困ることはない。今回の戦いに間に合うかはわからんが、また先に大人数で攻められる可能性もあるからな。その時にだけ出撃させる。メンバーは、『黒客』の活動に好意を持ってくれている準会員で組織する」
「……いいなそれ。よし、早速呼びかけよう。じゃあナメッチ。お前を『黒客』直属部隊指揮官に任命する」
「オレッちがッスか？だって、『黒客』のリーダーはダイチじゃ」
ナメッチがその大役に驚いて言った。
「ダイチは戦闘員として先頭に立って戦った方がいい。オレはダイチのサポートに参謀を務めないといけないからな。だからお前しかこれはできない」
ダイチもガチャギリも戦闘となれば自分たちのことしか頭になくなる。その中で部隊の指揮などはできない。
「お前を直属部隊の隊長、さっき話に出た、大河内と作見を副隊長にしよう。オレはその部隊と『黒客』をまとめるビッグボスだ。これでいいな。じゃあ早速明日からナメッチは人を集めて部隊の訓練に取りかかれ」
「ちょっと、２人は訓練には参加しないんスか？」
ナメッチが慌てて訊ねた。いきなりの大役に加えて、しかもダイチとガチャギリはそれを放任して別のことをするらしい。
「オレたちは『焔』と『Ｋ３』と作戦を練って、宣戦布告をしてきたバカクラブを一掃しにいく」
「たったそれだけで戦いを挑むんスか？」
「ああ。相手は数だけだ。それならそれなりの戦い方もある。お前は一刻も早く部隊を１人前に育ててくれればいい」
ガチャギリが自信満々に言うので、ナメッチはそれ以上何も言わな

かった。

翌日からナメッチは人を集め、放課後は近くの公園で部隊の指導に入った。メンバーに入ってくれたのは１０人で、メガネのスキルはまだまだだったが、ナメッチはこれまで積んできた『黒客』での厳しい特訓を思い出し、それを部隊に叩き込んだ。

一方でダイチとガチャギリは『焔』『Ｋ３』と組んで、宣戦布告をしてきた南の５クラブ連合を一掃した。今の２人にかかれば、それだけの大人数が相手でもその中に実力者がいなければ排除するのは容易いことだった。これで第三小には平穏が訪れたかと思われたが、本当の戦いはここから始まるのだった。

『黒客』が南部５クラブの連合を破った後、再び「大黒市賢人会議」では『黒客』の話題がのぼっていた。

「Ｗ」今日の議題。南部５クラブ連合が、『黒客』とその同盟にフルボッコにされた件について

「メ」計算違いにもほどがあるだろ。様子見だったとはいえ、あの人数差をもろともしないなんて

「満」答えは出たな。『黒客』を中心に北のクラブに結束されると、南のクラブには勝ち目がない。『黒客』は第二小のならず者集団、『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』とも仲がいいみたいだし、この２クラブに組まれると厄介だ

「Ｗ」そうなると『黒客』を本気でつぶしに行くしかなさそうだな。これまで北と南では、南の方が総合的に見て実力が上回っていた。その勢力図を『黒客』は塗り替えてしまった

「メ」大した連中だよ。北のクラブのテリトリーは、以前なら南のクラブによく侵攻されていたものだ。しかし『黒客』の存在が今は北にとっての砦となっている。『黒客』がつぶれれば、北は瓦解する

「満」そうなると南のクラブによる北のテリトリー侵攻は加速する。

北クラブのテリトリーを巡って、南のクラブ同士でも争いが起きるかもしれない
「W」『黒客』の大黒制覇よりは良いシナリオだな。メタバグがなくなってしまう前に一波乱起こすとしたらそこか
「メ」しかし聞いた話によると、『黒客』は自分たちの直属の部隊を組織しているそうじゃないか。その『黒客』を倒せるのか？
「満」この前送ったクラブは、どれも弱小だった。もっと実力のあるクラブを派遣すれば、問題なく勝てる
「W」実力のあるクラブと言っても、先月の南北戦で『ウイングス』も『プログレス』も『ＧＴＣクラブ』も壊滅してしまったからな。あの孔明だってあれ以来表舞台から姿を消した。南にはあまり良い人材が残っていないようだが
「満」先月に壊滅させられたそのクラブに力を与えればいいだけの話だ。『黒客』への復讐心で、その士気も高まる
「メ」なるほど。ここで大黒屋の登場か。それらのクラブに格安で武器を売って、この情勢を一気に変えるのか
「W」仕方のないところだな。『黒客』が勝ち続けると、大黒市から電脳戦争は減って行く。我々が打つべき手段は、もうこれしかないか
「満」ああ。おそらく大黒屋としての最後の取引になるだろう。この戦いで『黒客』を叩きつぶして、大黒市に最後の戦争状態を作り出す
「W」それで異存はない。でも勝利を確実にするために、『黒客』と北側のクラブとを切り離しておきたい。今回も『黒客』と同盟した『焔』や『Ｋ３』は、『黒客』のおかげでかなりあなどれない戦力になってきている
「メ」その通りだ。『黒客』を包囲する形をとらないと、南からの攻撃だけではヤツらは動じない
「満」『黒客包囲網』か。果たしてできるのか？北側のクラブにとってみれば、『黒客』は最後の砦。『黒客』の敗北は、自分たちの

生存の危機と直結するんだぞ
「メ」その辺はうまく言いくるめたらいいんだよ
「W」そうだ。そのために電脳クラブ界において顔の広い、満天堂の弟を今回の総大将に据えるのはどうだ？
「満」シンヤを使うのか？シンヤは情報屋だ。戦争に直接介入するのはまずい
「メ」戦闘指揮はとらなくていいんだ。うまいこと北のクラブとコンタクトをとって、『黒客』から離反させればいい
「W」今回の戦いの趨勢を決める重要な役割だ。弟に是非頼んでもらいたい
「満」わかった。弟には言っておく。大黒屋の運営に関してはそっちに任せる。では、我々に勝利を
「メ」「W」我々に勝利を

大人数で攻め込まれたにも関わらず、それをあしらうように一蹴した『黒客』だったが、その勝利に酔ってはいなかった。
「あの南部連合が口ほどにもなかったのが、オレは逆に引っかかっている。これまで潰されてきた『ウイングス』や『プログレス』も、あの程度の攻撃くらいなら軽く耐えられたはずだ。連合のバックにいる勢力は、多分これからさらなる攻撃を仕掛けてくるだろう」
ガチャギリはさきの戦いを不安に思っていた。
「そうだな。そもそも、連合のバックにある勢力ってのは何なんだ？それを倒さない限り、この攻撃はこれからも続くってことだろ。防衛戦は金にならないんだ。ずっと勝ち続けることなんてできない」
この間の戦いで攻めて来た南部連合のクラブは、特に第三小のテリトリーに対する執着心も、『黒客』への私怨もない様子だった。なぜ彼らが攻めてきたのか、それは誰かに煽られたとしか考えられなかった。それを煽った勢力をつぶさない限り、大黒市に無数に電脳クラブが存在している限り、この『黒客』攻めは続くということだった。

「しかし、そのバックにある勢力について何もわからない。情報屋にも当たっているが、該当データなしだ。攻めてくる当の本人達にも、それが誰の意志なのかもわからないようだしな。これは、長い戦いになるぞ」
ガチャギリの言葉に、メンバーはため息をついた。第三小校区内にはめぼしいメタバグの鉱脈もないので、連続で攻められると苦しくなってくる。開き直るなら他校の校区に侵攻して鉱脈を奪い取るという手段も考えられるが、よそのテリトリーが戦場になる分、侵攻戦は防衛戦よりはるかに難しい。その手段を選ぶのは大きな賭けだった。
「見えない敵からの攻撃。それに対して守るしかできないっていうのか……これほどまでにもどかしい思いをするとは。長く大黒市で覇者が現れなかったのもわかる気がするな」
ダイチがいら立ちを隠せない様子でつぶやいた。かつてヤマトが天下を取った時は、爆発性のメタバグが枯渇しているという特殊な状況だった。そのため電脳戦争界の武器の主流は剣となり、いちはやく電脳剣術を大成したヤマトが頂点を極めた。弾丸や炸薬の量が戦争の趨勢を大きく左右する現在の飛び道具全盛の時代では、いくら実力を磨いたとて限界というものがある。大人数で囲まれるとどうしようもないというのが現実だ。だから『黒客』は直属の部隊を組織したわけだが、今度はそれに伴う出費がバカにならなくなってきた。
「攻めるしかないな。攻められてつぶされるのを待つくらいなら、攻めて散った方が男らしい。直属部隊の維持費もある。どこか大きな鉱脈を切り取りにいくか？」
ガチャギリが重苦しい空気を振り払うように、軽いノリで提案した。
「本気で言ってるのか？攻めて失敗したところに、また大人数で攻めてこられるとゲームオーバーだぞ。二次攻撃もあることがわかっていて、今度はどんな実力のあるクラブが来るかもわかんねえのに、それは危険すぎるぞ」

止めたのはダイチだった。普段は攻撃志向のダイチを、ガチャギリが細かい計算でそれを諭すというのが『黒客』のパターンだったが、今回は逆だった。言い換えれば、『黒客』が生き残るには、攻めるしか道がないという判断をガチャギリが計算ではじき出したということになる。

「本気だ。このまま待っていても寿命が延びるだけのことだ。だったら生き残る術を探した方が賢い選択だと思うが？」

「……お前がそう言うのなら、そうなのかもな。わかった。どこを攻めれば一番効率的だ？」

「オヤビン！」

攻めるという決心を固めたダイチを、ナメッチは止めようとした。直属部隊の訓練もまだまだ足りないところで、いきなり侵攻戦は難しいんじゃないかという判断だった。

「大丈夫だ。直属部隊はまだ出撃させない。アイツらはオレたちが攻められた時まで温存する。いつものように『焔』と『Ｋ３』との同盟で事は足りる」

ダイチが自信ありげに言い聞かせる。この戦いでメタバグの鉱脈が確保できれば、直属部隊の装備品の質も上がり、近いうちに実戦に投入できるだろうという判断だった。

「情報屋から仕入れた情報によると、今一番めぼしい鉱脈は、大黒駅向こうにある変電所の南、宝生寺公園にあるらしい」

「宝生寺公園……南のクラブの補給基地とも呼べる場所だな。危険だが、行くしかねえか」

その場所は鹿屋野神社のように小高い丘になっていて、いつ行ってもメタバグを拾いに来るクラブを見かけるような場所だと聞いていた。そこに堂々と乗り込んでメタバグを強奪してくるのは確かに危険だが、状況が状況だけに行くしかないというところだった。

「よし、『焔』と『Ｋ３』には声をかけておく。近日中に行くぞ。ナメッチは引き続き部隊の訓練にあたれ」

「気をつけるんスよ」

ナメッチは心配げに返した。

その日、突如『大黒屋』が出現した。『大黒屋』は先月の南北戦で手痛いダメージを被った、『ウイングス』、『プログレス』、『GTCクラブ』に格安で武器を売りつけ、さらには次のようなメールを送りつけた。

「『黒客』は近日中に宝生寺公園を急襲する。貴公らにはその『黒客』を迎え撃ってもらいたい。我は貴公らの味方として、これから情報を送り続ける。心配するに及ばない。我は貴公らと同じく、『黒客』の存在を快く思っていない者だ。貴公らの手で、是非この機会に『黒客』を排除してもらいたい。武器の価格については、適宜相談に応じる。それでは健闘を祈る。Mr.ミッドナイト」

そして同人物は、『焔』と『K3』に対して次のようなメールを送った。

「貴公らが同盟を組んでいる『黒客』は、大黒市制覇の野望を抱いている。彼らは貴公らをうまく言いくるめて、まずは貴公らの力を利用し南部のクラブを排除しようと考えている。しかし、それが終われば次は貴公らの番となる。証拠に『黒客』は最近、自分たちの直属の部隊を編成するようになった。これは貴公らを排除しようとする意思表示に他ならない。このままでは貴公らに未来はない。そこで今回、貴公らには『黒客』と同盟を組むフリをして彼らを裏切ってもらいたい。『黒客』は南の鉱脈を侵攻しようとしているな？それを迎え撃つ準備も、南のクラブは周到にしている。そこに貴公らの力が加われば、『黒客』も恐るるに足らずだ。安心しろ。南のクラブは貴公らには敵対心は抱いていない。むしろ、南を救ってくれた英雄として、貴公らを扱ってくれるだろう。いいか？今大黒市を戦争状態に陥れようとしているのは『黒客』だ。『黒客』さえ滅びれば、大黒市は平穏な日々を取り戻す。南を救った君らの安全も保障される。だから力を貸してくれ。いい返事を待っている。Mr.

ミッドナイト」

こうして、それぞれのクラブはその日を迎えた。

「Ｍｒ．ミッドナイト……何者かはわからんが、オレたちに力をくれたところを見ると、悪いヤツではなさそうだな」

宝生寺公園で『黒客』を迎え撃つ、『ウイングス』、『プログレス』、『ＧＴＣクラブ』のリーダー達が今回の戦いについて相談しあっていた。

「ミッドナイト……日本語では深夜か。シンヤ……」

「目的はわからんが、『黒客』を排除しようとしているのは確かなようだ。ヤツを信用しよう。先月の屈辱、倍にして返してやる」

「Ｍｒ．ミッドナイトは、『黒客』と一緒にやって来る『焔』と『Ｋ３』も味方に引き入れたと言っていて、そいつらとも連絡はついた。ウソではないことは確かだ。これで容赦なく、『黒客』を始末できる」

３クラブは、『黒客』を叩きつぶす瞬間が来るのを心待ちにしていた。

「静かだな。やけに静かだ」

ダイチは宝生寺公園の小高い丘を見上げながら言った。本当にいつもメタバグ拾いの子どもが溢れているとは思えない、ある意味で殺伐とした異様な雰囲気がその丘を包んでいるように見えた。

「まさか、待ち伏せされているんじゃなかろうな。と言っても、このまま引きかえすわけにもいかない。慎重に進むぞ」

ガチャギリもなんとなくイヤな予感を感じたが、しっかりと準備をしてきたので戦闘になっても大丈夫だと言い聞かせ、『焔』『Ｋ３』らとともに階段をのぼりはじめた。ここをのぼりきると少し開けた場所にでて、そこにメタバグの鉱脈があるという話だった。

そして予感は当たった。ダイチとガチャギリが階段をのぼりきっ

て、その場所を見回していた時だった。背後からミサイルが飛んで来たのだ。２人は軽い身のこなしでそれを避けるように広場の真ん中まで移動した。そしてその瞬間、それが罠であると気がついた。
「待っていたぞ。『黒客』」
周囲の茂みから姿を現したのは、南の３クラブだった。
「お前らは、『ウイングス』に『プログレス』、それに『ＧＴＣクラブ』じゃねえか！？なんでこんな所に！先月お前らを壊滅させてから、表舞台から姿を消していたはずだろう」
「おかげさんでな。しかし、オレたちは復活したんだ。お前らを倒すためだけに」
「なんだと！じゃあ、お前らもオレたちを潰そうとする勢力の一味ってことか！？」
ダイチはヤバいと思った。この実力派のクラブさえもその勢力に取り込まれたとなると、この先には厳しい戦いが待っている。なにより今この状態も絶対絶命と形容するにふさわしいほど、絵に描いたようなピンチだった。
「その勢力についてはオレたちもよく知らない。だが、その勢力とは目的を一にしている。お前らに勝ち目はない」
「くそう！おい！『焔』と『Ｋ３』！こいつらを始末するぞ！」
ダイチは姿の見えなかったその２クラブに声をかけた。ところがその２クラブは、ダイチ達に銃口を向けながら階段から現れた。
「な！？」
「残念だったな。アイツらはもはやお前らの味方ではない」
『プログレス』リーダーに言われ、ダイチは彼らを睨みつけた。
「お前ら！それはないだろう。南北戦の時も、オレたちはお前らの頼みを聞いてコイツらを潰しただけだ！なのにお前らがコイツらの味方をするなんて、正気か！？」
「そっちこそ、オレたちを利用して後々始末するつもりだったんだろ。直属部隊まで編成しやがって。それにことあるごとにオレたちを狩り出そうとするアンタらに嫌気がさし始めていたんだ……ここ

でくたばれ」
「やっちまえ！」
ダイチとガチャギリに向けた一斉掃射が開始された。相手は十数人で、弾丸をよけるなんて無理な話だった。ダイチとガチャギリはとっさに鉄壁を自分たちを囲うように出したものの、それもこの弾丸の中では気休めに過ぎなかった。あっと言う間に耐久できなくなった鉄壁は虚しく霧散し、ダイチとガチャギリは蜂の巣となる。お年玉2年分の損害どころではない、メガネのデータがすべて吹き飛んでしまうかのようなオーバーキルが続く。ところが、サクセスストーリーの終焉を痛感するダイチの頭の中には、まだ、一縷の望みが残っていた。
「ナメえええええッチ！！」
そこまで聞こえるはずもないが、その名前を、『黒客』最後の希望を、空に投げかけることくらいしか今のダイチにはできなかった。

「ん？」
その頃、直属部隊の訓練に当たっていたナメッチは誰かに呼びかけられたかのような錯覚を覚えた。
「隊長！どうかしたんですか？」
隊員の1人が上の空のナメッチに問いかける。
「いや、なんでもないッス。訓練を続けるっスよ」
「アイアイサー！！」
なんでもないはずがない。そんな悪い予感が、この時ナメッチの頭の中を支配していた。

よく晴れ渡った日曜日の午後。メタバグ狩りに出かけたダイチ達の帰りを待ちつつ、ナメッチは直属部隊をすぐにでも戦闘に出せるくらいに仕上げないといけないと思い、訓練の指導に邁進していた。その時ナメッチのメガネ電話が着信する。誰だろうと思いナメッチはウインドウを見る。

「公衆電話？今時？」
ナメッチはその表示をいぶかしげに見た。このご時世、公衆電話など探す方が苦労する。
誰だかわからなくて気味が悪いが、しかし出ないわけにはいかない。
「ちょっと待ってて」
ナメッチは訓練を一時中断して電話を取ることにした。
「もしもし？誰っスか？」
「……ナメ……ッチ。オレ……だ」
かすかに聞こえて来る声は明らかに力がない。しかしずっと一緒に過ごしてきた仲であるナメッチにはそれが誰の声なのかはっきりとわかった。
「も、もしかしてオヤビン！？どうしたんスか！？なんで公衆電話から！？」
「ううっ。メガネが、メガネがやられた」
「ええっ！？それは本当ッスか？」
ナメッチは信じられないという様子で返す。
「死は……まだか？」
「フへっ！？」
次に聞こえてきたのはガチャギリの声だった。
「バカ言うな！まだかろうじてオレたちのメガネは生きてる！死に急ぐな！」
ダイチがガチャギリに言い聞かせているようだった。
「オヤビン！誰にやられたんスか！？」
ナメッチは落ち着こうとつとめた。『黒客』のトップ2がやられたということは、現在『黒客』の指揮権を持つのは自分である。直属部隊の前で慌てる素振りは見せられなかったが、やはり生来のものなのか、こんな状況で平静でいられることはできなかった。
「『ウイングス』『プログレス』『ＧＴＣクラブ』。そして、『焔』『Ｋ３』」
「ちょっと待ってほしいッス！なんでその南の強豪クラブが復活し

てんスか！？それに『焔』と『Ｋ３』は仲間じゃなかったんスか！？」
「アイツらには裏切られた。南の強豪３クラブも、先月の南北戦でオレたちがフルボッコにしたのを恨みに思い、オレたちを倒すためだけに復活した」
「そんな……」
ナメッチは言葉を失った。いくらなんでも敵が多すぎる。
「ヤツらたった今、『黒客』の残る構成員であるお前と、オレたちが組織した直属部隊も消すためにそっちに向かった」
「い、今っスか！？」
時間が無さ過ぎると、ナメッチは下唇を噛む。直属部隊はまだ実戦にも出したことがないし、実戦に通用するレベルに仕上がっているかもわからない。それに人数でも負けている。
「気をつけろナメッチ。ヤツら、装備品は死ぬほど充実している。逃げ回るとか考えても仕方ねえ。アイツらのメガネをつぶすしかない」
電話口に出たガチャギリがナメッチに警告する。
「ムリっすよそんなの！！部隊の装備品は充実しているとは言えないし、人数でも実力でも負けてるんスよ！しかも２人がいなくてどう戦えって言うんスか！？」
「よく聞けナメッチ。今までの戦いを思い出すんだ。オレたちと一緒に戦って来て、戦い方は体で覚えたはずだ。敵は所詮寄せ集め。オレたちは敵の間合いに入ってしまってやられたが、自分たちの間合いに入れば勝機はある。そこにいるのは『黒客』の夢について来てくれた頼もしい野郎どもじゃないか。仲間を、そして、自分を信じろナメッチ。オレたち『黒客』の最後の希望の星……」
ダイチの言葉の途中で電話は切れてしまった。
「隊長！何かありましたか？」
ナメッチの様子を見ていた隊員達が訊ねる。隊員達も何か悪いことが起こっているのだろうということは想像がついていた。

「みんな。落ち着いて聞いてほしいッス。たった今、オヤビン達がやられた」
「ビッグボスが！？」
隊員達に動揺が走る。ダイチは直属部隊の中ではビッグボスと呼ばれてリスペクトとされていた。ダイチのようにメガネが使えるようになりたいという理由で入隊した者も多い。
「オヤビン達は今日、メタバグ狩りに行っていたんスが、どうやら罠があったみたいッス。そのオヤビンを倒した連中は、大挙して今からオレッチらを倒しにくるみたいッス」
「なんだって！？」
ここでよし迎え撃とうという機運にはならない。ほとんどが実戦が初めてで、まずメガネを壊される不安の方が大きかった。そしてその様子を悟ったナメッチは意を決した。
「みんな！ここでオレッチらがやられるということは、『黒客』の消滅を意味するッス！第三小の校区はよそのクラブに蹂躙され、メタバグはほとんど持っていかれる。オレッチらは、もうメガネをかけて外を出ることさえ叶わなくなるかもしれないんス！」
「それはイヤだ！そうなるくらいなら、ここでメガネを壊されて散った方がマシだ！」
隊員の誰かが言った。
「その通りッス。そして、オレッチらはオヤビン達の仇を取るためにも、そいつらを許してはおけないッス！」
「そうだ！ビッグボスのためにも、オレたちはそいつらをぶちのめす！」
なんとか士気は上がったようだが、部隊には決定的に欠けているものがあった。
「隊長！迎え撃つのはいいが、今部隊には満足な装備品がない。このままでは死にに行くようなものだ！」
副隊長、大河内がナメッチに言った。
「わかってるッス。しかし今は武器を揃えるお金もないし……仕方

ないッスね。あそこに頼むしかないッス！」
「は？あそこというのは？」
大河内がいぶかしげに訊き返した。
「メガシ屋っスよ！第三小の校区内を荒らされるという点で都合が悪いのはオレたちと同じっス。ちょっとオレ、交渉に行って来るッス！」
「なるほど、お供する！」
ナメッチはついて行こうとする大河内を手で制した。
「1人で大丈夫ッス。それより、部隊が1箇所に固まってるのはまずいッス。大河内と作見は、とりあえず部隊を2手にわけて校区内を巡回してほしいッス。もちろん、敵には見つからないように。その間にオレッチは武器を確保して、迎え撃つポイントを設定するッス。オレっちから連絡があったら、部隊を連れてその場所へ」
「ラジャー！じゃあ、待っている」
「幸運を！」
ナメッチは大河内に言い聞かせて、単身ここも一応敵の総帥のいるメガシ屋に向かった。

メガシ屋にはヒマを持て余していたフミエがいた。メガばあと2人で世間話に花を咲かせている。ナメッチはその2人のいる店先へ駆け込んだ。
「ナメッチ？なにしてんの？」
息を切らしているナメッチにフミエがいぶかしげに訊ねる。
「緊急事態だから、詳しい事情を話している時間はないッス！」
「緊急事態って、またなんかやらかしたんじゃないでしょうね？最近アンタ達、学校でおとなしくしているのは結構なんだけど、その代わり直属部隊なんてのを組織してるらしいじゃない。私も1回見たけど、ダイチなんてあのちっさい体で“ビッグボス”なんて言われてふんぞり返ってるし。イタイったらありゃしない」
フミエの小言を無視して、ナメッチはメガばあの方を見た。

「メガばあ、一生のお願いッス。オレっちらに武器装備を提供してください！今はお金はないッスけど、絶対後日返しますから！」
「おいこら、無視すな。それに何そのお願い？ここを消費者金融か何かと勘違いしてんの？」
深々とメガばあに頭を下げるナメッチに、フミエが問いかけた。
「まったく。どんな願いをするにも、まずは事情を話すのが筋というものじゃろう。言うてみ？」
メガばあも一応ナメッチの話を聞くことにした。仕方ないのでナメッチは手短かにダイチ達がやられてしまったこと、そして今から大軍が押し寄せて来ること、そして装備品が揃っていなくて、揃える資金もないことを説明した。
「アンタねえ、それ自業自得の極みじゃない。虫が良すぎよ」
「フミちゃんの言う通りじゃ。電脳戦争なんぞに手を染めている以上、敗戦も受け入れなければならん。たとえ相手が理不尽な手を使ってきてもな。諦めることじゃな」
フミエもメガばあも素っ気なく返した。ナメッチもそう言われることはわかっていた。しかしダイチ達の期待に応えるためにはここで食い下がるしかなかった。
「メガシ屋だって、第三小のテリトリーがよそのクラブに蹂躙されるのは好ましくないはずッス。このままではこの辺りのメタバグはほとんどよそに持ってかれるんスよ！」
「はあ。お主な、いつもこっちの足元を見てくるようじゃが、そんな理由ではもう協力なんかせんぞ。こっちも前の天叢雲剣の一件以来、フミちゃんには積極的にメタバグを拾ってきてもろうて備蓄はあるんじゃ。お主らが同じ理由でまた泣きついて来るかもしれんと思うての」
「まあ、そういうことね。悔しかったらここで1回フルボッコにされて、一から自分たちで復活するのね」
ナメッチの交渉の手札も今回は通用しなかった。ナメッチはもうなだれるしかなかった。

「ムリっすよ。オレっち達には敵が多過ぎる。たとえ復活しても、また今回みたいに大軍で攻められて終わりッス。もともと大黒で一番になる夢なんて、儚いもんだったんス」
「情けない男ね。アンタらに敵が多いのも自業自得でしょ？そいつらを見返すっていうことも頭に浮かばないわけ？」
「そうじゃないッス。確かにこれまでの戦争で色んな恨みを買ってきたのは認めるッス。でも、何かがおかしいんスよ。なにか、大黒全体がオレっちらの敵みたいな、そんな感じがするんス」
ナメッチは必死に訴えた。大した理由もなく自分たちを襲ってくるクラブもあれば、今まで仲良くしてきた『焔』『Ｋ３』もいきなり『黒客』を裏切った。何か得体の知れない力が働いているのは、ナメッチも感じていることだった。
「……まあ、被害妄想じゃな。それを理由でお主らが解散するというのも、お主らなりの答えなんじゃろう。勝手にすればええ」
メガばあは何か考えている素振りを見せたが、結局は協力することを認めなかった。
「はあ。そうッスか……わかったッス。邪魔したッスね」
ナメッチはそう言うと、とぼとぼとメガシ屋を後にしようとした。
直属部隊にはどう言えばいいか、ダイチにはどのつら下げて会えばいいか、ナメッチの頭の中はそんなことでいっぱいだった。
「待ちなさい。アンタ、もう１回聞くわ。これに懲りてアンタ達は、『黒客』をやめるのね？」
ナメッチの後ろ姿に声をかけたフミエは、いつのまにか店先まで出て来ていた。
「復活するにも、金もメタバグもない。仮に復活できても、すぐに潰される。『黒客』は現実的に続けられないッスよ」
フミエはその言葉を聞いて深いため息をついた。
「はあ。アンタってば本当に情けない男ね。仕方ないわ。今から攻めてくるっていう大軍、私が追っ払ってやるわ」
「へっ！？」

フミエからとびだした思わぬ言葉にナメッチは目を丸くした。
「あれだけ周りに迷惑をかけてくれた『黒客』が、よそのクラブに潰されて解散するなんてあり得ない。『黒客』、そしてダイチに引導を渡すのはワタシってことになってるんだから！」
「フミちゃん？」
その言葉をメガばあも驚きの表情で聞いていた。
「そりゃ、この緊急事態だからフミエが助っ人に来てくれるのはありがたいッスけど、だけど総合力では叶わないんスよ！」
ナメッチがフミエが正気かどうか確認するように訊ねた。
「わかってるわ！だからお願いメガばあ！あれを私に貸して！それにできれば、アイツの言うように武器装備を提供してやって」
「う、うーむ」
メガばあはかなり考え込んでいるようだった。フミエの願いには応えてやりたいという気持ちもあったが、別の理由もあった。
「お主。確認するが、お主らがこれだけ攻められている理由に身に覚えはないということじゃな？今回は1度潰したクラブまでも、充実した武器装備をもって復活したとな？」
「その通りッス。絶対ウラでオレっちらをつけねらう勢力があって、そこが糸を引いていることは間違いないッス！」
「そうか……」
「何に引っかかってるの？」
何かを沈思黙考するメガばあをフミエはいぶかしんだ。
「まあ、似たような話を聞いたことがあってな。もしかするとこのウラには、ワシの商売敵が絡んでおるのかもしれん」
「商売敵？」
フミエとナメッチは顔を見合わせる。その言葉の意味するところは2人にはわからなかった。しかしメガばあは長くメガシ屋を営んでいることもあって、大黒電脳戦争界を覆う黒い闇についても、少なからず存在を掴んでいた。
「仕方ないの。ワシもその勢力にささやかな抵抗をしてみようかい。

わかった。フミちゃんにはあれを、ナメッチ達には武器装備を提供してやるわい。ただし、絶対に代金は返してもらうぞ。その時は多少イロをつけてもらうがな。たとえお主らが負けたとしても、地の果てまで取り立て行くからの」
「ありがとうメガばあ！」
「マジっスか！？か、感謝するッスメガばあ！ところで、フミエの言うあれってなんスか？」
ナメッチが訊ねると、メガばあは店の奥から見たことのあるものを取り出して来た。
「ほい、フミちゃん」
「メ、メガばあそれ、もしかして、天叢雲剣っスか！？」
フミエが満足げに腰にさしたのは、かつてダイチが『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』を斬った天下無双の電脳刀だった。
「そう。あれからメガばあの訓練を受けて、私も使いこなせるようになったの」
「何のためにそんなこと？」
ナメッチの言葉でフミエが不敵に笑った。
「ダイチを斬るために決まってるじゃない」
「ええっ！？」
「でも今回は、私がダイチを斬るのを邪魔する連中を斬る。ダイチにはどうしても復活してもらわないといけないから」
果たしてフミエに加勢してもらって良かったのだろうかとナメッチは不安に思った。しかしこうなった以上フミエを止めることはできなかった。
「ほれナメッチ。これがメガシ屋で一番高い商品、有事対策セットじゃ。値段は3億円じゃからな。絶対に払うんじゃぞ！」
メガばあはサンタクロースが持っているような大きな電脳袋をナメッチに渡した。そして中に入っている装備の目録も渡した。
「よし！じゃあメガばあ！行ってくる！」
「くれぐれも気をつけるんじゃぞ！」

メガばあに見送られてナメッチとフミエは店を飛び出した。
「で、どこで迎え撃つって？」
「まだ決めてないッス！部隊には今、校区内を動き回って相手を捜すのと同時にかく乱してもらってるッス！」
それを聞いてフミエどこがいいか考え込んだ。やはり迎え撃つには、自分たちが走り回るのに慣れている場所がいい。
「それならあそこしかないわね」
「あそこって？」
「鹿屋野神社の森よ。木が遮蔽物になって、大勢で攻めるにくく、こっちは守りやすい。早く部隊をそこに集めて！」
「わ、わかったッス！」
ナメッチは部隊に連絡を取りながらフミエと鹿屋野神社に向かった。
『黒客』存続を賭けた戦いが、今、始まろうとしていた。

ナメッチとフミエは、部隊を鹿屋野神社境内前に集めた。その中で副部隊長の大河内と作見は、敵をその場所まで引きつけるために街に出てその姿を見せ、敵をおびき寄せていた。
「とにかくこんな状況ッスから、敵方のフミエがなんで加勢しているのとかツッコまないように。今から装備を配るッス！」
そうしてナメッチは部隊に装備品を手渡していった。不安は部隊全員がメガシ屋製品を初めて使うということだった。防御壁などはまだしも、メガビーはメガシ屋限定アイテムなので、全員が使いこなせるかどうかはわからない。それでも贅沢は言っていられなかった。
「それから、なんスかこれ？」
ナメッチが何に使うかわからない装備品を見つけた。
「それはレーダーね。メガシ屋製じゃない武器を持つ人間や、ミサイルを捕捉できるらしいわ。なんでも、イージス艦の技術を応用したって」
「イージス艦！？さすが有事対策セットっスね」

メガばあの技術にナメッチは驚いた。これだけの装備があれば心強い。
「お～い！敵を引きつけてきたぞ！」
その時大河内と作見が石段をのぼってきた。敵もすぐ近くまで来ているらしい。
「よ、よ～し、戦術はさっき説明した通りッス。木をうまく利用して隠れながら相手の背後をつく。レーダーを参考に相手が1人になったところは積極的に狙うんスよ！」
フミエと協議した結果、こちらは人数が少ないのでゲリラ戦法でいくことにナメッチは決めていた。
「ナメッチ！もっと気合いをいれなさい！これは『黒客』存亡をかけた戦争なんでしょ！？」
引きつった声で部隊に声をかけるナメッチをフミエが一喝した。
「お、おう…」
それでもナメッチは緊張からか腹から声が出なかった。
「仕方ないわね。いい！？絶対にこの戦争に勝って、『黒客』を、そして第三小校区を守るのよ！わかった！？」
「イエッサー！！」
フミエのかけ声の方が、よっぽど部隊にも気合いが入った。
「オレの部隊なのに……」
ナメッチが卑屈になってつぶやいたところで、ようやく敵が集まってきたような気配がし始めた。
「この神社か。森の中は正直危険だが、まあ籠っているのは素人に毛が生えた程度の連中だろう。ここは手分けして、ローラー作戦で敵をあぶり出すぞ」
フミエのモニターから声が聞こえる。フミエは偵察用にオヤジを放っていた。鹿屋野神社石段下に集まった敵が相談している音声をオヤジが拾ったのだ。
「よし、散開ッス！」
「ラジャー！」

ナメッチの指示により部隊は森の中に散って行った。ナメッチとフミエは境内ウラに隠れ、戦況を見ながら各自に指示を出すことにしていた。丘の頂上にあるそこからは、それぞれの戦況を確認しやすい。

「じゃあクリアリング開始！」

モニターからも威勢のいい声がした。敵は全部で5クラブ。それぞれのクラブが鹿屋野神社の丘を囲むように、ゆっくりと森の傾斜に足を踏み入れた。

敵は慎重に周囲を警戒しながらゆっくりと歩を進める。不自然に鳥の飛び立つ音、地面に落ちている枝を踏みしめる音、それを聞き逃すまいという殺伐とした敵方の雰囲気が丘を包んでいた。

そんな中、『黒客』部隊の中の2人の隊員がその張りつめた緊張の糸を切る。その2人は敵の視界からうまく消えながらなんとか背後に回り込んでいた。しかもその近くまで敵方の1人が見回りにやってきた。2人はチャンスだと思い、十分に距離を詰めてからメガビーを放つ。ところがナメッチの心配した通り、使い慣れていないメガビーは見事に空を切ってしまった。

「うわっ！！なんだ！てっ、敵発見！！」

撃たれた敵が必死に叫ぶ。すぐにその仲間が駆け寄った。

「くそっ、このヤロー！！」

見つかってしまっては仕方ないと開き直り、『黒客』部隊の2人はごり押しでその敵にメガビーを浴びせた。ひたすらに距離を詰めたおかげでメガビーも命中し、その敵のメガネは破壊したが、その仲間達は2人を囲んで一斉にミサイルで攻撃した。

「ぐわあ！！」

『黒客』部隊の2人のメガネも破壊される。モニター越しにその戦況を見たナメッチはがくっとうなだれる。

「ああっ。せっかく背後に回り込んだのに……」

「メガビーを使いこなせないのは仕方ないとしても、見つかった後

の対応の仕方は悪かったわね。目の前の敵1人を倒しても戦局に大差はない。あそこはどうにか木を遮蔽物にして敵のミサイルから逃げることができたわ。そのくらいの状況判断もできないなんて、アンタちゃんと訓練してきたの？もう貴重な戦力を2人も失ったわよ」
フミエが今の攻防を見てため息をつきながら言った。
「そんなこと言っても仕方ないじゃないッスか。みんなこれが初めての実戦ッスよ」
「そうよね……このままじゃこの調子で部隊が壊滅されかねない。悪いのは私たちの作戦だったわ。作戦を変えるわよ」
フミエは早くも今の作戦に見切りをつけた。何か部隊が地に足つけて戦える方法はないかと思案する。
「作戦変更って言っても、そんな臨機応変に戦える技量も部隊にはないッスよ」
「じゃあこうしましょう。私とアンタがおとりになる。当然敵は私たちを囲んでくる。その外側から部隊には攻撃させる」
「無茶ッスよ！相手は直進君や追跡君を装備してるんスよ！オレっちらが蜂の巣になるッスよ！」
「だからまわりを木に囲まれている場所を選ぶの。それで３６０度からの攻撃はなくなる。鉄壁をうまく利用すれば、もっと相手の攻撃範囲は狭くなる。天叢雲剣は火炎を使って遠距離攻撃もできるし、近づいてきた敵はそのまま斬る。アンタもメガビー以外に何か武器を持ってるんでしょ？」
「一応ショットガンとハンドガンを一挺ずつ持ってるけど」
「なら十分ね。耐性を高めるメタタグもあるし、私とアンタならやれる。アンタは『黒客』で一番射撃がうまいんでしょ？」
「なんでそんなことまで知ってるんスか？」
ナメッチの言葉にフミエは1つ息をついて答えた。
「さっきも言ったでしょう。私はダイチを筆頭とする『黒客』を倒してやりたいの。そのためにアンタ達の戦いぶりを研究してたってわけ。オヤジを戦場に潜り込ませたりしてね」

「そ、そうだったんスか」
ナメッチはフミエがそこまでしているとは思いもしなかった。フミエは『黒客』の活動にいつもいちゃもんをつけていたので、相当自分たちを嫌っているのだと思っていた。
「アンタは油断も隙もないダイチやガチャギリと違って安心して背中を預けられる。アンタも私を信用できるなら、背中を私に預けなさい。ただし、この戦いに勝つということは、ダイチのメガネがもう1度壊れるということを意味している。どっちがダイチのためか、よく考えることね」
フミエはこの戦いに勝ち、ダイチを復活させたところでコテンパンにしようと考えている。しかしその言葉にナメッチは、この戦いは自分たちの力でどうにかなるんじゃないか、という希望にも似た思いを抱いた。
「……オレっちのオヤビンは、そんな甘くはないッスよ」
ナメッチの言葉にフミエは軽く微笑んだ。
「決まりね。じゃあ、作戦の概要を部隊にも伝えて」

一方、鹿屋野神社の森をローラー式にクリアリングしている黒客包囲網は、さきほどから相手の攻撃がこないことにいぶかしんでいた。
「おかしいぞ。ヤツらは境内にでも潜伏しているのか？」
そうやって各クラブのリーダー同士が集まって相談をしていた時だった。
「敵発見！増援をよこせ！」
すぐ近くの斜面で声が上がった。リーダー達が駆け寄ったそこには、フミエとナメッチが背中を合わせて構えている姿があった。
「バカめ、こんな敵軍の真ん中へ飛び込むなんて！やっちまえ！」
黒客包囲網の各クラブは、2人は文字通り包囲して銃撃を開始した。
「さあ！行くわよ！」
フミエは天叢雲剣で飛んでくる弾丸をなぎ払い、その隙を見て敵の

真ん中に向かって大きくその場で剣を振り下ろす。すると天叢雲剣に宿っていた火炎が森を焼き尽くすかのごとく、そしてまるで紅い津波のように敵勢力に襲いかかった。
「わあ！なんだあの剣は！？」
その攻撃で敵勢力は大きく退いた。電脳の炎は木には燃え移ることはなく、次第に勢いは衰える。その引いた相手にさらなる攻撃をするため、フミエはもっと前に出ようとした。
「ナメッチ、こっちはうまくいった。このまま進むわよ」
ナメッチはこの間、鉄壁を使って背後からの銃撃を防いでいた。
「了解ッス！」
フミエは1歩1歩慎重に前へ進む。ナメッチも後ろを向き背中でフミエの気配を感じながら歩を進める。その時木の陰から飛び出してくる敵を、ナメッチはすかさず捉えそこにショットガンを撃ちこんだ。おかげで2人の背後にいる敵も身動きがとれなかった。
「なにをたった2人を相手に苦戦している！広がれ！あの剣使いの側面から攻撃するんだ！」
敵リーダーの1人が指示をだして、敵勢力は横に広がった。言い換えればラインに厚みがなくなったということだった。
「それ！今よ！」
その様子を見ていたフミエがしめたと思い声を上げる。すると今度は、この騒ぎの間に敵勢力のラインの背後に回り込んでいた直属部隊がメガビーを一斉掃射した。
「まずい！挟撃だ！」
敵は混乱し、ラインは左右に割れた。そのそれぞれに対し、フミエとナメッチがさらなる攻撃を加える。
「なにテンパってるんだ！相手をよく見ろ、あれだけの少人数しかいないんだぞ。落ち着いて対処すれば片付く。おい、『焔』『Ｋ３』！背後のザコを一掃しろ！」
「了解！」
相手もさすがに慣れたものですぐに対策を打ち出し、陣形を整えた。

やはり奇襲が通用するのはここまでかと思ったが、こうなった以上後に退くこともできない。ナメッチとフミエは部隊を信じて目の前の敵を倒すことだけに集中した。

そこから幾許かの時が過ぎた。激しい攻防の果て、未だにその足で立って戦っているのはほんの数人になっていた。『黒客』直属部隊は壊滅。しかし、相手となった『焔』『Ｋ３』も同時に壊滅、相討ちという形だった。直属部隊は初実戦で立派に役目を果たしたのだ。

そして、『黒客』の最後の砦、ナメッチと助っ人のフミエは、今にも壊れそうなメガネでまだ奮闘していた。相手の激しい攻撃のど真ん中に身をさらしながらも、ナメッチは最後まで諦めずに歯をくいしばる。フミエも、ダイチをその手で倒すという尋常じゃない思いだけを抱えて、ここまで相手をなぎ払ってきた。奇跡的に敵勢力をほとんどを壊滅状態にまで追い込んだが、最後には『ウイングス』『プログレス』『ＧＴＣクラブ』のリーダー３人が立ちふさがっていた。

「これで消えろや！」

敵の撃ったミサイルの１つがナメッチに直撃する。メガネは激しく明滅を繰り返しているが、かろうじて耐えた。

「ナメッチ？もう耐性アップのメタタグが切れたんじゃない？」

フミエが心配そうに訊ねる。

「ああ、もうないッスね。フミエも、もうなくなったんじゃないッスか？」

「そうね。私もこれでおしまい。次の攻撃を耐えられるかどうかもわからない」

フミエが最後のメタタグを体に貼る。フミエのメガネもナメッチと同じく明滅を繰り返し、黒い煙すら上がっていた。こうなってくると耐性を高めるメタタグなど気休めにしか過ぎない。

「長かったが、今度こそしまいにするぞ！」

この2人の粘りに辟易したように『プログレス』リーダーが言った。そして、とどめのミサイルを敵リーダー3人が放った。
「もう、壁もないし、足も動かないッス」
ナメッチはその飛来するミサイルを直視しながら走馬灯のようなものを見ていた。クラブ名決めで採用されなかった自分のアイデア、最初は戦闘を嫌がっていた自分、ダイチ達に引っ張られて無理矢理特訓に参加させられた自分。結成時にはほとんどいい思い出なんてなかった『黒客』だが、しかし戦闘を乗り越えていきながら、ナメッチは内側に秘めるガッツを成長させていた。絶対不利の今回の戦争でここまで戦えたのもそのおかげ。いや、『黒客』を終わらせるわけにはいかないというその思いがもっとも強いのかもしれないとナメッチは思った。そう思えるくらい、『黒客』はなんだかんだで楽しかった。でも、その『黒客』も今目の前まで飛んで来ているミサイルが直撃したところで終わるんだなと思った。せめて『黒客』の最後は目を見開いていないといけない、そう思いつつもナメッチは恐怖で目を閉じてしまう。その次の瞬間、ミサイルの爆発音が聞こえた。
　衝撃はない。だから目を開けないと終わりを実感することはできない。それも恐ろしかったが、結局最後は目を閉じてしまった自分への恥が大きかった。ナメッチはゆっくりと目を開ける。ところが眼前には、鉄壁が立ちはだかっていた。
「……ああ、なんとか間に合ったな」
激しい息づかいにかすれたその声のする方を、ナメッチは見やった。
「オ、オヤビン！」
「ダイチ！？」
ナメッチとフミエの声が重なった。ナメッチは今気付いたが、フミエの目の前にも鉄壁が広がっていた。そしてそれらの鉄壁を投げたのはダイチだとナメッチは直感した。
「アンタ！そのメガネどうしたの！？壊れたんじゃなかったの！？」
ナメッチが訊ねるより先にフミエが訊ねた。

「これはデンパのメガネだ。あの後電話してすぐに来てもらった。どうにかナメッチに加勢しないといけないと思ってな。鉄壁もデンパに護身用に持たせていたヤツだ。オレとガチャのメガネはボロッボロに壊されたけどな」
ダイチはあの一瞬で鉄壁を投げてナメッチとフミエを救った。ともなげにやっているが、これもとんでもない技術がないとできる芸当ではない。
「よくここがわかったわね？」
「敵の大軍から勝機を見いだすとしたらここしかないって、ガチャが。まあ、なんでここにフミエがいるのかはあえて聞かないことにする。それより今武器がねえんだ。フミエ、メガビー持ってないか？」
「１０秒分しかないけど」
「１０秒あれば十分だ。オレにくれ」
フミエはポシェットから最後のメタタグを取り出すと、ダイチに向かって投げた。メタタグは直接ダイチの体に貼り付き染み込んでいった。
「さて、よくもさっきはやってくれたな。もうお前らのことは許さんぞ」
ダイチは敵をにらみつけた。
「性懲りもなくまたやられに来るとはな。どうせそっちの２人はあと１発でメガネ壊れるんだ。お前の友達のそのメガネも一緒に破壊してやるよ」
敵リーダー達が不敵に笑った。
「ふーん。そんな余裕こいてていいのかね？オレの頼もしい仲間が、お前らの背後にいるんだがな」
「なにっ！？」
「よう！」
敵リーダー３人が振り返るとそこにはガチャギリがいた。ガチャギリも破壊されていないメガネをかけて、ポケットに両手を入れて突

っ立っていた。
「お前も友達のメガネを借りたのか？」
「え？あんなぬるい攻撃で壊れるようなヤワなメガネじゃないんだが」
ガチャギリが笑ってかけているメガネの位置を直しながら言う。
「なんだと！？この死にぞこないが！」
敵のうち1人がガチャギリのメガネにミサイルを撃ち込んだ。しかしガチャギリのメガネはどこにも傷が無くピンピンしている。
「な、なんだ。その無敵メガネは！？」
撃った本人はうろたえた。
「ハハッ。いいなそれ。『無敵メガネ』、税込み２９４円。全国のコンビニエンスストアで絶賛発売中」
「な、なんだと！？じゃあそのメガネは！」
「バカだろお前。おいダイチ。時間稼ぎはこんなもんでいいか？」
ガチャギリがダイチの方を見て訊ねた。
「ああ。おかげで天叢雲剣のエネルギーは最大までたまったようだぜ」
フミエが持っている天叢雲剣には、炎の渦巻くように宿っていた。
「じゃあ、そろそろ決着をつけますか！いくぞ、ナメッチ、フミエ！」
「いいッスよ！」
「カモン！」
ダイチがメガビーを、ナメッチがショットガンを、フミエが天叢雲剣を構える。
「2度と、うちの校区に入って来るんじゃ、ねえええええええ！！」
ダイチの雄叫びと、敵リーダー達の悲鳴が重なり合った。
夕暮れの鹿屋野神社。ダイチ達は敵軍から余った装備品や持っていたメタバグを集めて確認していた。

「どうするんスかこれ。まずメガばあに代金を払わないといけないんスけど」
ナメッチが訊ねる。そこには割と多くの戦利品が集まっていた。
「いや。まずは直属部隊のメガネの修理代。それにオレとガチャのメガネの修理代にあてる。『黒客』を続けられるだけの状態にしておいて、メガばあからの借りは今後の活動で少しずつ返していく」
「そうスか」
ダイチの言葉にナメッチはうなずいた。またこの資金で、『黒客』は続けられる。そう思い、心の底から安堵した。
「よく頑張ったな、ナメッチ。それに部隊のみんなも。お前達の活躍がなければ今日は『黒客』の命日になっていた。恩に着る」
「ビッグボスにほめられたぞ！」
部隊は役に立ててよかったと言う喜びに満ちていた。しかしダイチは、自分たちのためにこれだけの人間が犠牲を被るような今回のことは避けないといけないなと思った。やはり、『黒客』は元のメンバーだけでいいと思った。
「じゃあ、私は帰るわね」
フミエはそれを確認した後、鹿屋野神社を後にしようとした。
「フミエ！」
ダイチがそれを呼び止める。フミエは立ち止まって振り返った。
「なに？」
「いや、あえて今回の件で礼は言わねえ。まあ、メガばあに武器提供を頼んでくれたことは感謝してる。でも、戦闘に参加したのはお前の勝手だ。お前のメガネが破壊一歩手前までいったとしても、オレたちに責任はねえからな」
「その通りね。別に私も謝ってもらおうとは思っていない。言いたいのはそれだけ？」
フミエがダイチの目を見て、ダイチはうつむいた。そして何か言葉を探しているようだった。
「お前が『黒客』を救った理由は聞かなくてもなんとなくわかる。

だからオレも、感謝の意味を込めてこう言わせてもらう」
「なんて？」
ダイチはひと呼吸おいて顔を上げた。
「かかってこい」

その夜の「大黒市賢人会議」。
（メ）はい。大誤算。まさか『黒客』が勝つなんてね
（W）おかげで我々は大赤字と
（満）しかも『黒客』を支援したのがあのメガシ屋だったとは。気を抜いていた
（メ）なんでもいいよ。これで運営資金もなくなった。大黒屋カルテルは今日を持って解散と
（W）仕方ないな
（満）すまないな。負けたのは弟のシンヤのミスだったかもしれん
（メ）（W）役立たず！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ　７　永遠の好敵手

２０２６年　５月

『黒客』が『黒客包囲網』を打ち破って以来、大黒市の電脳戦争の世界は様相が一変した。電脳戦争界をコントロールしていた大黒屋カルテル。「大黒市賢人会議」を開いては、電脳戦争界のあるべき未来を紡ぎだしていた彼らの正体は、ダイチ達もよく利用する通販電脳駄菓子屋の共同体だった。自分たちの利益を確保するために、彼らは大黒市の電脳戦争を絶やさないように画策していたのだ。そのためには、ある１クラブが勝ち続けるのを防がなくてはならない。『黒客』が彼らに狙われたのはそのためだった。

ところが『黒客』は、絶体絶命の窮地に陥りながらもその包囲網を奇跡的に打ち破った。そこにはメガシ屋という、大黒屋カルテルに属さない特殊な立ち位置にある電脳グッズ屋の存在も大きかった。『黒客』側の勝利の要因はそこにあったと言ってもいい。

その戦いにおいて大黒屋カルテルは、『黒客』を倒すために、それぞれ大金を投じて『黒客包囲網』の武装を強化した。もちろん彼らにとっては、『黒客』の勝利など考えられないことだった。この戦いにおいて、資金面で底をついた大黒屋カルテルは崩壊した。

続いて起こったのは、各通販電脳駄菓子屋における激しい値下げ競争だった。カルテルとは、複数の企業が商品の価格や生産量を取り決めることで、独占禁止法においてその行為は禁止されている。しかし元々違法なウラビジネスである電脳グッズの販売において、その禁止法は抑止力にはなっていなかった。大黒屋カルテルに属する３社は、それぞれの利益を相互に守るため、価格設定や販売数を細かく取り決めていた。そのカルテルが崩壊すると、今度は各駄菓子屋が自由競争を始めたのだ。

そのおかげで価格はそれまでの相場の半分近くまで下がり、メタ

バグの買い取り価格は逆にはね上がった。カルテルという形をとってきた頃は、価格も少し高めに設定しても商品は売れた。なにせ大黒市で電脳グッズを売っているのは、この通販電脳駄菓子屋を除けばメガシ屋ぐらいのものだったのだ。

そしてその結果、大量の武器装備が市の電脳クラブに行き渡るという現象が起こった。さきの戦いで大黒市でも強豪だった『ウイングス』などのクラブは崩壊したものの、大黒市にはまだまだ数多の電脳クラブが存在する。その意味では、今が最も大黒市で戦火が拡大していると言ってもよかった。

そしてもう1つの変化は、弱者は淘汰され、真の強豪クラブだけが生き残るという、弱肉強食の世界が出来上がったことだ。これまでの戦争では大黒屋カルテルの介入により、どうしても絶対的に強いクラブは登場できなかった。少し力を持ったところですぐに叩かれていたからだ。

その大黒屋カルテルの支配が終焉した今となっては、誰も力を持ちすぎることを制止する者はいない。ひたすらに強い者だけが勝ち続ける。本来の自然の姿に戻ったと言ってもいい。大黒市は、真の争乱状態に突入したのだ。

そんな市内の戦火拡大に歯止めをかけた出来事もあった。空間管理室によるサーチマトンの導入である。

とにかく古い空間の消滅するところを知らない大黒市において、最終兵器として登場したのがサーチマトンだ。どんな小さなバグにも反応し、違法なソフトウェアを持つメガネも容赦なく攻撃する。電脳戦争の中では、いかにサーチマトンから逃げながら戦うかというのが戦術の肝になった。そして神社や学校にはサーチマトンは入れないという法則を誰かが発見した。今度はそれを逆手に取り、神社や学校にトラップを仕掛けるという戦術も生まれた。サーチマトンの登場も、大黒市における電脳戦争の形を変えた要因の1つだった。

その流れの中で『黒客』は何をしていたか。包囲網の攻撃で壊滅寸前まで行った彼らだったが、その時に得た戦利品でなんとか解散には至らずに済んだ。そしてもう1度資金を貯めなければいけないということになった。その資金調達の手段は、やはり戦争だった。

包囲網の攻撃の直前に直属部隊を組織した『黒客』だったが、自分たちのために仲間のメガネが無下に破壊されていくのに耐えきれなかったダイチは、すぐに部隊の解散を命じている。『黒客』の戦闘員は再び3人ということでリスタートした。

今の『黒客』にとってみれば、ほぼ同数の電脳戦争などは目をつむっても勝てるほどに造作もないことだったのだ。相手にも特別な強豪などはなく、『黒客』は順調に力を蓄えられた。そして次第に、大黒市における敵も数少なくなっていた。残っているのは本当に力のあるクラブだったが、それでも『黒客』に及ぶクラブは出現しなかった。

かつてダイチが夢見たのは、大黒市で頂点を極めること。その夢はすぐ目の前まで迫っている。しかし、この頃のダイチは腑抜けた感情に支配されていた。包囲網に襲撃されて以降、本当に歯ごたえのある敵はいなくなった。このままの勢いで頂点を極めても、ほとんど達成感など見いだせない。あそこで強豪をクラブをまとめて潰すんじゃなかったという後悔まで押し寄せていた。これが想像するだけで震えるくらい興奮した夢なのなのだろうか。まだ『ＴＳＵＪＩＧＩＲＩ』とのバカみたいな真剣勝負だったり、駆け出しのクラブだけで同盟して、強豪クラブの連合を倒した南北戦争であったり、『黒客』の終焉を覚悟したさきの『黒客包囲網』との戦いの方が楽しかったと思えた。本当のスリルを味わえた。スリルのない世界ほど味気のないものはない。

「そう言うなって。大黒市をオレたちが制覇すれば、大黒のキングになれるんだぞ。オレたちが道を歩けば、通行人はこうべを垂れてひれ伏すだろう。そうすればメタバグの上納とかも思いのままだ」

そう言って金に執着できるガチャギリがうらやましいとダイチは思った。正直、ダイチは大黒を制覇したら何をしようか考えていなかった。どうせ、また学校でいたずらを仕掛けるくらいしかやることがないなと思っていた。
「あーあ。どっか目の覚めるくらいバカみたいに強いクラブは現れねえかなあ」
大きくため息をつくようにダイチが言った。
「けど、大黒でまだ戦争してるクラブって本当に少なくなったっしょ。ダイチの望むクラブなんてあるはずが」
「いや。1つだけあるぞ」
ナメッチの言葉を遮るようにガチャギリが言った。
「お、どこだどこだ？」
ダイチがうれしそうに反応する。
「ほら。オレたちのホームページにも宣戦布告がきてる」
ガチャギリがウインドウをダイチに示しながら言った。
「なになに？勝負を所望する。場所は明後日、大黒新駅ビル。『ドリームチェイサー』」
「聞いたことないクラブっスね」
ナメッチがガチャギリを見た。
「ああ。新興クラブらしい。構成メンバーは、大黒第一、第二、第三小の生徒だそうだ」
「第三小？おいおい、ウチの学校にもメンバーがいるのかよ」
誰だろうかとダイチは思った。同学年で電脳クラブを組んでいる人間など聞いたこともなかった。
「噂によるとえげつないくらい強いらしいぜ。戦ったクラブが、ＰＴＳＤを患ったっていうほどだ」
「ＰＴＳＤ？ってなんだ？」
「簡単に言うと、戦争になどによって生じるトラウマだな」
「ふぇ？じゃあ、その『ドリームチェイサー』ってとこと戦ったクラブは、トラウマになるほどひどい目に遭ったってことッスか？」

ナメッチが体を震わせて言う。死ぬほどいたぶられるのだろうかとナメッチは思った。
「実際のところはわからん。ただ、恐ろしいほど強いクラブってことだけは聞いている。正直、これをお前に見せるのもどうかと思った。この宣戦布告に乗っかるってことは、相手の懐に入り込むようなものだからな」
「んなこと関係ねえ。おもしれえじゃねえか！やっと歯ごたえのあるクラブが現れたんだ！オレの血が騒ぐぜ！」
ダイチは鼻息荒く立ち上がった。まるで水を得た魚のようだった。
「まあ、こうなるだろうと思ったぜ。じゃあ、この『夢の追跡者』とやらを倒して、オレたちが大黒市を制覇してやるか！」
ガチャギリも乗っかった。この戦いの先に、大黒市の王座が待っている。ガチャギリの目には底なしの大金が踊っていた。そしてナメッチはいつものパターンで、２人に引っ張られるように参戦することになった。

風薫る5月ももうすぐ終わろうとしている、ある日の夕方。『黒客』メンバーはサイトに書き込まれた宣戦布告を受け、呼び出し場所である工事中の大黒新駅ビル前にやってきた。
「この前メガばあへの借金の残りをまとめて支払ったこともあって、今回はあまり上等な武器が仕入れられなかった。日を改めてもらった方が良かったんじゃないか？」
念を押すようにガチャギリが言う。『ドリームチェイサー』とぶつかり合うにしても、ガチャギリとしてはもう少し準備をしたかったというのが本音だった。
「うるせえな。受けちまったもんはしょうがねえだろ。今更、来週にしてくれとか頼めるかっての」
ダイチはそれでもやる気まんまんだった。一刻も早く最強クラブと呼ばれるその相手とやり合いたいと思っていた。
「オヤビン。ここって、２学期からオレっちらの新校舎になるビル

っスよね？」
ナメッチが工事途中のビルを見上げながら言う。夕空に向かって伸びるその建物が、とても学校になるとは想像できなかった。
「ああ。そういやそうだったな。それに今日は工事が休みみたいだな」
「相手もそこを狙って今日を選んだんだろう。しかし建設中のビルの中か。正直、良い地形ではないな。この中に追い込まれると、逃げ場がなくなる」
ガチャギリが不安そうに言った。
「なに、これだけ高いビルで、まだ中も基礎構造だけだろ。逃げ場なんていくらでもあるって」
「ふふん。案外アンタ達に逃げ場なんてないかもね。どこに隠れようと、どこまで逃げようと、アンタ達には破滅しか待っていない」
「おお、そうか。なるほど。オレたちには破滅しか待ってないのか……ってフミエ！？」
あまりに違和感のない掛け合いだったので、ダイチは気付くのが一瞬遅れた。ガチャギリやナメッチも後ろを振り返る。すると3人の背後にはフミエが1人で仁王立ちしていた。
「お前、ここで何してんだ？」
ガチャギリがいぶかしげに訊ねる。
「うーん、そうね。しいて言えば、アンタ達の最後のマヌケ面見に来た」
「はあ？さっきから何だお前？オレたちには破滅しか待っていないとか、最後のマヌケ面見に来たとか」
ダイチ達があまりにも鈍いのでフミエはため息をついた。
「まったく。アンタ達まだわからないの？今日ここにアンタ達を呼び出したのは私。そして今日、アンタ達を潰すのも私」
「何だと！じゃあお前、『ドリームチェイサー』のメンバーの1人なのか！？」
「まっ、そういうことね」

ダイチは自然とフミエから2、3歩後ずさった。フミエにはまだ攻撃の意志が見られなかったが。
「1人か？」
ガチャギリが周囲を見回しながら訊ねる。
「まさか。私達は3人組。見えないだろうけど、ちゃんと攻撃態勢に入ってるわよ」
「なんだと！じゃあステルスか！」
ダイチはそう言って自分のメガネを押し上げた。しかしメガネをはずしても、まわりにフミエの味方らしい人間は見当たらない。メガネをかけていては見えなくなるような技を使っているのではないかという、ダイチの予想は外れた。
「誰もいないぞ。まさかコイツ、ハッタリかましてんのか？」
「しかし、こいつ1人で最強クラブなんて呼ばれるのはおかしい。何かあるはずだ」
ダイチとガチャギリが耳打ちし合う。フミエはそのやりとりを聞いて笑い始めた。
「アハハハっ。私がハッタリをかましてるなんて、おめでたいことね。いいわ。私達『ドリームチェイサー』が最強と呼ばれるゆえんを見せてあげる。さあ、コイツらを撃つのよ！」
「撃つのよって……まわりに誰もいないのに何言ってんだお前は……って、なんだ！？」
ダイチがあきれ顔でつぶやいた途端、視界に無数の黄色い円盤が現れた。いきなりのことにダイチ達は硬直する。
「なんだこの円盤は！？」
「アンタ達を破滅に追いやる、切り札よ」
目の前の円盤に視界を遮られて見えなくなったフミエが笑みを含んで言った。
「はっ。そんなビジュアル演出だけでオレたちがビビるとでも思ったか！」
ガチャギリはそう言って、かまわずフミエに対してハンドガンを向

けた。
「これがただのビジュアル効果だけじゃないのよね。それをわからせてあげる。やるのよ！」
「うわっ！なんだ！？」
フミエの号令とともに、黄色い円盤の中から弾丸の掃射が始まった。ダイチ達は足元を狙われ、ダンサーのようなステップを踏みながら避ける。
「くそっ！こりゃ逃げるしかないな！こっちだ！」
ガチャギリがダイチ達に声をかけてビルの中に入って行く。フミエはそれを見て再び不敵に笑った。
「フフフっ。これでいいわ。計算通り。さあて、積年の恨みを晴らす時ね。ダイチ。これからじっくりと料理してやるわ。ショートカットからの攻撃は頼んだわよ」
「いつも通りだろ。わかってるって」
「あまりムリはするな。相手は大黒トップクラスの『黒客』だからな」
フミエの指電話から、頼もしい相棒達の声が聞こえてくる。
「ええ。油断はしてない。だけど、たまらなく楽しみであることは間違いない。この手で、あのバカどもを葬れるんだからね」
フミエは夕陽に染まるビルをもう1度見上げて、深呼吸をする。高ぶる心を落ち着かせてから、ゆっくりと自らもビルの中へ踏み出して行った。

「おいガチャ！なんだあれ！？」
とにかくビルの階段を上へとのぼりながらダイチは先ほど見た黄色い円盤について訊ねた。
「知らん！だが、噂で少し聞いたことがある技に似ているところがある」
「ある技ってなんスか！？」
とりあえず4階までのぼってきたダイチ達は、支柱の影に隠れて息

を整えた。そしてフミエが来ないかどうか階段の方を見やりながら、ガチャギリが続きを話始める。
「離れた空間と空間を電脳上でつなぐことができるっていう技だ。ほとんど都市伝説かと思っていた。実際にそんな技が使えれば最強だからな。敵の目の前に身を晒さなくても攻撃ができるなんて、電脳戦争の常識を根本から覆すことができる」
「じゃあ、アイツらは常識を覆したってことか？フミエの仲間は、今もどこかでオレたちを狙っている……」
「相手の位置がわからないんじゃ勝ち目がないじゃないッスか！」
ガチャギリの話が本当なら『黒客』側は打つ手がない。ダイチは知らない間にそんな大技を仕込んで来たフミエに対する悔しさで下唇を噛んだ。
「そもそも、なんでアイツがそんな技を使えるんだ？それにどこで人を集めた？」
「さあな。だが、アイツにはメガばあという後ろ盾がある。その技もメガばあルートで知ったんじゃないか？そしてメガシ屋に出入りしていた人間を仲間に引き入れたんだろう」
「その通りよ！」
ガチャギリの言葉に反応するかのように、いつの間にか階段入り口に立っていたフミエが返した。
「ちっ、見つかっちまったか！」
「逃げ隠れるのは苦手なようね。それにそのままじゃ、いつまで経っても私たちには勝てないわ」
あざ笑うかのようにフミエが言う。
「うっさい！お前の仲間はこの近くにいないんだろう！こんな戦術、卑怯の極みだぞ！」
「ふふん。その低能は哀れむべきね。私たちの仲間は、じっとアンタ達を追っているわ。そんな事にも気付かないんてね」
「なんだと！？」
フミエに言われてダイチ達は周囲を見回す。しかし人の気配は感じ

られない。
「メガばあが引き入れてくれた2人の仲間は、才能のかたまりだった。それまでは電脳戦争なんて経験したことがなかったけど、メガばあの訓練によって見違えるほどに成長した。アンタ達に気配を掴ませないことぐらい、2人にとっては容易いことよ。さあ、『黒客』をあぶり出して！」
フミエが号令をかけると、再び黄色い円盤がダイチ達のそばで開いた。支柱の陰に隠れていたダイチ達も、これにはたまらず陰から飛び出す。その瞬間にフミエはダイチの元に走り寄り、帯びていた電脳刀を抜いて振り下ろした。
「うわっ！お前それ、天叢雲剣じゃないか！どこまでも卑怯なマネを！」
紙一重でフミエの攻撃をかわしたダイチが叫ぶ。
「違うわ。これは天叢雲剣を参考に、私が使うために新しく合金した天叢雲剣改よ！飛び道具系の攻撃を排除し、斬れ味は前にもまして鋭くしてある。近接戦闘専用の仕様にしてあるわ！」
「な、なるほど。さっきの円盤で敵をあぶり出してお前が直接手を下す。それがお前らの戦法か！」
「ピンポーン。その通り。じゃあ冥土の土産にあの円盤についても教えてあげましょうか。あれはショートカットと呼ばれるホールよ。空間の設計ミスを利用して、空間と空間をつなぐことができるの」
「空間の、設計ミス？」
フミエの言葉を聞いてガチャギリが考え込んだ。
「もっとも、私に言わせればアンタ達の脳みその方が設計ミスよ。さあ、どんどん行くわよ！」
フミエがさらに斬り込んでくる。ショートカットからの攻撃もあり、ダイチ達は逃げるのがやっと、というところだった。
「やべえぞ。やられるのも時間の問題か？」
ダイチがガチャギリとナメッチと背中を合わせながら言った。
「いや、まだいけるかもしれん」

対してガチャギリからは楽観的な答えが返って来た。この状況で何を根拠にそんなことが言えるのかとダイチやナメッチは思った。
「どういけるんだよ！？」
「その前にこれだ」
ガチャギリは電脳煙幕弾を足元に投げて視界を遮った。『黒客』の3人は視界を暗視モードに切り替えて視界を確保し、再び階段を目指した。
「ふん。逃げられるとでも思ってるの？」
フミエの言葉を尻目に、ダイチ達は階段をのぼって5階にたどり着く。
「で、どうすれば勝機があるって？」
改めてダイチはガチャギリに訊ねる。
「ああ。リスクが伴う方法だが」
ガチャギリがダイチとナメッチに作戦の概要を話す。その内容にはダイチも驚愕した。
「お前、それ本気で言ってるのか？マジあり得ん。危険すぎる。電脳戦争の常識を逸脱してるぞ！」
「相手はその常識を覆してるんだよ。これしか方法はない」
ダイチはしばらく考え込む。すると4階からのフミエの足音が異常なくらい響いているのがわかった。「オヤビ～ン」とナメッチが情けない声でダイチの袖を引っ張る。
「仕方ねえ。その作戦に賭けてみよう」

ダイチはガチャギリの提案した作戦を採用し、すぐに外が見える建物の端に移動すると、組まれた鉄骨の足場の向こうに輝く夕陽を捉えた。その瞬間、フミエも5階に到着する。
「なにしてんのアンタ？」
フミエもいぶかしげにそちらを向いた。ダイチも一瞬だけフミエに笑いかけたかと思うと、持っていたミサイルをその夕陽の中に打ち込むがごとく引き金を引いた。ミサイルは時間帯を間違えた打ち上

げ花火のように夕空にはじけていった。
「よし、これで多分気付くだろう」
ダイチの隣にいたガチャギリがほほえむ。フミエはこの奇妙な行動に首を傾げる。
「アンタ達、まさか、仲間でも呼んだんじゃないでしょうね？」
「ふん。仲間か。ある意味ではそうだ。だが、敵でもある」
ガチャギリの言葉に、また何かとんでもないことを始めるのではないかという思いがフミエの頭によぎった。これまで『黒客』は、常識を破るような戦いを続けてきた。それをつぶさに見届けていたフミエも、毎回それには驚かされていた。
「ふん。今回ばかりは何をしてもムダ！行くわよ！」
フミエの合図とともにショートカットが開く。『黒客』は時間稼ぎのようにその攻撃から逃げ回った。決してムリに攻撃を仕掛けず、ひたすらその時が来るのを待った。
　さすがに逃げるだけなら手を焼かせてくれるとフミエも思い始めた時、ビルの中に異変が起こる。先ほどダイチがミサイルを放った建物の端から、丸い飛行物体がまるでＵＦＯのような電子音を響かせて飛び込んできたのだ。
「キューちゃん！？ま、まさか！アンタ達がさっきミサイルを外に向けて撃ったのは、キューちゃんを呼ぶため！？」
何を考えているんだと思いながらフミエが叫ぶ。
「そうだ。オレたちの勝利を呼び込むためにな！」
キューちゃんはすぐにダイチ達の方を向いた。ダイチ達はフミエとは距離を置きながらギリギリでキューちゃんからの攻撃も避けていく。
「バカじゃないの？余計な注意を払うことになるだけなのに」
「ふん。それなら、オレたちのメガネを壊してみろよ」
挑発するようにダイチが言う。フミエはそれに怒って仲間の２人に指示を出す。
「もっとショートカットを出すのよ。アイツらの動きを完全に封じ

て！」
「了解！」
仲間２人は攻勢を強めるためにダイチを囲うようにショートカットを出現させる。ところがそこでフミエ側にとってはとんでもないことが起こった。
「そ、そんなことが……」
ダイチのまわりに出現したショートカットが、弾丸を撃ちだす前にキューちゃんによって次々と消されていくのだ。これはフミエにも予想外の出来事だった。
「ガチャ！お前の言う通りだったな！」
「だろう。空間の設計ミスを利用しているっていうショートカットは、言ってみれば空間バグのかたまりみたいなもんだ。キューちゃんが食いつく格好の獲物ってことだ」
ガチャギリの言葉にフミエは唇を噛んだ。もとはと言えば、その情報を与えたのは他ならぬ自分だ。たったそれだけの情報で、こちらの手を防いでしまう。『黒客』の実力を再認識すると同時に、油断していた自分を悔いた。
「だったら、直接斬りつければいいことよ！」
フミエはそう叫んでダイチに斬りかかる。ところがダイチの肩の上で浮遊するキューちゃんは、今度はフミエに気付いてフォーマット光線を浴びせてきた。これにはフミエも近づくことができなかった。
「お前の剣は、何本もの剣を合金して作ったんだろ？それも違法物質のかたまりってわけだ。キューちゃんがオレたちの武器よりも過敏に反応するのは読めていた」
ダイチが余裕の表情でフミエに言う。その間キューちゃんは次なるターゲットをダイチに設定したが、ダイチは先手を打ってキューちゃんの目の前に鉄壁を出した。
「私達の攻撃がすべて封じられたってこと？そんなバカな」
「フミエ。お前は力を持っているが、実戦には慣れていない。経験値の差で、オレたちには勝てないんだよ」

ダイチがフミエに吐き捨てる。ダイチ達は、いつもこのくらいの修羅場をくぐり抜けてきたのだ。
「ふん。そんな余裕かましていられるのも、今のうちよ！」
「ぷぎゃー！！」
フミエの反撃のセリフと、ナメッチの悲鳴が重なった。ダイチは驚いてそちらの方を向く。
「お、お前達がフミエの仲間か。やっと姿を現したな」
ナメッチはいつのまにか、フミエの仲間２人に挟まれており、あっという間に戦闘不能になってしまった。
「ふん。これでこっちが数的有利ね。まともなぶつかり合いになれば、アンタ達もお手上げじゃない」
フミエが勝ち誇ったように笑う。ショートカットや天叢雲剣が使えなくても、『ドリームチェイサー』は飛び抜けた戦闘能力を持っている。
「ふーん。そうか。じゃあ、まともにぶつからなければいいんだな」
ダイチはフミエのセリフを意に介していなかった。そして何気なくハンドガンを両手に構えると、先ほど投げておいた鉄壁をようやく破壊したキューちゃんを撃ち始めた。
「なにしてるの！？それがアンタ達の切り札じゃ」
「必要なくなったからな」
キューちゃんはダイチの攻撃に耐えきれず、一時活動を停止し、修復中の文字が表示された。
「ガチャ、準備はできているんだろうな？」
「もちろんだ」
「こ、今度はなにをするつもり？」
怪しげなダイチとガチャギリから、フミエはじりっじりっと離れて行く。
「お前達の切り札をパクる。あいにくアイツらのメガネはハッキングからは無防備だった。オレなら簡単に潜れたんでな」
ガチャギリの言葉の後、フミエを囲むように無数のショートカット

が開いた。
「くっ、もうショートカットを自分たちの技にしたの！？早くあの2人を取り押さえて！」
「んなろー！！」
ダイチ達に攻撃させまいとフミエが指示を出すと、仲間の2人はダイチとガチャギリを取り押さえた。ダイチ達がほとんど抵抗しなかったので、フミエは逆にダイチ達をいぶかしんだ。
「どうしたの？なんで抵抗しないの？」
「する必要ないからさ。オレたちにはナメッチ先生がいるからな」
ダイチに言われて、フミエはハッとしてナメッチの倒れていた方を見る。すると先ほど倒されたはずのナメッチが、せっせと目の前のショートカットの入り口にミサイルを装填しているのが見えた。
「な、どういうこと！？ナメッチはさっき2人にやられたんじゃ」
「忍法死んだふりの術。いつも真っ先にやられるナメッチのために、オレたちが組んだプログラムだ。メガネがまだ余力を残した状態でも、あたかも壊れたように見せかけるプログラム。相手が油断している間にナメッチが反撃に転じるっていうのを想定して作った」
ダイチが丁寧に説明している間に、ナメッチの準備が整った。
「じゃあ、行くっすよ。発射ッス」
ナメッチがスイッチを入れると、次々にショートカットの入り口にミサイルが吸い込まれていった。そして、フミエを囲んでいたショートカットから飛び出してきた。
「いやあああっ！！」
あっと言う間にフミエのメガネは壊れ、戦闘不能になった。ダイチはそれを見てため息をつく。
「おら、いつまでくっついてんだよ。フミエのメガネは壊れたんだ。これでこっちが数的有利になった。メガネ壊されたくなければ、さっさと降伏しろ」
「く、くそっ。だがオレたちは諦めんぞ！」
フミエの仲間2人はダイチ達に銃を向けて抵抗する姿勢を見せた。

仕方ないと、ダイチ達も銃を構える。
「ぷぎゃー！！」
その時またナメッチの叫びがこだました。今度はなんだと思いながらダイチがその方を向く。
「ナメッチ？」
ナメッチのメガネは煙を上げ、そのまま崩れ落ちるように座り込んでいる。何がナメッチのメガネを破壊したのか、ダイチは見回した。
「ボク、サッチー。よろしくね」
その時、ダイチの背後で間の抜けたような声が聞こえた。夕陽を遮るような巨大な影に、ダイチはそこでフリーズしてしまった。
「あの、ガチャギリくん。これってまさか」
「ああ。なんか、後ろから殺気を感じるぞ。さっきお前がキューちゃんを撃ったのを恨みに思ってここまで来たんじゃないか？」
ガチャギリもまるで金縛りにあったように背筋をのばしながら返した。
「そーかそーか。で、あれ？残りの２人は？」
「とっくに逃げたぞ」
階段方向に逃げて行くフミエの仲間２人を、ダイチは目の端で捉えた。そして一緒に逃げようと足を踏み出した瞬間、サッチー渾身のフォーマット光線が２人に浴びせられる。
「のわあああああ！！」

「結局、勝負に勝って試合に負けたってこと？」
翌日、学校でフミエとの勝負の話を聞いたデンパが聞き返してきた。
「まあ、確かに負けは負けだ。キューちゃんを呼び込んだら、サッチーもつられてやってくることを考えていなかった」
「いいじゃねえか。ショートカットの技術も盗んだし、再戦するとなればフミエ達とは今度は互角に戦えるしな」
ガチャギリも収穫があったので負けたことは気にしていなかった。
その時フミエが登校してきた。なんとなく晴れない表情のまま、

自分の席につく。
「おいフミエ。メガネ直ったのか？オレたちは再戦してもいいぜ」
フミエはダイチを一瞥すると、息をつくように言った。
「アンタ達、負けたくせによくそんなことが言えるわね」
「今度は負けない自信があるからな。昨日の敗戦は、ほとんどオレたちの自爆みたいなもんだ」
「ダイチ」
フミエは改めてダイチの方を見やった。
「なんだよ？」
「昨日の戦いは、素直に私の負けを認める。あんな勝利、仲間の2人も別に嬉しくないって言ってたし」
「だから再戦しようって言ってるんだ」
「いいの。私達は絶対の自信をもって昨日の戦いにのぞんだのよ。それをアンタ達はものの数分で打ち破る方法を考えだして、そして実際私達の手を封じてみせた。正直私は、アンタ達の実力を見誤っていた」
淡々と話すフミエの瞳の中に負け惜しみの気持ちは感じられない。ただ、相手を認めようとしているということだけわかった。
「オレたちもお前があんな技使って来るなんて思ってなかったぜ」
「私達の技は、長い間熟考して生み出したものよ。それをあんな簡単に防がれてしまうなんて、自分たちの無力さと、アンタ達の土壇場での強さを身にしみるほど感じた。今すぐ再戦しても、きっとアンタ達が勝つんでしょうね」
「おいおい、らしくねえぞ。一体どうした？」
ガチャギリが軽いノリで返す。
「勘違いしないで。私はこのまま終わるつもりはない。もし次があるなら、その時はアンタ達の想像をはるかに越える技を編み出してからにする。それまで、アンタ達は大黒のトップで居続けなさい。誰かに負けることは私が許さないわ」
「・・・・・・大黒のトップか。もう、そんなところまで来たんだ

な」
ダイチがしみじみと言った。そんな夢を見始めてからかれこれ9ヶ月が経とうとしている。
「ショートカットなんて飛び道具使えるの、私達とアンタ達ぐらいのものでしょ。だからもう、大黒でアンタ達にかなうクラブはない。私もそれを認める。で、どう？頂点からの眺めは？」
フミエは是非聞いてみたいと思っていた。ずっとその夢を追いかけつづけて、やっとその栄光を手に入れた男の感想を。『ドリームチェイサー』の1人として。
「いや、なんか実感ねえな。つか、まだまだオレたちよりも強いヤツはどこかに居ると思うんだよな。そいつと一戦交えるっていうのが、新しい夢になったって言うか」
「ふん、それはそれでおめでたいことね」
やっぱりバカだとフミエは笑った。今の『黒客』にかなう相手など、都市伝説で聞く暗号屋くらいのものだろうと思った。でも、それがフミエはうらやましくもあった。夢を叶えてしまえば、同時に何か大切なものを失うかもしれないと思っていた。ダイチを倒せば、自分はどうなるのだろうか。メガネをやめてしまうのではないか。そこまで考えていた。だから、今回の勝負も潔く負けを認めたという部分もあった。
　しかしダイチは違う。常に前を向いている。常に上を目指している。止まることを知らない。そんな愚直な生き方を、フミエはキライじゃないと思った。そしていつか、もう1度、ダイチの夢を阻みたいと思った。

夢を見続ける限り、『黒客』の戦いは終わらない。

Last Episode 運命を変える者

２０２６年　７月

『黒客』が大黒市の頂点にのぼりつめてからというもの、ダイチ達が電脳戦争に出向くことはなくなった。というのもフミエとの戦いはサッチーに攻撃されメガネが破壊されるという結末となり、その損害の補填に奔走していたのだ。戦争自体が少なくなった昨今、戦争で稼ぐのは難しくなった。

そうは言ってもたまにダイチ達は新技の研究をしたり、最近はフミエの活動の１つである電脳ペットの捜索の手柄を横取りしてメタバグをちびちびと集めていた。第三小校区内ではほとんどもうメタバグも見つからないのだ。

そうしていつの間にか７月になった。そこでかなりマンネリ化してきた『黒客』の活動を改革しようとしたダイチは、いいことを思いついたと言って放課後校区内のガラクタ屋にメンバーを集めた。

「なあ、ナメッチ。オレたち『黒客』に足りないものはなんだと思う？」

「え？そうッスねえ……優しさとか」

ナメッチの素っ頓狂な答えにダイチはうなだれた。

「それはお前なりのボケか？寒すぎる。まあこの季節にはちょうどいいが」

「なんか変わってねえなあ。このナンセンスさは結成の時から変わってないぜ」

ガチャギリもこれには苦笑するしかなかった。

「じゃあ何なんスか？今の『黒客』に足りないものって？」

「わかんねえかな？華だよ、華」

ダイチが頭を掻きながら言う。ガチャギリはこれにも吹き出した。

「いきなり何だよ？らしくもないこと考えるんだな。オレたちには

華がないってか？」
「オレたちって言うか、お前ら。正直オレ以外にビジュアルの冴えるヤツがいない。はっきり言えばもっさりしてる。夏を迎えるにあたって、これじゃどうにもやる気が出ない」
「悪かったな。それにめでたいヤツだなお前は。そんなに自分のことをイケてると思ってんのか？正直案外だぞ」
「うるせえな。お前もそう感じてるんならちょうどいいだろ。ここいらで初めての女子構成員を加えるっていうのはどうだ？」
ダイチの提案に、ガチャギリは暑さでついに頭がイカれちまったかと思った。
「誰をメンバーに加えるんだよ？オレたちは学校の中ではだいぶ白い目で見られてるんだぞ。今更『黒客』に入らねえか？なんて誘っても、どん引きされるだけだろ」
「いや。いいニュースがある。オレたちのクラスに、今度2人も転校生が入って来るらしい。しかも2人とも女だ」
「ああ。マイコ先生が言ってたッスね」
ダイチと同じ6年3組のナメッチがうなずく。
「そいつらを『黒客』に誘うってか？第一メガネに興味関心があるのかもわからねえし、そいつを入れてどうするんだ？『黒客』夏合宿と称して、海にでも連れ出すのか？」
「いいなそれ！じゃないじゃない。別にそんなことは考えてないが、オレが言いたいのは変化が欲しいってことだよ。オレたち『黒客』には男女格差がないっていうＰＲにもなる」
ダイチはそれをやるならフミエと行きたいと思った。小学校生活の中でずっと思い続けた人だ。浮気などできない。
「ＰＲねえ。ま、お前がやりたいんなら止めねえけど。じゃあ、頑張ってその転校生を口説き落としてくれや。『黒客』1番のイケメンさん」
「任せとけって」
そうしてダイチは転校生がやって来る日を待った。

ところがその翌日、ダイチは最近の日課であるフミエの電脳ペット捜索の横入りを画策していたのだが、とある見知らぬ少女のおかげで獲物をフミエに横取り（？）されるという事件が起こった。どこの誰だか知らないが、次会った時には損した分を弁償してもらわないといけないなと思いながらその次の日学校に登校すると、その少女が6年3組の教室にいた。

その転校生の少女の名前は小此木優子。柔らかい雰囲気の持ち主だが、見た感じでは正直メガネの腕の方は微妙そうだった。何より気に食わなかったのが、昨日の一件で仲良くなったのか、すでにフミエサイドに取り込まれていることだった。これは近いうちに一回いてこましてやらないといけないなとダイチは思った。

まだ転校生はもう1人いるし、ダイチは彼女を諦めることにした。そのもう1人の転校生はこの日ドタキャンしたらしい。随分神経の図太い転校生だなと思い、それも逆に期待に変わってダイチは楽しみに明日を待った。

そして次の日、『黒客』の運命を変えるもう1人の転校生がやって来た。名前は天沢勇子。第一印象は悪くないとダイチは思った。見た目は大人しそうだが、その瞳の中はどこか攻撃的な色彩を帯びている。長らく戦いの日々に明け暮れたダイチには直感的にわかった。こいつは出来ると。それにビジュアルも平均以上だ。これはガチャギリが好きそうな系統だなと勝手に想像し、ダイチは1時間目の授業が終わると早速声をかけることにした。

しかしフミエサイドの動きも速かった。ダイチよりも先に天沢勇子に声をかけている。しかも話の内容を盗み聞きしていると、フミエ達は昨日すでに彼女を会ったかのような口ぶりだった。これはまた小此木パターンで取り込まれるんじゃないかと心配したが、フミエ達の交渉は不発に終わったようだった。これで安心してこっちの勧誘が出来ると、ダイチは得意の横入りで輪の中に割って入った。

「おいブスエ。お前また勧誘してんのか？探偵ごっこクラブに？」
「うっさいわね」
フミエは辟易したように返す。フミエもダイチ達との戦いの後、資金稼ぎのためにコイル探偵局の活動に専念していた。
「お前のへぼクラブになんか、誰も入んねえよ。それより、オレのクラブに入れよ。すんげークールなクラブなんだぜ」
ダイチの可憐な勧誘に、天沢勇子はそっぽを向いた。
「な、なんだシカトか？このオレ様をシカトするのか？」
「そんな男ばかりのダメクラブ。ダメに決まってるじゃない。チビスケ」
フミエはなかなか痛いところを突いてくる。その男ばかりに飽きたからこうして勧誘しているのに。
「んだとーチビスケ！ミチコさん呼ぶぞ！」
ダイチは呼び出し方など知らないが、相手を凹ますには十分な言葉だった。
「私だってミチコさん呼ぶわよ！」
「うるさい！！」
張り合いに応じたフミエの言葉の直後、天沢勇子がいきなり怒鳴った。教室は一瞬にして静まり返る。
「どっちのチビスケも、もう話しかけるな」
さしものダイチとフミエも、転校生のこの言葉には何も言い返せなかった。

「オヤビ～ん。やっぱりやっちゃうんですか？転校生」
2時間目の授業中、ダイチの後ろの席のナメッチが問いかけてきた。
「当たり前だ」
ダイチも腕を組みながら毅然と返す。
「でもオヤビン。うぶな転校生をだまくらかして、我がクラブ初の女子構成員に仕立てるぞって意気込んでたじゃないッスか」
「オレを無視しやがった。あんなヤツはクラブに入れてやらん」

長らくこの学校でふんぞり返っていたダイチにとって、天沢勇子の行為は屈辱だった。この学校でダイチに歯向かえばどうなるのか、今から教えてやろうとしていた。
「じゃあ、あっちの転校生はどうなんスか？」
ナメッチがフミエの席の前の小此木優子を見ながら訊ねる。
「アイツはすでにブスエの仲間だ。我々の敵だ。最初にガッツーンとやっとかなければならん」
そう言ってダイチはキーボードを出す。まずは小此木優子の腕を見極めようというところだった。
「あ……な、なにこれ！？」
小此木優子は目の前に表示された手紙に気付いた。次の瞬間におびただしい数のバナーが開かれ始める。ダイチ得意のバナー攻めだ。授業中のいたずらとしてはうってつけの技である。案の定小此木優子はテンパっている。やはりメガネのスキルには乏しいようだった。
「うわっ、消えない！」
「このいたずらは！」
フミエはすぐに異変に気付いてダイチを見る。ダイチとナメッチはどや顔で笑い返してやった。
「ヤサコ、管理共有って言って」
「か、管理共有！」
小此木優子がわけがわかっていなさそうな顔でそう言うと、フミエはすぐに自分のキーボードを操作してたちどころにすべてのバナーを消し去り、手紙もメガビーで消滅させた。
「ふーん」
フミエもどや顔でダイチ達に不敵に微笑んだ。フミエがついているんじゃ小此木優子をいてこますことは難しいとダイチは思い、下唇を噛んだ。
「じゃ、この問題。天沢さん。やってもらえる？」
するとこのタイミングで天沢勇子が先生に問題を当てられた。ダイチは水を得た魚のように嬉しそうな表情に変わる。絶好機だ。天沢

勇子はテンパる姿をみんなの前で晒し、大恥かいてさっきの行為を後悔するはずだった。その姿を想像しながらダイチはキーボードを打ち込み始める。
「ん？」
黒板の算数の問題を解いている天沢勇子の目の前に、小此木優子の時と同じ手紙が現れた。そして無数のバナーが開かれ、瞬く間に黒板を覆い尽くした。天沢勇子は意に介していないようだが、果たしてそのまま平静を装っていられるかなとダイチはほくそ笑む。
「お手並み拝見といきましょうか」
フミエも天沢勇子には手を貸さず、そのスキルを試すようだった。
「んお？」
しばらくしてダイチはある異変に気付く。天沢勇子は平然と問題の解答を続けているのに、バナーは少しずつ減っているのだ。
「消えてく！？えい」
ダイチは本気出してキーボード打ちに取りかかる。これでバナーが開くペースも速くなる。なのに、天沢勇子の目の前のバナーはいっこうに増えていかない。普通ならここでメガネがパンクしているところだ。
「スピードは互角のようね」
フミエも少し感心したようにつぶやく。
「でも、答えを書きながらよ」
「あら？どこで操作しているのかしら？」
フミエも、そしてクラスのメガネをかけている生徒もうすうすこの異変に気付き始めていた。天沢勇子は一切メガネを操作していない。右手は答えを書いているし、左手も微動だにしない。足も動かしていない。なのに確実にバナーは減り始めている。
「どうやって操作してるんだ？」
「さあ？」
ダイチもこれには唖然とするしかなかった。天沢勇子がメガネを操作しているのは間違いない。しかし、一切操作している素振りがな

い。
「くそう」
ダイチはさらにキーボードを打ち込み始めるが、この時には開くより閉じるペースの方が速くなっていた。そうしてついに天沢勇子のバナーはなくなった。ダイチにとってはたまげるどころの騒ぎではなかった。
「お？それなんスか？」
信じられないという表情のダイチの後ろで、ナメッチが何かに気付く。ダイチの目の前にはいつのまにか3通ものラブレターが届いていた。言わずもがな、天沢勇子からだ。
「うわあ！？」
一斉に開いた手紙は恐ろしいペースでバナーを開いていく。ダイチもキーボード操作で消しにかかるが、手作業で閉じきれるものではないとすぐにわかった。
「ひい！？ひえええええええっ」
天沢勇子が問題を解き終わった時には、ダイチのメガネは白く煙ってパンクしていた。
「はい。天沢さん。よくできました」
マイコ先生が黒板の問題も完璧に解いた天沢勇子をねぎらう。
「3倍返しっスね。オヤびん」
ナメッチも初めて見るぐらい、ダイチの完敗だった。

「許せん。オレのメガネをこんなにしやがって」
「それにしても、アイツ全然手を動かさなかったッスね」
「そうなんだよ。手作業でしか閉じられないタチの悪いバナーを厳選したのに」
　次の休み時間、ダイチは1組のガチャギリも呼んで天沢勇子について相談していた。ガチャギリもダイチのメガネがやられたと聞いた時は驚いたが、ダイチ達の話を聞いていてあるうわさ話を思い出した。

「もしかしたら、イマーゴっていう隠し機能かもしれねえぞ」
「イマーゴ？」
ダイチが訊ね返す。
「メガネには公開されていない機能があってな。それがイマーゴ」
「へえ？」
「そんなの聞いたことねえぞ」
長らく大黒で戦いの中に身を置いてきたダイチであったが、それらしい話を聞いたことも、もちろんその使い手も見たことはなかった。
「ああ。なんだか不具合が出てな。使用禁止になったらしい。それをメーカーがひた隠しにしてるってうわさだ」
「で、一体どんな機能だ？」
ダイチが身を乗り出して訊ねる。
「それが、頭で考えただけでメガネを操作できる機能らしい。オレもそれを聞いて色々あたってみたんだが、うわさ程度の情報しか得られなかった」
ガチャギリの調査の甲斐なく、めぼしい情報はネット上に流れていなかったらしい。
「なるほど。さっきのアイツを見てると、そのうわさは本当のようだな。考えただけでメガネを操作できるのか」
「それがあれば、電脳戦争でも常に先手を打ちながら攻撃ができる。その転校生、仲間にしてその方法を吐かせるのもアリだな」
ガチャギリはその技に魅力を感じていた。何よりそのソースを知りたいという気持ちがあった。もしかしたら、天沢勇子はもっとすごい技を有しているかもしれないと思った。
「悪いが、アイツを仲間にはしないからな。オレを無視した上、メガネを破壊してくれたんだ。きっちりお返ししてやらねえと。それに見ろあれ」
ダイチが今席をはずしている天沢勇子の机をさした。見事に机がひっくり返って、ご丁寧にその上からイスがかけられている。
「やれやれ。あんな低学年レベルのいやがらせで自尊心を保とうと

するとは。『黒客』を始める前と変わんねえな、ダイチ」
「なんとでも言え。もちろん、後でメガネにもたっぷりと仕返ししてやる。その前に、少しずつ心を折ってやるんだよ」
ダイチの言葉にガチャギリは息をついて教室を出て行こうとした。どうも自分が王様じゃないとイヤなのはまるで変わっていない。あれも『黒客』結成前のダイチが気に入らない人間に仕掛けていたようないたずらだった。
「おお、そうだ。ガチャ待ってくれ」
「なんだ？」
ダイチが教室を出たガチャギリを思い出したように呼び止めた。
「今日の放課後アイツをいてこます。お前が新構成員に推薦してたアキラも試しに加えたい。後で声かけといてくれよ」
「わかった。言っとく」
そうしてガチャギリが出て行った後、入れ替わるように天沢勇子が戻って来た。そこで一瞬、教室全体が固唾を飲むような空気になる。天沢勇子はひっくり返った自分の席に歩いていくと、すぐにダイチ達をにらみつけた。ダイチ達はそれに陰湿な笑みで返してやった。

ダイチの天沢勇子いてこまし作戦は給食の時間にも決行された。今日はシチューを入れる当番だったナメッチに言いつけて、天沢勇子が来た時にシチューをこぼさせてやったのだ。
「あっ！」
驚いている天沢勇子にダイチとナメッチが畳み掛ける。
「あーあ」
「しっかり受け取れよ。転校生」
天沢勇子もこれにはさすがにムスっとした顔になった。
「あらどうしたの？」
マイコ先生がそれに気付く。
「コイツがこぼしたんです」
ナメッチはお玉で天沢勇子を指しながら言った。天沢勇子はまたわ

かっていたかのようにダイチをにらむ。
「そうなの？天沢さん？」
マイコ先生の問いかけに、しかし天沢勇子は反論をしなかった。ダイチはその瞬間勝ったと思った。
「じゃあごめんなさい、天沢さん。一応汚した人がきれいにすることになってるから、後でここ拭いといてくれる？」
「……わかりました」
ダイチはこっちも能天気な教師で良かったと思った。
その後、ダイチは床を拭いてモップを洗いに行った天沢勇子の様子を見に行った。
「へこんでるへこんでる」
「これで大人しくなりますかねえ？」
「いや、放課後もやるぞ」
ダイチは計画通り放課後に天沢勇子のメガネ破壊作戦を実行しようとしていた。この大黒市でトップに君臨する『黒客』を敵に回したのが運の尽きだったなと、天沢勇子のことを哀れんだ。

放課後、空いていたとある教室に乗り込んだ『黒客』はそこを本陣として構え、天沢勇子のメガネ破壊作戦を決行に移す準備をしていた。その時、ガチャギリが推薦する『黒客』の新構成員候補であるアキラが初めてダイチと顔を合わせた。
「ご、ご噂はかねがねうかがっております！ふつつか者の僕ですが、どうかよろしくお願いします！」
４年のアキラはダイチに会うなり、腰が折れるんじゃないかと思うほどの深いお辞儀をして、丁寧な言葉で挨拶をした。
「おいおい。そんな固くならなくていいぞ４年。しかし、お前があのフミエの弟とはな。まるで性格が真逆だな」
「アイツにこんな礼儀正しい弟がいたなんて思わなかったッスね」
アキラを見てダイチとナメッチが話し合う。この性格から、フミエに相当虐げられていることは容易に察しがついた。

「ま、問題は礼儀の良さじゃねえ。今日はお前の電脳力を見させてもらう。栄光の『黒客』に入会できるかどうかはそこから判断させてもらう。早速だが、天沢勇子を2階連絡通路におびき寄せるメールを作成してくれ」
「は、はい。早速取りかかります！」
アキラはもう1度頭を下げて、すぐに作業に取りかかった。
「で、今日はどんな作戦だダイチ？今回は作戦発案者のお前に全部ゆだねるぜ」
ガチャギリがダイチに訊ねる。いつもはガチャギリが作戦を立てるが、こんな小規模な戦いの立案をするのはさすがにめんどくさいということだった。
「今日は作戦も何もない。天沢勇子を連絡通路に誘い込む。そこをショートカットで囲い込み一気にミサイルを撃ち込む。以上。イマーゴっていう技を使えるみたいだが、おそらくショートカットなんて技術は夢にも知らないだろう。アイツのメガネはボロボロになり、明日からは従順になる。ついでにイマーゴの使い方も吐かせる」
「ダイチ、なんで今日転校してきたばっかりの子にそんなひどいことをするの。ねえ、やめてあげようよ。その天沢さんだって、話し合えばダイチのメガネを壊したことを謝ってくれるかもしれないし、『黒客』に入ってくれるかもしれないよ」
今日は学校での戦争ということで、珍しくデンパの姿もあった。そのデンパは今回の戦いにあまり気が進まないようだった。
「うるせえな、水を差すな。アイツに謝られたって、オレのメガネの修理代は返って来ないんだよ！」
ダイチが強い口調でデンパに言いつける。今日のダイチの燃えたぎる憎悪は誰にも止めることはできなかった。
「パケット料金はいくらになった？」
ガチャギリがそのダイチのメガネの修復代について訊ねる。
「あちゃー。お年玉換算で2年分ッスね」
ようやく修復が完了したところでナメッチが報告する。

「おのれ～。今度はメガネで3倍返しにしてやるのだ。おい４年！」
「あはい！」
意気込むダイチに急に声をかけられ、アキラは直立不動になる。
「メッセージは送ったか？」
「あ、はい。ちゃんとサーバーも職員室に偽装して、さっき送りました」
ちょうどその時、監視カメラが天沢勇子の姿を捉えた。天沢勇子はしっかりとアキラの偽装メールに引っかかって連絡通路まで来たのだ。
「ようし、仕事が速くてよろしい。ナメッチよりも使えるな」
「オヤビん、そりゃないッスよ～」
ダイチの言葉にナメッチは驚いて返した。アキラは「滅相もありません！」と謙遜して下がる。
「おい、来たぞ。そろそろ構えとけ」
息を殺したような声でガチャギリが言った。ダイチやナメッチ、アキラもキーボードを打ち込む準備を始める。
「先生、どこですか……」
天沢勇子もただならぬ雰囲気にこれが罠だと気付いたらしい。膝を緩くしてすぐに動けるようにし、意識を研ぎすませて周囲の気配を感じようとしている。
「ムダなことを。残念ながらそこにオレたちはいないぜ。ショートカットの切れ味思い知るがいい！」
ダイチが号令をかけた瞬間、『黒客』メンバーはスイッチが入ったように一斉にキーボードを打ち始めた。
「はっ」
天沢勇子はショートカットの攻撃が始まった瞬間に反応した。すぐに積まれていた段ボールの陰に隠れる。
「反応速かったな。でもここからだ」
ダイチはショートカットを一旦閉じ、また新たなショートカットを天沢勇子の正面上に開く。そこからまた直進君で狙ったが、天沢勇

子は素早い身のこなしでそれも避けきる。そこから次から次へとショートカットを開いてゆき、ようやっと天沢勇子の手にダメージを負わせることができた。
「いいセンスしてるぜあの女。避けるにしてもムダな動きがないし、避けられない攻撃からはとっさに手を出してメガネをかばいやがった」
「できるヤツとは思っていたけどな。単独での戦闘能力ではフミエの上を行くかもな」
そうガチャギリとダイチがそう話している間に、天沢勇子は鉄壁を出してショートカットの攻撃を阻んで見せた。
「このお！このお！」
『黒客』はここで力押しに出た。鉄壁にも構わずミサイルを撃ち込み崩壊を狙う。
「直進くんです」
アキラは弾の交換にまわり、ナメッチに新しい直進くんを渡した。
「おい４年。どんどん補給しろ」
「あ、はい」
「はいじゃねえ。ヘイだ」
「へ、ヘイ！」
ナメッチが『黒客』での返事をアキラに叩き込む。しかしそんな返事をするのは残念ながらナンセンスナメッチしかこのクラブにはいなかった。
「くそう。直進くんじゃ破れねえ」
「安物ッスからねえ」
ダイチはいらつき始めていた。相手に時間を与えるとどんな反撃が来るかわからない。
「追跡くんを出せ」
「ヘイ！」
しびれを切らしたダイチは切り札の兵器を投入することに決め、アキラに指示を出した。

「追跡くんは貴重品だ。もっと温存した方がいいんじゃねえか？」
ガチャギリがダイチに言う。ホーミング機能を備える追跡くんは、1発当たりの単価がべらぼうに高い。
「構わん！オレたちの本気度をあの女に見せつけてやるのだ！」
そう言うとダイチはアキラに追跡くんをセットさせた。直進くんの掃射を一旦やめ、1袋分を撃ち出す。
「いけえ！」
5発の追跡くんは鉄壁の下をすり抜け、天沢勇子めがけて飛んで行く。天沢勇子もこれには歯を食いしばりながらなんとかしゃがんでかいくぐり、2発のミサイルは段ボールに直撃して散っていった。しかし残り3発のミサイルはUターンして再び天沢勇子を狙う。そこで天沢勇子はそのうちの1発に何やら投げつけた。するとそのミサイルは爆発し、連鎖的に残りの2発も爆発した。しかし間髪いれず新たに4機のミサイルが鉄壁をすり抜けて飛来する。天沢勇子が新たに出現させた鉄壁の上をすり抜け、Uターンしたミサイルのうち1機は天沢勇子の手に直撃した。ところがダイチ達の見ているレーダー上では残りの3機がヒットしたのかどうかはわからなかった。
「当たったか？」
「わからねえ」
「1発いくらだ？」
「1発200メタッス」
「値切ってか？」
「値切ったッス」
「あー世知辛いぜ」
ダイチは思わず息をついた。今の一瞬で1800メタ分を消費した。にも関わらず天沢勇子のメガネは破壊できなかった。
「追跡くん、1袋使い切りました。最後の袋も出しますか？」
アキラがショックを受けているダイチに訊ねる。
「いやそれは待て。おいまだか？鉄壁のハッキング方法」
ダイチがガチャギリに訊ねる。やはり鉄壁を取り除いて直進くんで

攻撃しようと方針を変えた。
「近い方法は載っているんだが」
従来の戦争では相手と対峙をしながら戦っていたので、鉄壁を取り除くなんて悠長なマネはしていられなかった。だからガチャギリもその方法は身につけていなかった。
「これ、これを応用すればいんじゃないですか？」
「ん？ああ！そうか」
アキラのアドバイスでガチャギリもその方法を思いついたらしい。やはりアキラは使えるなとダイチは思った、
そうして鉄壁を取り除いたが、そこに天沢勇子の姿はなかった。
「いねえな」
「連絡通路からこっちはオレたちのテリトリーなんだ。逃がさんぞ」
そうして丹念にレーダーを調べてみたところ、天沢勇子の位置が判明した。そこに改めてショートカットを開いて直進くんを撃ち込もうとする。ところが直進くんを撃ち出すよりも早く、開いたショートカットに今度は天沢勇子がいびつな図形のような記号を投げつけてきた。
「な、なんだこりゃ？」
投げつけられた記号は黒客本陣の空間に広がった。ダイチは得体の知れない攻撃に慌ててしまう。しかしダイチの目の前に不正なアクセスを拒否したという表示が現れ、記号は虚しく崩れ落ちて行った。
「防壁が阻止したぞ」
「今のは、最近あちこちの道路に書いてあるやつだ！」
アキラが驚いたように言った。メンバーも少なからず今の図形を目にしたことがあった。
「防壁を通らなきゃ問題ねえ」
その時天沢勇子がカメラの向こうで新しい鉄壁を出現させた。
「それで隠れたつもりかよ。やれ！」
ダイチの指示により、ガチャギリとアキラが先ほど身につけた方法で鉄壁を取り除く。

「直進くんを撃ち込め！」
ダイチが叫んでその場所に直進くんが撃ち出される。ところが攻撃に夢中のダイチ達の気付かないうちに、足元から天沢勇子の暗号の魔の手が忍び寄っていた。ナメッチの脇に置いてあった未開封の直進くんの袋に暗号が到達すると、袋は暴発を起こした。
「びえええええっ！」
あまりに突然の出来事にダイチは心臓が止まりそうな思いだった。
「お、お前何やった？」
鼻水たらしてメガネから白い煙が吹き上げているナメッチにダイチが訊ねる。
「メガネが、壊れました」
情けない声でナメッチが報告する。これにはガチャギリやアキラも茫然とした。
　直後に教室全体にノイズが走った。ダイチは辺りを見回しながら敵の仕業かと勘ぐる。
「この空間がハッキングされている！」
ガチャギリの肩やデンパの頭もバチバチと文字化けを起こす。
「一体どこからハッキングしてる！？」
「アイツのいるドメインからのアクセスはすべてはじいてるぞ！」
「攻撃は2カ所からです！」
ガチャギリとアキラがすぐに報告する。ダイチにはその攻撃の心当たりがあった。
「おのれ！1つはフミエに違いない！ヤツら結託したんだ！」
「違います。見てください！」
アキラがすぐに映像を出す。するとフミエと小此木優子はダイチ達の予測したドメインとは無関係な場所にいた。
「全然違う場所にいるなあ」
「じゃあ、どっちが本物だ？」
すぐに敵の位置について調べると驚愕の事実が判明した。
「んなバカな！アイツ分裂したのか！現実の場所はどっちかわかる

か？」
レーダー上では天沢勇子のマークは２つある。どちらかが本物だとダイチは確信した。
「偽装している！やってみるが、ヤツがボロでも出さない限り見つかるかどうか」
ガチャギリの苦しい表情に、ダイチは別の手も使おうと考えた。
「ナメッチ！」
「お年玉、２年分……」
声をかけられたナメッチはメガネが壊れて半ば放心状態だった。
「ナメカワ！」
「ヘイ！」
ダイチが耳元で怒鳴ってナメッチはようやっと正気に戻った。
「お前！メガネないんだから足で稼げ！ヤツのメガネを取り上げてこい！」
「へ、ヘイ！」
泣きそうな声でナメッチが飛び出して行く。電脳戦争ではタブー化されている行為だが、相手の得体の知れない力に気圧されたダイチはなりふりかまっていられなくなっていた。
　ダイチ達が必死こいて天沢勇子の位置を特定しようとしている間、ナメッチは彼女の姿を校舎の中をくまなく探していたが見つけることはできなかった。そうしてダイチのもどかしさが極限まで達した時、おかしな事が起こった。ダイチのレーダー上に天沢勇子の位置が現れたのだ。
「あれ？場所がわかったぞ。１階の元理科室だ」
「なんだって？なんでわかった？」
「なんでわかったんだろう？」
ガチャギリが不思議そうに訊ねるが、ダイチはもっと不思議な気分だった。その間、ダイチの座る机の下に開いたショートカットから、毛糸玉のような生物が続々と『黒客』本陣に乗り込んできていることにメンバーは気付いていなかった。

「ショートカットは繋がってるか？」
「あります！」
「ようし、とっておきを出せ！」
「ヘイ！」
ダイチはアキラに言いつけて残りのミサイルをそこにつぎ込もうとした。しかしアキラは武器を収めていたカバンの中を見て驚いた。
「あれ？な、ないよ！」
「なにっ！くっそ！ナメッチに電話して……ああ！メガネないんだアイツ！」
ダイチはもう収拾つかなくなってきていた。何が起こっているのかさっぱり理解できない。次の手を考えるのも乏しい頭ではかなわない。そんなダイチの行き着いた作戦はこれだった。
「直接行くぞお！どてかましたれ！」
そう叫びながら飛び出したダイチを追ってデンパもついて行く。
「ウウォーリャー！」
切れ者ガチャギリも、これしか打つ手はないとダイチの後に続いた。
「だあっ！ま、待って～！」
のろまなアキラはこけながらダイチ達の後を追った。

「イ、イサコちゃん？いまーすか？」
ダイチ達より一足先に元理科室にイサコを探しにやって来たナメッチ。そこでちょうどいいところに無造作に置かれてあった教師用のメガネを見つけた。早速かけてみる。
「へへッ。使えるかな？」
電源が入ってＯＳが起動し、ナメッチは視線を上下に動かしてみる。すると足元から先ほどの記号が不気味にナメッチの体を這い上がって来るのが見えた。
「いいやあああああ！！」
教師用のメガネは起動してから３秒でクラッシュしてしまう。ナメッチもこれにはへたり込んでしまった。

ちょうどその時、ダイチ達も元理科室前に到着した。
「残りの武器はこのかんしゃくだけだ。落とすなよ」
ダイチはもう音でビビらせて相手がひるんでいる隙にメガネを取り上げるつもりだった。ガチャギリとデンパにかんしゃくを分け、中の様子を確認してからなだれ込む。
「突っ込めえええええ！あ！」
部屋に乗り込んだダイチ達の目の前にはいくつものショートカットが口を広げて待ち構えていた。唖然として何が起こっているのか頭で飲み込むより先に、無情にもショートカットからミサイルの一斉掃射が始まった。
「うわあああああああ！！」
ダイチはどこか遠くの方でカラスが鳴いたような気がした。

『黒客』は散った。
大黒市を制覇した後、ダイチは新たなる強敵の出現を待ち望んでいたが、それも叶わぬ夢かと思い始めていた。しかしその強敵は意外なところから現れ、完膚なきまでに『黒客』を叩きのめしていった。これは『黒客』が喫した敗北の中でも、最も無様なものだった。
そして『黒客』の運命の歯車はこの日を境に大きく狂い始めた。天沢勇子は後に『黒客』を乗っ取り、そして大黒電脳界で一時代を築いたダイチは追放されることになる。

しかし、『黒客』の戦いの軌跡が色褪せることはない。天沢勇子の運命に巻き込まれその形を変えようとも、戦友達の胸の中には共に戦いに明け暮れた日々の記憶が刻みこまれている。彼らはその記憶に奮い立たされて様々な困難に立ち向かっていく。
彼らが再び結集したのは翌年の春。そこからまた新たなる『大黒市黒客クラブ戦記』が紡がれていくことになる。

『大黒市黒客クラブ戦記』（完）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3767m/

大黒市黒客クラブ戦記

2010年10月9日14時13分発行